

し禮拜によりて神の心を動し、以て神は自らを人類に示現して、親しく之に近くも
 の信仰を表彰するものなれば也。かく神と交通して其心を高尚にし多福ならしめ
 たる經驗は、これ全く神が人類に顯はしたるに基くものと信じたれば、敢て悉く不
 當のことにもあらざるなり、故に人は其宗教上の經驗を以て、悉く神の直接なる啓
 示の結果なりと信じたり。斯の如き信仰は強ちに道理に相反するものにあらず、則
 ち人の宗教上の經驗は、神の客觀的啓示に依るものにして、古來人類が此啓示を解
 するに當り、神が或る場所若しくは或る時期に於て、自らを人類に示現したるもの
 と信じたり。神は或る方法により外形的に己を顯はし、或宗教上の儀式若しくは禮
 拜を設け、或ハ尊き眞理を示し又教會に對し、人類が永遠に遵奉すべき諸の行狀と
 信仰とに關する律法を、其使者に依て授けたるものなりと信ぜり。是等の聖なる記
 事、是等の天啓に關する聖なる歴史、是等の聖なる儀式、表號、教義、及儀文等は、神を信
 ずるものが神と昵近し神と交親する、重要なる方便とはなりしなり。去れば人類が
 其内心に於て受けたる、神の天啓の眞理を直ちに是等の外形の事物に移し、是等は
 神が直接に奇跡を以て超自然的に授け給ひしものと主張するは、甚だ自然なるも

のと信ず、然れども人類の智性は神の天啓に關する諸の傳説は其の記乗せると否
 どに據はらず、甚だ怪疑に堪へざるもの多く、或は全く不道理なるあり、亦神の啓示
 として拜受すべからざるものあり、中には彼此撞着矛盾する痕あるを發見するに
 至れり。凡そ宗教ハ齊しく其起原を神の天啓に發し、其口碑に含有する眞理は、完全な
 りと主張なる權利を有すると雖も、是等の夥多の口碑中に彼此撞着矛盾するもの跡
 なからざれば、吾人は其孰をも完全なる天啓の眞理を有するとは容易に信じ能は
 ざる所也。最後に於て諸の口碑中には其起原全く人爲に出で、其中に含有する昔諺
 を作爲したる歴史的事情、若しくは境遇の影響、若しくは其書の出たる時の世論、若
 しくは是等を記したる詩人、豫言者及使徒等の特性及位地等に影響せられたる痕
 跡あること明瞭也。若し深く是等の穿鑿を遂る時には、其の口碑中に人間の分子と
 歴史上の事情等相混入し、以て其の基礎をなす事あるを明悟し得べし。此故に信仰
 にのみ偏倚する超自然論者が、神の直接なる天啓なりと唱道するもの、中には、吾
 人の智性は寧ろ間接なる天啓なりと認めざるを得ざるものあり。若し一步を進め
 て論せば、是等は全く天啓にあらず、其中の眞理は普通の眞理と異なることなく、唯

詩人、豫言者及其の他の者か作爲したるに過ぎずといふに至るものなり。斯の如き正理論と古代の信仰を墨守する超自然論との互に反對あるは、獨り基督教會に限らず、亦近世の出來事のみにもあらず、孰れの時代に於ても、孰れの宗教に於ても其國民が稍文明に進涉し其知識の上達に従ひ、舊來の信仰と衝突する時に於て必然現出する現象也。今其適例を擧げんに希臘の詭辯論者が、當時の普通人民の間に行はるゝ宗教を排撃し、其人民の信ずる諸神に關する教説の起原ハ、皆悉く人の作爲にありとなせしか如し、彼等は普通人民の信仰する諸神は、古昔の歴史上の人物を神と見做して、之を誤解したるに起りしもの歟、若しくは僧侶或は時の執權者が自己等の利益を商り、斯の如き教説を製作して之を信せしめたるものならんや云へり、彼等は其主張する持論の正確なるを證せんが爲に、夫の諸神を祭る儀式及之に關する教説は、時と處に依り數々其趣を異にす、是即ち其起原は人の製作なるを證明するに足れりと斷ぜり、中古ホーヘンスタフェニス (Hohenstaufens) の時代に、文運大に進達したるの結果として出たる正理論は、稍々希臘の詭辯論に髣髴せり、今其一端を顯はすものは、夫の「三人の僞者」と題する昔譚の一書なり、而して竟に此正理論

は、レナイザンス第十七世紀文華隆盛の時代の時に於て極端なる異教論に陥りたり、又近世に及びても往々英、佛、獨の間に於て等しき現象を見る事あり、英には「ヂイム」佛には「ナチュラリズム」獨には「ラシオナリズム」となりて顯れ、其形狀各異なりと雖も其本質に至りては同一也、而して「ラシオナリズム」と云へるは歴史上孤立したる現象にあらず、則ち文明の或る程度に於て常に出現する一個の原理にして、強ちに之を排斥すへきものにはあらざる也、正理論者が凡て宗教上の事物は道理に基くものなれば、吾人は之を道理に訴へて解釋し得べしと主張するは當然の議論なり、彼等は天啓中の主觀的分子に最も其重きを置き、超自然論者が天啓は純乎たる神の動作にして、更に人心の助援によらず、又其制限をも受る事なしとの説に反對す、而して總て心意中の出來事、即ち意識の要素となるべきものは、一として其心意自身の働きに依らざるはなし、故に心意の性質及其心理上の理法に従ひ、又其形式も各個の心意の特質に應ずべきものなりと主張す、然れ共一度此説を容るゝ時は夫の機制的天啓論、即ち天啓を受くる時に於て人の心意は、恰も生氣なき器物の如く、神之に天啓を注入し又は其人の口舌

を機械的に使用して天啓を授け給ふとの説を排斥せざるを得ず、天啓果して人の心意に屬する自然の制限を蒙るものとせば、或特殊の天啓の結果を擧て絶對的に完全無謬の眞理なりと主張する事能はざるべし、何となれば完全無謬なる天啓は必ずや純乎たる神の動作のみに依頼し、更に人間の動作を交へざるものたらざるべからず、苟も人の心意の動作に憑依するところあらんか、其制限と不完全とを分有するは必然なり、吾人は之を歴史に徴して眞に其然るを證明するを得べし、未だ世に絶對的に完全なる天啓ありて、一步も歴史的進歩の餘地なきものあるを聞かず、彼等超自然論者と雖此の事實を拒否する事能はず、彼等は之を解釋するに神の天啓を授くるや、人類の力を量り之に相應すべき方式を以てせりと、然れども斯の如き議論は余輩が嚮に述べたる如く、天啓には人の意は神と偕に共働し且其動作を制限するの一要素なりといひしを、遠廻迂曲して承認したるに過ぎず、又正理論者が總て道理に反し人の想念の理法に照じて考証し能はざるものは、決して天啓にあらずと主張するは敢て失當の言にあらず、吾人の理性と良心とは、素と神が吾人の本性に栽培したる天啓也、故に世に天啓と稱するもの、吾人が理性と良心と

衝突するが如きことあらば、これ即ち神は一の天啓を以て他の天啓に反對せしむる所謂神自身に於ける自己撞着なれば固より斷じて有得べからざる事也、故に道理と良心に反對するものは、神の天啓に非らずといふを得べし、而して吾人の智性を以て了解し能はざる教義は、吾人の心の所領となる能はず、又教義中にて之に明晰なる意義をも附する能はず、否一個の意義をも附する能はざるもの、如きは、吾人は唯命令的に權威に壓せられて受納するを得べしと雖實際に於ては更に吾人を益するところなし、固より之を以て吾人の救済及吾人の進歩をも計ること能はざるべし、故に余輩は將に云はんとす、救済に關する天啓にして其の容量は了解し難く、其意義は不可思議なるものあらば、これ實に甚だ道理に撞着する者にして、其天啓は一物をも顯はさず、寧ろ一切の事物を黯黒裏に埋没せしむる者にて、吾人の救済に關しては一の利するところあるを見ず、却て吾人が宗教心を冷却せしめ、且大なる疑問を惹起するが如きとあるのみ、世の宗教家が彼等自らも了解し得ざる教説を以て、強て他人に信ぜしめんと欲するは、一見酷だ其意の存する所を解するに苦む、然れども、情々之を研究すれば亦一理なきにもあらず、かゝる了解しがたき不

可思議なる教説は、是れ即ち人の宗教心に於て直覺し實驗する事柄を不完全なる、否、寧ろ不適當不都合なる文字を用いて之を表彰せんとする者なり、されば神學者の責任は、是等の不可思議、不適合なる教義中に隠伏する宗教上の眞理を探見して、之を世に表明するにあり、然れども世の宗教家は神學者に許すに是等の探究を以てするを好まず、さればとて彼等自らは素より其の任に當り得べき者にあらざるなり。

世の所謂正理論者も亦右の問題を正覈に解釋する力を有せず、彼等は未だ正理論法を合理的に使用するの道を知らず、換言せば彼等の思想は、寧ろ皮相に陥り、狹隘なる主觀的に泥む者なり、彼等は人類の理性は一二の茫漠たる總念にありて存するが如く思惟し、而して其總念は彼等が現今存する所の宗教及道義の觀念より演繹し來りたるものなり、又彼等は之れを以て原始より人類の常に所有するところ、且其の不變不易なること恰も數學上の原理の如しと思惟し、又正理論者は凡宗教の第一に關係するものは、知識上の總念にあらず、寧ろ心情の實驗、意志の動作及感情の状態なることを看破し得ざる也、然り、而して是等の動作は人の内心に於け

るの事實なれば、複雑なる社會の進歩と共に發生するものにて、固より原始より人類に附屬し、永代不易のものにあらず、正理論者は宗教も亦他の心意的動作と等しく必ず理性に適合せざるべからずと云ふ、これ固より當然の論なり、然れども彼等が第一の誤謬は、宗教に於る理性は最初は理論的にあらず、寧ろ實際的若しくは感情的にして即ち想念の理性にあらず、寧ろ心情の理性なることを悟らざるにあり、第二の誤謬は、抑理性なるものは始より完備して人性に固着するものにあらず、理性は唯これ一個の作用のみ、人をして道理に向はしむるの動力のみ、而して其形造は人類の全体の心意的生活と共に成就するものたるを悟らざるにあり、第三は人の宗教心は理性の動作の中心點に位するものにて、嘗に一個人の心情のみに止まらず、亦人類全体の歴史に於ける複雑なる經驗の湊合する所なれば、其發達は獨り人類の力に係るのみならず、必ず人類以上に係ることあるを悟らざるにあり、即ち宗教の發達には其最終の原動力は、吾人が理性の根本又は其源泉たる神の智慧と愛とに存することを悟らざるものなり、去れば右に述べたる如く、心理上歴史上及哲理上より觀察するも、普通の正理論者の議論は余りに抽象的に過ぎ、偏頗狹隘に

して宗教の眞理を解釋するには、太だ不完全と云はざるべからず、彼等は獨り其名義に於て正理なるのみに止まらず、實際にも今少しく合理的に物を研究するの法を講せざるべからざる也。

余輩が前條述べ來りたる豫言者が有したる天啓の感識につき、其特質なるものを是より陳述すべし、先づ豫言者の心中に顯はれたるものは新思想なり、彼等は之を他より學びたるにあらず、却て彼等の周邊に圍繞せる人輩の思想とは大に相違し、否、從來彼等自身か抱懐し來れる觀念、見解等にも大に齟齬する所ありき、又彼等が此新思想を得たるは、必ずしも專恣的考察、若しくは辨證的想念及攻究に依るにあらず、寧ろ直覺力に依りて感識したるものなり、而して此新思想は突如として彼等の心中に湧躍し、何者か之を注入したるもの、如く、其原因は自己にもあらず、亦其周圍にもあらず、恰も心中の不可思議なる幽玄より迸逸し來りたるもの、如し、故に彼等は之を以て神の所業、神の言辭なりと思惟せり、抑此新思想の容量たる、普通偶然的の知識にあらず、又神及宇宙に關する理論的の教義にもあらず、寧ろ人生の最も緊要なる神と人類との關係、又神に對する人類の義務等にて、凡そ人類の宗教

的及道義的生活の新理想たり、此故に其關係する所は皆に人類の智性のみならず、意志及び感情も共に感動を受くるに至る、かゝる大なる新思想に接しては、彼等の心は震動戰慄して止まず、又其舊來の思想と今や俄に得たる新思想の間に痛苦ある衝突を惹起し（パウロの如き）、或は難を避け苦を厭ふ人心自然の感情と、新に授けられたる神の命令を遵奉すべき義務心との争闘を來す事あり（エレミヤの如き）、然れども眞理と義務の力は終に勝を制し、全心を擧て新理想に服従し、従前に分離散亂したる心は一に其新理想の上に鐘り、其心には豫想外の平安及人類以上の力を得たるを感觸する也、斯の如き感情は是即ち神の爲せる所業なりと認むるにより、彼等は之を以て自ら主張する所の眞理は、神の眞理にして、己は神の使者なりとの確信を得るに至る、これ所謂人類の心に於ける聖靈の證也。

上來説く所の新なる見解、感情及意志の動作の如きは、是皆新奇の現象にして其原因又人類にあらざると明白なりと雖も、之と同時に吾人か忘るべからざるは、是等も亦全く舊來の状態と無關係のものには非らず、寧ろ其歴史的發達の結果として終に茲に達したるの跡あるを見る、凡そ天啓なる者は決して偶然又は無原因に起る者

に非ず、必ずや其原因は歴史上の事實及經驗にあり、而して其事實及經驗は感受的にして且高潔なる人々の心に一種の宗教的感動を惹起し、之をして活潑なる獨立の運動を爲さしめ、竟にかゝる新なる感想を起すに至らしむ。此等歴史上の事情は其種類多端なりと雖も、吾人が大抵熟知する所の重なるものに就て之を探れば、總の天啓に存する普通の形狀を發見すること難からず、譬へば神の民たる「イスラエル」人が國歩艱難の時に於て大なる忠苦に陥り、將に國家を擧げて滅亡せんとせる大難は、「イスラエル」人の感情及其信仰希望等には、頗る撞着するものにして、彼等の宗教心より之を見れば恰も「スフィンクス」の謎語たり。若し此謎語を解融し、此撞着を調和せざれば、彼等の心は全く黯黒界に彷徨するの危に當り、軟弱者は徒に此謎語に眼を閉ぢ、其位地の太だ危險なるを隠蔽し、只管平和なり平和なりと叫びて遂に滅亡に至る。然れども其硬骨者は之に向ひ更に眼を閉つるの卑屈なく、寧ろ明白忠實に之を認め、實際の事情は人民一般の信仰と大に撞着するものなるを隠蔽せず、然れ共尙自己の確信を失はず、此世の歴史には道理なるものありて之を支配し、又此世に於ける神の支配は眞理と正義に依る事を忘れざる也。故に彼等は此撞着

の難題を解釋せんと試み、之か爲め其宗教上の見識愈々高尙に進み、神の聖き性質と意志とに關し、又神の民の義務に關する事情に就き、一層高潔なる見解を得るに至れり。余輩は今其一例として豫言者「イザヤ」及「エレミヤ」の事蹟を引證するを要せず、使徒「パウロ」は前兩者と稍異なる處あれども、亦大に之に類似したる所あり。此時に當り「パウロ」の心に新しき天啓を與へたるの歴史的事情は、彼が一般の「パリサイ」人と共に抱持したる希望と見解とが、甚しく當時の實際に撞着したるにあり。當時基督信徒は十字架に深けられたる耶蘇は神の遣し給へる「メシヤ」と云へり、然れども斯の如きは「パリサイ」人が常に希望したる「メシヤ」の王國の理想とは、全く撞着せり。然るに一方に於ては基督信徒の言行、及彼等が其信仰を確守し、之が爲には敢て死を辭せざるの勇氣は、深く「パリサイ」人たる忠實なる「パウロ」の良心を感動し、彼が懷抱せる義人の理想に適合し、又彼が義を慕ふの素意を満足せしむる所ありき。此の撞着は實に是れ「パウロ」の胸裡に横りたる一大難問なりき。彼は幾多の苦心焦慮を以て此難問を排除せんと試みたれども、竟に其志を達する能はざりしが、一たび神の子の天啓を其心に蒙るに至り、釋然之を解得し、其の子に依て世を己れと

和がしめんと欲し給ふ恩恵ある神を知るに至れり。

以上述べたる例に依て、第一に天啓は單に外形の歴史的事情にあらざること明瞭なり、一般の人には歴史上の事情は別段深き意味を有する者にあらざれども、是等の歴史上の中には一種の原動力を存せり、其力は潔白にして高尚なる宗教心を有する者の中に、宗教的反動を惹起し、更に一種の感識を喚發す、其感識よりして種様なる世界に關する宗教的新見解、及人生の新理想を發揮するもの也。一方に於ては固より歴史上の事情なくんば、斯の如き新なる感識は起らざれども、一方に於ては若し其中に一種の能力と材料なくんば、如何に外形の歴史上の事情あるも、是等の新感識を隠起すると能はず、即ち其能力とは彼等の有する自然固有の宗教心也、或は之を名けて良心とも、宗教心とも、理性の衝動力又は其他の名詞を附することあるべし、而して其材料とは從來の宗教及道德上の感情及意志の動作に依りて得たる感識の結果なり、抑觀念若しくは自信との如きは、其人の心の動作を待たず、外方より之を注入し得べきものと考ふるは、これ甚しき誤謬の極なり、并は決して固有若しくは瞬時に他より注入し得べきものにあらず、又如何なる奇跡を用ふるも其人

の心の動作を離れてかゝる觀念を與ふるものにあらず、寧ろ心の種々なる能力の聯合して運動したる結果也、固より其關係は其心の感識中に明に顯はるゝものにあらず、唯冥々の中に在て其結果を外面に顯はすに過ぎず、これ皆に新なる思想の發する時のみに限らず、已に當時の社會に行はれたる眞理を、或は先人に質し、或は書に依りて習得するに於ても、自己の思想をして大に活動せしむるにあざれば、之を己の所有となすこと能はず、已に先人が感得したるところのものも、後に之を學習する人は自ら之を経験し、始めて其眞理を會得し得るもの也、故に新なる思想を發すること、從來世に傳布せる古き思想を學びて之れを會得すること、即ち豫言者の如き、或は詩人の如き、思想界の偉人と、凡庸人との間には大なる徑底あれども、其徑底は必ずしも絶對的にあらずして相對的たること明白也、凡そ世に傳來せし眞理を學で之を會得する時には、その學ぶ人は大に自己の力を活動せざるを得ざるにより、如何なる凡庸の思想中にも多少新發なる分子を含まざることなし、而して其の最も新發なる思想と雖も、一方より之を見れば未だ悉く新規なりと云ふべからず、寧ろ天稟の奇才を有したる偉人が、其先人の動作に依て蓄積せし諸の眞理

を自己の腦中に於て、新しく組織構成したるものに過ぎず、かゝる奇才の動作により先人の賜物を擴張して、先人が未だ知らざる處を知り、先人が未だ見ざる處を見、また之に依て自己の品位を高め、併せて其周圍の社會全軀をも高尚の域に達するを得せしむ、然れども斯の如き奇才が如何に高尚淵達なる見識を得て、又如何に偉大なる動作を顯はすも、必竟先人が蓄積せし思想の力に依らざるはなし、反言せば如何に新規の思想と雖も、皆是れ舊來の思想觀念の助力に依らざるものはあらざる也。

偉大なる人物は、假令如何に高大なる識見を有し、如何に鋭くべき大事業を爲すの力を有するも、尙其時代と其境遇とに密着なる關係を有す、否、寧ろ其境遇と時代との産兒なりと云ふを得べし、是れ其の當時に於ても、又後世に於ても、非常なる勢力を以て人心を感動し、世代を震動するを得たる所以、而して其の弱點も亦茲に存す、これ其の思想に歴史的の制限ある所以なり、假令如何なる大人豪傑と雖も、到底時代の産兒たるを免かれず、彼等の思想の迸る處、彼等の觀念の發する處、彼等の意見の出る處、彼等の事業の目的とする處、彼等の動作の有様、及其の材料等を仔細に調

査し來れば、總て是れ彼等各其時代と境遇とに密着なる關係を有し、寧ろ其時代と境遇より懷惻し來れるを悟るべし、時代と境遇の關係、之に依て其思想、目的及事業等に多少の制限あるは、即ち是等の人の品性に特別なる形狀、又は多少偏倚したる點ある所以也、大凡歴史上に顯はるゝ人傑に、かゝる傾向あるは數の免るべからざる處にして、基督教の内外を問はず、總て宗教の歴史は他の一般普通の歴史上の理法と差異することなきは、夫のパウロ或はルーテルの如き人物に於ても明悟し得べし、斯の如き偉大なる人物より、其特質及其境遇に依て形造されたる状態を除却せば、是れ其命と其力とを彼等より奪ひ、全く詩歌的に捏造せし人物と變せしむ、此の如く已に歴史的の制限ありとすれば、彼等が世に輸入したる天啓、即ち道德及宗教上の新なる思想、觀念は固より絶對的に純潔なるものにあらず、當時に適應する形軀を以て顯はれたる者にして、其状態は社會の進歩するに従ひ、常に變更せざるを得ざるものなれば、其天啓に抱畜する眞理は、相對的の價值あるものと云はざるべからず、かく歴史的の制限あるは、是れ彼等に勢力あり、其事業の歴史上に偉大なる結果を印したる原因也、彼等は其時代の産兒なれば、其傳ふる處の眞理は當時の

人に了解せられ、當時の人心に反響を生せしむ。若し夫れ宗教界に於てかゝる偉大の人物が発見する大真理にして、人の本性に基かず、彼等が生活せし時代の歴史的事情に關係すると無くんば、其真理は如何に高遠に、如何に玄妙なりと雖も、恐く之を了解するものなく、况んや天啓也と稱し謹肅して之を遵奉するものあらん、唯彼等の言詞は無用の長物たるに止るのみ。然り若し天啓は之が媒介たる奇才偉人の固有の天性、及其心意的生活の歴史的境遇より全く乖離して理會する事能はざるが如く、彼等が輸入する天啓の結果も、之を受くる當時の人の性情と多少關係を有するにあらざれば、如何にして之を了解せしむるを得ん耶。彼等は素より奇才なり一種異常の人物也、然れ共、彼等ハ又當時の人の未だ意識に現はれざる理想的傾向を代表するものたらざるはなし、而して彼等の心を鼓舞刺動し以て宗教及道徳上の大真理を発見するに至らしめたるものは、則ち多數民人の難澁苦惱と前に陳べたる時世の謎語なり、故に彼等が此真理を発見するや、獨り自己の爲のみならず、又一般民人の爲に之を発見す、其真理は彼等の心中にも朦朧と反映し、或は既に其光を認めて之を翹望せるものもあらん、故に天啓は如何に新奇なりと雖亦全く當時

の人の豫思外に出るものにあらず、寧ろ之に依て時世の謎語を解釋するの言辭を得、又從來社會の深底に沈流せる理想の潮流は、今や之れに依て其の表面に現はれ來れり、世の奇才偉人と稱せらるゝものと時世の關係に就ては、トーマス、カーライルの語中頗る適切なるものあるを以て、今之を抄譯して余が説に代へんとす、曰く、彼(神靈的偉人)が唱ふる處は、普通一般人の將に唱へんと欲して未だ唱ふるに至らざりしところのものなり、而して彼等の思想は俗も魔睡より醒めたるもの、如く、乍ち彼が思想の周邊に哀集し來り、之に答へて然り、寔に然りと叫ぶものなり、彼の詞は、恰も闇黒の夜明けて東天に旭光を認るが如し、是れ豈に彼等には無より有に達し、死より生に回りたるが如き感情を興ふるものにあらず耶、吾人はかゝる人物を尊敬して詩人若しくは奇才偉人と呼ぶ、然れ共、彼等蠻族は之を以て魔術者、奇蹟、異能に依て彼等に福祉を興ふる者、彼等の豫言者又彼等の神なりと信じたりき、一たび覺醒したる思想は再び眠ることなく、漸々進化して一個の組織体と變じ、人より人に傳り、世より世に遷りて遂に其發育を全ふするものなりと、右に述べたる如き新現象は、其顯はるゝや、從來世人の了知したる處とは、全く反對

するが如しと雖も、深く之を吟味せば、是亦同一なるもの、新しき形態を装て、同一なる生活の理法に従て現出したるものなり、即ち其者の生活の進行に於る進化の特種なる一階段たるに過ぎず、故に余輩は將に云はん、凡宗教及道徳上の新なる理想を顯はす眞誠なる天啓は、人性の中心たる道徳と宗教に關する發達進化の一個の新階段を表彰するものなりと、而して進化てふ總念を正當に解釋せば、其内に兩側面あり、一は舊物が全く一變して新規となること、二は其變遷の間に一定不變なる關係の存すること、詳言せば其物の以前の有様と爾後の有様とを、連環鎖結する變化の理法を其間に存すること是れなり、此理法の結果として前者は後者の原因にて後者は又前者の結果なるなり、若し第一の側面を看過し去る時は、眞誠なる進歩、活潑なる發育を其中に見出すこと能はず、或は後なる高尚なる生活の形狀を以て、原始時代の初歩の狀態に低下せしむるか、或は之を以て原始に輸入し元始の狀態を法外に高尚なるものと見做すの弊に陥る也、孰方の弊に陥るも齊しく眞誠の歴史を誤解したるものと謂つべし、第一の誤謬は自然に偏し、第二は理想に偏す、若し第二の側面を看過し去る時は、前なる階段は後なる階段を指示するものなり、

り、歴史は前後無關係なる偶然の事變が、奇態に連環したるものにして、其間原因なく結果なく、更に了解し能はざる即ち奇跡と變化し去るものなり、或は此前後の關係を結合せしめん爲に、神の攝理を假定するものなきにあらざれど、こは純然たる理想にして亦純然たる假定に過ぎず、固より歴史上の事變に對しては全く外形的の者にして、其關係を物に譬へば、恰も人の骨格を集め鐵線にて之を結構したるが如し、斯の如きは夫の血肉ありて自然に組織せる人脈を去るや遠し、凡そ學術の要は事物の變化の關係、即ち自然及心靈的生活の發達の順序を眞實に了解するにありとせば、前述の二個の誤謬は學術をして其動作を全ふせしむること能はざらしむる者也、宗教上に於て夫の「ラッシュヨナリズム」正理論及「ホジチピズム」夫の「リツヂル」等の實驗學派の如きは此二個の誤謬を代表するもの也、前者の誤謬は宗教には歴史的の生活ありて、其發達するに従ひ實際に新現象を出すことあるを忘却したるにあり、夫の植物の生長に神経節あり、又人の身上に於て變化の大段落あるが如く、宗教上の歴史に於ても時に格別なる段落を生じ、新鮮優等なる生命を現し、大に前日の劣等なる有様を超脱することある、決して疑を容れざる事實にして、是等は

單に其形体上の偶然なる小變化といふべからず、而して後者の誤謬は、宗教上に顯はる、新鮮高等なる現象は、人類の宗教心發達の眞實なる一部分にて、單言せば其發達中の一階段たるものなり、何となれば此新顯象の顯はる、や、其の以前の宗教歴史に於て、已に之が準備を爲し、其以後に於ては、自然に正當なる發達を爲すことあるを忘却したるにあり、又、ポジチビズムの誤謬は、宗教發達の歴史に於て、前者と後者と、劣等と優等と、皆齊しく人類の本性に存する宗教心發達の全面を形造するものにして、其間に出現する各個の現象は、人類本性の全面より見れば、其發達の自然の結果なれども、又其現象と接近する以前の現象より見れば、これ全く新鮮優等なるを忘却したるにあり。

「ポジチビズム」派の神學者が、基督教の天啓の眞理と其價值とを保存せんには、之を人類一般に於ける宗教及道德心の發達に顯はれたる、自然の天啓と全く區別せざるべからずとするは、これ甚しき誤謬の極にして、其結果大に恐るべきものあり、余輩が茲に「ポジチビズム」派の神學と稱するは、教會の「オルソドックス」の教説よりも、寧ろ「リツチュール」派の神學説を指すものなり、何となれば夫の學派の神學は、却て教

會の教説より此點に就て明白なる處あればなり、「ポジチビズム」派は左の大なる事實、即ち人類の良心、又は宗教心に顯はれたる神の自然的天啓、基督の所謂内なる光、パツロの所謂神に關する自然の知識及良心の理法なる者を否認し、若しくは之を不用として輕視する時は、吾人は宗教上及道德上の理想の眞偽を質し、或は其價值を測る標識を失ふに至るを忘失せり、若し基督教の眞理と人類の本性との間に繋る、一切の連鎖を撤去する時は、基督教の起原、擴張及び諸國民が今日に至るまで、之を遵奉するに至りし事實は、到底解釋すると能はず、寧ろ之を純然たる奇跡と爲さざるべからず、夫の「ゲッチェンゲン」派の神學者が特に重きを基督の肉體の復活の奇蹟に置かんとするは、或は是等の欠點を感ずるの結果にはあらざるなき耶、何となれば彼等は既に人類の性情の動作に存する原因により、基督教の起原を解釋する道を杜絶し、之に換ゆるに外形の事實、即ち基督の復活を以て、一層明白に之を解説せんとを試みたり、然れども斯の如きは恰も千斤の磐石を蜘蛛の一糸にて繋くと異らず、豈亦危殆の至ならずや、將たかゝる論理は「リツチュール」の神學に主張するが如き、神の總念と學理上撞着するの點なきを得んや、蓋し彼の説に依れば、神と自

然界及人類界との間には、直接なる原由の關係あるものにあらず、神の目的は單に吾人が觀念の中において自ら成功するなりと主張せり。リッテールの神學說に従ふ時は、常に基督教の起原を解釋すること能はざるのみならず、亦基督自身に於ける天啓の意識或は豫言者に於ける天啓の意識の起原をも解釋すること能はざるべし、何となれば天啓の意識に就ては、左の兩者の中其一を採ばざるを得ず、即ち天啓は超自然的な天啓論者が主張する如く、神の力に依て外形的に授けられたる結果なりとするか、否なれば學理上より批評的に神學を講究するの道開けて、爾來幾多の人の主張する如く、人心の内部に働く神の力の結果に歸せざるを得ず、前者は固より「リッテール」派神學者の取らざる所にして、彼等は多少知識の本の實を味ふたるにより、純然たる超自然的な天啓說を甘諾すること能はず、さればとて後者をも受納すること能はず、何となれば一たび天啓は人心の内部に働く神の力の結果なりとの說を許す時は、彼等は神性と人性との間には、直接なる關係を有するものなることを承認せざるべからざるに至る。然れども之を承認するは、これ其持說たる「ポジチビズム」の根本を破壊するものなり、されば「リッテール」派は天啓を外部より來りし

ものとせず、亦内部より起りしにもあらずと主張せるが、果して然らば彼等の神學は何を意味するものなるや、是れ實に會得し難き點なり。苟も明白なる思想を以て精密に事物を考究する力を有する思想家が、果して天啓は外部より來りしものにあらず、亦内部より起りたるものにあらずとせば、これ全く現實のものにあらず、唯一個の理想に止り歴史上に於て著明なる發達を爲したる宗教に、特別なる價值と重量を加へんが爲め、殊更に其の起原を神の動作に歸したれども、其實際は唯一個の理想の形跡に過ぎざるを認むること難きにあらず、現今の「リッテール」派學者は其議論を論理的に推究して、かゝる極端なる終局に達するを拒否するものならん、然れどもこれ決して免るべからざる處なり、何となれば右の結論は彼等が神學說の本質と離るべからざるものにして、「ポジチビズム」とは密接の關係を有する、古今の懷疑說の歴史に於て、多く其比類を見る處なれば、決して余輩が説く所を以て一時の妄語に過ぎずといふを得ざるなり、各個の天啓を人類に於ける歴史的發達より乖離して之を考究せしめんとする「ポジチビズム」は、皆悉く學理上の原理と衝突するを免れず、故に此說は教會の「ドグマ」に比して、一層其意味の偏頗狹隘又は驕傲なる

を見る、教會に於て「ドグマ」は其教理の中に於て、多少人類普通の眞理に接近する所あればなり。

余輩は已に歴史上の事實に徴し、先づ天啓に於て人類の宗教心發達の歴史あることを發見したれば、今其論歩を哲學上の問題に進むるに至りては、余輩は神の存在の證據及神の愛の性質につき已に評論したることを、茲に憶起するを以て足れりとす。凡余輩が茲に論ぜし如く各個獨立なる實在者の發達に於て、一個の目的ありて總て之に歸するが如きは、若し是等の實在者と其目的を設置する世界の理性とは、素と原由の關係ありて其理性の目的は、諸種の實在者の連環したる發達を示導する理法の中に顯はれたるものを認めざれば、以て其發達を了解すること能はざるべし。殊に宗教及道德の發達は、單に相對的原因のみにて之を了解すること甚だ難し、是等の發達は各個人と社會との交叉運動、此兩者と天然との交叉運動とに依て、成功すること愈々明白に了覺するに従ひ、愈々相對的原因のみにて之を了解すること能はず、原始に於て人類が自然より得たる感覺は、彼の中に存する理性の動作を惹起し、之をして神を認め、神と實際的關係を結ばんとする心を起さしめ

たるものなり、これ即ち造物者の智慧の啓示なり、人類の靈と自然とは互に相反應する所ありて、自然の興ふる感覺は、人類の内心に存する諸勢力を發揮し、彼等をして自然及人類以上に位するものを認め、亦之を追慕するの念を生せしむるものなり、これ造物主の智慧に依て彼此相照應し、人生に存する一切の慾望に、之を満足せしむるものあるは吾人が親しく認る處なり、然り而して其慾望中の最も深く最も通有なるは神と交通せんと欲するものにして、之を満足せしむべきもの、宇宙間に絶無なりと云ふハ、これ甚だ了解しがたき事ならずや、余輩は此慾望の人生に存するは、これ即ち靈界に於ける引力の作用にて、相對的の靈をして靈の親たるものと連環する處の、所謂合理的被造物と造物者の理性と、活ける交通を爲さしめんと欲する神の愛の作用たることを認むるを得べし、若し人生に存する能力の正當なる動作と正當なる發達は、其根本に存する進化の原理の結果なりとせば、正當なる宗教心の興起及發達は、之を一個人に見るも、多數人に見るも、余輩は其人類の心靈的生活の根本たる、神の合理的意志の作用なりと云はざるを得ず、これ則ち神の意志が吾人と活ける交通を爲さんと欲して、此作用を顯すものなり、これ則ち神の

愛が人類の心に知られ己を顯はさんと欲して働く作用なり。故に如何に幼稚なる宗教に於ても、苟も正當なる宗教心の發達するに於ては、必ず人類と活ける交通を希望する神の愛の啓示あらざるはなし。幼稚なる宗教に於ては神の些細なる賜物を以て満足するにより彼等は未だ神の愛を知らざるものとなすを得るか、決して否らざるなり。蓋し神の愛が自己を人類に現すに於て、最初は其些細なる賜物を以て之を彼等に玩味せしめ、神は實に恩恵深きものとの感情を惹起せしめ、然して漸次に高等なる靈の賜物を玩味せしむるは、是れ神が人類を教育する道に於て甚だ適宜なる方法を設けたるものにあらず耶。而して宗教上の感情次第に高尚に進むに従ひ、神の愛の價値を悟り其味を玩賞する能力も次第に進歩し、遂に聖き活ける靈を與へて之を玩味せしむるに及び、其愛の動作は至高の點に達するものなり。唯に此點に安せず尙進歩の止まざるは、是實に當然の事にして些も怪むべきにあらず、猶親の恩愛が其小兒の生長するに従ひ、漸次に其味を深からしむるが如し。幼者には適宜の方法を用いて其愛を顯し、稍長するに従ひ其愛も大に進達するものなり。救主は幼者も天國に昇るを得ると約束せしにあらざり耶。然るに何等の權利あり

りて原始の幼稚なる人類は、神の愛の啓示を受くること能はずと云ふを得るか、神の心は廣大無邊にして、其啓示も亦濶大なるものなり。夫の狹隘なる神學者の妄想の如きにあらざるは、當に言を待たざる也。

前述の論法に依れば、具體的唯神論に於ける神の總念に關する議論は、愈々其基礎をして鞏固ならしむるを見る。若し神の「エーゴ」と人の「エーゴ」の間には、眞實の分別なくして全く同一のものなりとせば、世に天啓なるもの有得べからず、何となれば神人全く同一なるときは、其間に寸毫も宗教的關係を有すること能はざるべし。然れども夫の抽象的唯神論(超然神論)の主張するが如く、神と人とは全く特異にして神は世界以外に存し、世界の實在者とは全く離隔し、恰も世界外の一個の實在者として、世界以内の總の實在者と並立するが如きものなりとせば、眞誠の天啓即ち人心の内部に實驗する天啓は有得べからざるに至らん。何となれば神果してかゝる状態なる時は、彼は吾人人類に己を顯はすに於て、他の實在者と同一の方案に依らざるべからず、彼は外形の表號に依て先づ吾人の覺性に訴へ、吾人は又獨立なる反察力に依りて之を觀念繪畫及斷定に形造するものなり。無論世にはかゝ

る通有なる神の表號言辭なきにあらず、人類の宗教心ハ之に接して喚發せらる、特に太古に於て然りしなれど、後世に至るまで多少其勢力を有したりき、是れ即ち自然なり、去れば超然神論なるものは若し嚴密に其中に抱合する論法を吟味せば、神の動作をして單に神の外形的の表號に限りて、吾人の心中に直接なる動作あることを否定するものなるは甚だ了解し易き所にして、これ其超然神論の特性とも稱すべき所なり、自然は開闢以來依然として變更なきが故に、神の天啓は一たび原始に於て顯はれたるのみにして、以後神は獨り靜默沈座以て遠く世界を離れて更に之と關係する所なしと唱ふれど、斯様なる、エピキユリアン派の神は宗教家には全く無用の贅物なり、宗教家は自己の心中の深底の經驗に照し、神の眞誠なる天啓を發見せんことを勤め、而して常に之を發見す、彼は自己の觀念、感情、及意志の動作に於て直接なる神の動作即ち聖靈の證あるを直覺するものなり、若し此の實驗にして果して空妄にあらず、眞誠なるものと假定せば、是れ即ち人の心は常に開發して神の動作を受くることを證明するなり、然れども此の事は吾人の生活が神の外にあらず、即ち神の中にありて神の生活の一部にして、其の中に抱合せらるゝにあら

ざれば決して能はざるべし、斯の如く吾人に神と交通せん事を欲する心あるは、是れ即ち吾人々類と交通せんことを希望する神の意志の動作の結果たる事亦疑を容るべきにあらず、總て宗教的動作は其の源、神の意志の動作に基くや明かなり、特に宗教心の最とも發達して高等斬新なる現象を顯すは、其の中に於ける神の動作彌々織にして、神人交通の程度彌々上進したるの結果なり、故に余輩は高等斬新なる宗教的生活の現象は、一個人若しくは一國民の間に於ける神の愛の、特殊非常なる現象なりと云ふに躊躇せざるべし、然れ共神の發現の法式に至て、吾人は其明細を知る事能はず又之を知るの必要なきなり、神の愛の意志が其形を變じて人の宗教心の動作及び之を満足せしむるの動作に於て出現するは、頗る了解しがたきが如しと雖も、之を以て夫の唯一なる神の意志が複多なる相對的の動作に變ずるの事實に比すれば、其解釋の難易更に差あるを見ず、天啓の奧儀は單に世界創造の大奧儀の一部分、或は其特別なる形狀なりと思惟すべし、余輩は其奧儀の根底を覗ふこと能はざれども、亦余輩が知る所の比例を以て稍々之を判別するを得る也、此章の始に於て余輩は、奇跡を信するの信仰は、天啓を信する信仰の半片なりと述

べたり、而して其の奇跡信仰は殆ど宗教心と其の起原を同ふす、蓋し奇跡は或る詩人が適切玄妙に唱へたるが如く、實に信仰の最愛兒なり、原始よりして人類の宗教心は神を以て自由なる能力、人類を世界の制限より自由ならしむる能力と認めたり、此故に信仰は神が人類を世界の制限より自由ならしむるの動作、即ち救済の奇跡を行はんことを希望せり、之を希望せるが故に彼等は之を實驗するを得たり、固より彼等は平常自然の動作の中に神の一定したる支配あることを知れども、神は常に此自然の法則に束縛せられる、ものにあらず、寧ろ神を以て自由にして束縛なき人の意志の模型なるが如く思惟せり、故に時には其能力の異常なる現象あらんことを期し、而して其望む所の現象は、自然の法則に反對する作用に於て之を認め、即ち神は己を信する者に向ひては時に特別なる恩恵を施し、之に反し己よ敵する者に向ひては、特別なる禍危を下すものなりと思惟せり。

奇跡を行ふ力ハ管に神に屬するのみならず、神と特別なる關係を有する人にも、之を行ふの力ありと信せり、宗教歴史に於て奇跡談の最も著明なるものは、則ち是等の人の行ふたる奇跡なり、奇跡は世人の眼に神と特別なる關係を有し、或は神の世

界と人の世界との間に立ちて其中保を爲すものと信せられし人には常に屬するものと認められたり、此信仰は宗教歴史中他事に拔で、顯著なる者にして、如何なる時代に於ても、如何なる宗教に於ても、恐く此信仰を有せざるはあらざるべし、唯宗教心の變遷發達するに従ひ、時々其形狀を異にするのみ、最下等の宗教に於ては祭司は禮拜に依て、神の世界と交通するの權力を有すると認めらるゝにより、彼等は神より奇跡を行ふの力を授りたると信せられたり、故に是等の宗教に在ては、一人にして祭司、魔術師、奇跡醫、雨師等の天職を兼るもの少からず、高等なる宗教に在ては奇跡を行ふ力は、其非凡なる宗教心を以て大に其周圍を感化し、之に依り彼等は神に送られたる神の使者なりとの信仰を惹起することを得たる、豫言者、宗教改革者、又は宗教の元祖等の如きものに歸し、或は特別なる修道の力、及宗教上の真理を深く考究するの熱心により聖徒、若しくは神の奧儀を悟るの力を得たりとの榮譽を受けたるが如きものに屬すと云へり、斯の如き人は果して眞に自ら奇跡を行ふ力ありと信じたる耶、否耶、又彼等は實際に之を行ふの權力ありと主張せし耶、否耶、は、世人の深く考究せざる所にして、唯當時の人及後世の人は、彼等は特別なる神

の召宣を蒙り、神人の中間に立て中保の役を勤むるものなるに依り、彼等には必ず之を行ふの權力なかるべからずとの想像より、既に之ありとの信仰を惹起するに至れり、這般の人済に隨從する門徒等、一度其師に望むに奇跡を行ふの權力を以てするときは、忽ち彼等の間に奇跡談の行はるゝ事あるは當然の事也。此現象に就て現今傳ふる所の三大宗教共に、皆同一轍の痕あるを認む、佛教には佛陀及佛弟子等が行ふたる種々の奇跡談あり、其中には全く四福音書の奇跡と同種なるものあれども、多くハ尙甚だ奇異なるものあり、然るに或る佛の經文には佛陀が其弟子に向ひ、如何に衆生が奇跡を行はんとを望むも、斷じて之を行ふべからずと誠めたるの談あるを見る、彼曰く、誠の奇跡は爾等の善行を衆生の前に隠蔽し、爾等の罪業を彼等の前に顯はすにありと、回々教にも「マホメットの奇跡談頗る夥し、然れども彼は「コーラン」回教の經典に於て明に云へり、曰く、彼も他の人と異らざる普通の人也、又奇跡を行ふは彼の價值に對して潔とせざる所なりと、彼は「アール」神の大なる奇跡を指して曰く、朝に東に昇り暮に西に沈む太陽、土地、萬物を豐饒ならしむる膏雨、亭々繁榮する草木生物、此世に顯はれて何人も其那邊より來りしやを知らざる人類の

靈魂は、これ即ち眞誠の奇跡なりと、最後に耶穌は奇跡を望む衆人に向て左の如く云へり、曰く、此曲れる世には豫言者ヨナの徴の外、一の徴をも與へられじと、其意は耶穌の説教の力は、恰も豫言者ヨナが「ニ子」に於て悔改の説教を爲したるが如く勢力あるものなれば、之を以て彼が神より遣はされたる證據には充分なりとの謂ならん、又聖書中には耶穌が寧ろ奇跡を行ふことを避け、其評判の高かまらざらん事を力めたれども、尙之を制すること能はず、其名愈々噴々たるに至れりとの趣を記しあるを見る、耶穌は彼の奇跡を見んと蜚集せる人々を避け、又其奇跡によりて病を癒されたるものあれば、其功を彼等の信仰に歸し、爾の信仰耐を癒せりと云へり、彼が詞が聽者の心に貫徹し、其身体の病氣を全癒せしむる程の力あるを以て、是れ即ち彼は神の特別なる召宣を蒙りて世に來り、而して天國正に近にあるの徴と爲せしことは、よく其前言と符合す、然るに後世に至り、基督の種々なる奇跡談起りたるは、其原因甚だ多し、殊にパウロの神學説、及黙示録の豫言に於ける、基督の榮光ある姿の説の如きは、最も其重なる原因たり、又當時一般の人々は、酷だ奇跡談を好むの傾向ありしかば、基督教も新なる宗教として世界に傳播するに當り、勢ひ彼等

の傾向を満足せしめざれば、以て其勢力を擴張すること能はず、是又奇跡談の起りし一因ならん。若し當時の人が如何に奇跡談を好みしや、當時の羅馬帝國に於ける有識者と推尊せらるゝ者も、多くは迷霧の間に徘徊し、其他賢愚貴賤の別なく、舉て妄説虚誕を好み、時の哲學者と稱せられたる輩と雖も、遂に其潮流に漂泊せるに至りし事蹟を見れば、基督教が其教義の道義的、心靈的にして、其教祖たる基督は痛く外形的の方略を嫌忌したるにも係らず、其身に夥多の奇跡談の提伴するに至りしは、決して怪むに足らず、寧ろ余輩の怪むべきは、基督教の奇跡が他の偶像教の奇跡とは甚だ異なるありて、多くは質素淡泊、其の中に詩歌的の美妙を含む事太多きを見ること也。然れども其奇跡にして斯の如き理想的の分子多く、大に心靈上の教育となるべきものあるは、直ちに之を以て其奇跡に歴史的事實あるの證となす能はざるへし。余輩は寧ろ之を以て基督教の奇跡は重に理想より發して、之が歴史的根據となすべきもの甚だ乏しからんことを信ずるものなり。獨り基督教のみならず、世間百般の宗教悉く奇跡談を有せざるはなく、其教祖の傳記又は其宗旨の始て世に傳播する時期の歴史は、總て奇々怪々の事蹟に填充せる事を記載する時は、自

己の宗教の爲に其の眼膜を眩迷せられ、公平なる判断を下すの力を奪はれたるものにあらざる限は、是等總の奇跡談を見て、悉く之を歴史的事實に基くものに歸するか、或は悉く歴史的事實を有せずとして擯斥するか、兩者其一に歸着せざるを得ず。基督教會は始め永久の間は前者を撰みたり、異邦偶像教の奇跡神託の如きを、實際に歴史的事實なりと認めり、然れども之を以て惡鬼の所業に歸せり、是に因て之を観れば古代の基督教會は、現今の基督教會の如く唯自己の奇跡のみを以て、眞誠なる歴史的事實と認め、他宗教の奇跡は、皆悉く妄誕無稽の昔譚と排却するものにして、比すれば、其議論却て論理的に適ひしものと云はざるべからず。奇跡の問題に關し、其實際を明著にし、右の正常なる論理法を以て、總て天下の宗教に有する奇跡談は、悉く眞實なりとするか、或は之を虚誕なりとするか、此二者の中其一を撰ばざるべからずとの問題に於ては、吾人十九世紀の人文は已に其答解を待たずして其當否明なりと信ず、然れども純然たる哲理上より世に奇跡の有得べきや否やの問題に至りては、余輩は之を等閑に附する能はず、尙之より徐に論及せんと欲す。世に奇跡なるもの、有得べきや否やに就ては、古昔より哲學者の間に議論頗る多

く「エピキユリウス」學派の人は、其超然神論と理學とに依て奇跡を否定し、「アカデミ
ック」派は之を疑へり、又「ストイック」派、ネオ、ピタゴリ派及「キヲ、プロト」派は彼れ等の
哲學に従ひ、奇跡は尙世に有得べきものと思惟せり、彼等或は奇跡の原因を單に「デ
ーモン」(惡鬼)の所業に歸せり、然れども斯の如きは已に哲學の區域を脱し、普通人民
の信仰なる多神論の區域に進入して之を解釋したるもの也、或は之を彼等の理體
學上より解釋し、其原因を卜占或は神託の如きものと等しく、宇宙間の總の勢力相
連環して、互に相感應するとの理に歸せり、此關係に依り或る所に於て發したる事
情は、必ず他に其影響を及ぼし、一個の上を受けたる影響は、見るべからざる勢力の
媒介によりて、遠隔せる他物に之れを波及せしむるを得ると云へり、又彼等ハ奇跡
即ち自然の秩序に逆ひて起る所の事情を解釋するに當り、同じく之を一般の自然
と連環せしめんと試み、固より其の關係に至りては吾人の知ること能はざる所な
りと、則ち奇跡も亦自然の秩序ある運行と其源を同ふするものにして、普通一般の
勢力の自然的結果也、余輩はオーゴスチンの説に於て稍之に類する奇跡の解釋あ
るを見る、固よりオーゴスチンの議論は重に神學上の意味を含めり、希臘の哲學に

在て奇跡を解釋するに至要なるものは、自然の秩序の互に連環感應するの關係な
りしが、オーゴスチンは之に代ゆるに神の意志を以てし、自然は神の意志が外に顯
はれたるものにして、萬物の各質ハ神が自ら定め給ひしものなり、故に神は此自然
を以て如何なる事をも其の嗜好に従て爲し得べし、世に自然に逆ふものなし、何と
なれば一物として神の意志に逆ふものなければなり、奇跡の如きは自然に逆ふ如
く見ゆれども、并は唯吾人が知れる限りの自然に逆ふものにして、其の實は決して
然らずと云へり、かく奇跡の自然に逆はざることば如何にも簡明に説き去りたれ
ども、之と同時に自然其の者自身の總念をも掠奪し去りて、之に代ゆるに神の意志
の専恣なる動作を以てせり、然らば奇跡は尙神の意志に自家撞着するにはあらず
やとの疑問に對し、オーゴスチンは否と答へり、此點に就き更に撞着なきは、蓋し宇
宙間の事々物々普通なるものも異常なるものも、皆等しく永遠より神の永遠の意
志に依て豫定せられたる處なればなり、獨乙哲學の元祖たる「ライプニツ」も畧之と
同じき論鋒、即ち其持論たる限定説及宇宙の豫定和合説とを以て、奇跡を解釋し去
らんと試み、神は一旦創造したる世界に於て、一の變更をも爲すこと能はず、若し之

を爲すものとせば、自己の智慧を以て豫め計畫して創造せる、始の世界に尙不完全ありて、其計畫の欠點を補充するものとなさざるべからず、是れ完全なる神の智慧に對して、吾人が思考し能はざる所、然れども奇跡は神が此世界を創造するに當り、既に其設計の中に加へたるものにして、時期の到來を待て之を行ふは始より彼の算期中に加へ置きし所なりと、かくて奇跡は回生したり、然れども其回生したるは、世界の豫定和合の中に抱擁せられ、始より種子の如くして其中に存し、全體の發達するに従ひ、時期の熟するに至つて、奇跡も亦併に世界の秩序の中に在て發現するに由ると、今此説を嚴密に探究する時は、其の奇跡の回生は頗る曖昧模糊なりと云はざるを得ず、若し其説の如くんば奇跡てふもの、眞誠なる總念は悉く消失せり、眞誠の奇跡は自然の秩序に逆ひ、其理法を破りて顯はるゝものなれども、右の説に従へば奇跡も亦自然の秩序と、其理法とに従ひて顯はれ、而かも此現象の爲には、最初より之が準備を爲せりと、果して然らば其奇跡の奇なるは、唯た外形に於て然るのみ、其の實に於ては、唯比較的に奇なるのみ、其本質は奇跡にあらず自然なり、かゝる辨護は夫のスピノザが奇跡を否定したるの説と更に異なるどころなく、一見奇

跡の辨護の如く見ゆるも、實は否定と同一なり、
 哲理に訴へ論理に照して、正面より奇跡の信仰を駁撃したるは、スピノザを以て其嚆矢となす、彼は左の如き論法を以て、世には一も自然の理法に逆ひて起る者あらずと云へり、自然の理法は神の意志に依て定められたる者に外ならず、神の意志の限定は完全なる神の性質より必然的に發現したるもの也、而して自然の力は是即ち神の力なり、神の力は神自身の本質と同一なるものなれば、神の所業の中にて自然の理法に逆ふものありとすれば、則ち神は己の性質に逆ひて働くものといふが如し、これ豈甚しき不倫の語にあらずや、凡そ世に自然の理法に離れ、其の以外に逸出するものありと思惟するは、是亦誤謬の甚しきものなり、蓋し自然の理法は總て神の理想の目的となるべきものを抱羅し、神の創造したる自然は甚だ脆弱又其理法は甚だ不完全なるものにして、神は時々此世界の秩序を維持し、及其中の萬物をして正當なる發達を遂げしめんが爲め、自ら手を下して之に干涉せざるべからずと云ふが如きは、抑も自然の總念に於て穩當ならざるのみならず、道理に於て反する所なり、されば世には何時も眞誠なる超自然的の奇跡あることなし、古來世人が

奇跡と稱するものは、或る事變に遇ひて彼等が其自然的原因を知ること能はざるに冠せし名稱に過ぎずと結論せり。シュライエルマヘルもスピノザの説に倣ひて曰く、神の全能は原始より神の定めたる理法に従ひ、永久不朽なる天然の自然的運行に於て顯はるゝよりは、寧ろ彼が時々其自然の連環を破りて、定法に逆ふの業を爲す、所謂奇跡に於て最も著しく顯はるゝとは、甚だ了解しがたき點なり、抑も變更するの力は、其變更の必要ある時に於て便益なるものなれども、已に變更の必要ありとすれば、其最初の計畫に於て不完全ありしことを詳明するものなり、凡そ絶對的奇跡は自然の秩序の全躰を全く破壊するものにして、自然てふ總念すら之に依て破壊せられ、神の動作は順序なき魔術の如きものに成果て、神自らも亦各個の自由なる原因の部類に加へられて、諸原因中の一因と數へられ、而して遂には相對的原因に歸するに至るべしと、彼は其論を結ぶに當り左の言を以てせり、吾人は理學殊に博物學の爲に計るも、宗教の爲に計るも、齊しく絶對的超自然なる觀念を放棄せざるべからず、何となれば吾人は學理上より超自然的なるものあるを見出す能はず、亦宗教上よりも是等を認定すべき必要あるを見出すこと能はざればなり

とフ・ヒテール及ヘーゲル等も同じく、眞誠なる信仰の爲めには奇跡は不必要なるのみならず、却て之れが妨害となるものなり、心靈的宗教の純然たる觀念には、奇跡の如きは甚だ不適當なり、靈其者或は其の合理及自由は、即ち唯一なる眞誠の超自然なるものにして、眞誠なる神靈的を媒介するは、獨り此靈の力に頼るのみと、フ・ヒテールの如きは外形的の奇跡を信ずるは、これ夫の「ユダヤ教及其他の異教の迷信殘齷を背むるものにて、純白なる基督教の信仰に於て取らざる所なり、基督教の最大なる永遠の奇跡と稱すべきは、總て神に近く者に新しき心を與へらるゝにありと。

世の神學者が奇跡の眞實なるを證せんが爲め、常に提出する所は、神の生ける事、其自由にして自然の理法の爲に束縛せられざる事、及自然の理法は彈力性を有するものにして、時々神の干涉を許すのみならず、亦之を要するとの事を以てす、而して第一の論法に就き、神の生ける事と其自由なる事とは、漸く稀有なる奇跡に依て顯はるゝとせば、其外に在ては神は全く枯死せるもの、怠慢なるもの、不自由なるものと認めざるを得ざるに至るべし、斯の如き説は信仰の決して許さる所、又知識も

世界の秩序と理法とに對し、神が時々不規則に自由の動作に依て、普通理法に逆ふ所爲ありとの説に満足する能はず、吾人の知性は世界の秩序は永久不變又敢て犯すべからざる事を主張すると同時に、吾人の信仰は神は平時自然の爲に繫縛せられ不自由なるものなれども、時として其生ける事と、自由なる事とを顯はさん爲に、普通の定法を破て特別なる動作を爲すとの妄を排し、神は絶對的に自由なるものにして、其活潑なるは唯に時々の特別なる動作に於て顯はすものにあらず、其の平時一切の動作を以て顯はすものと主張す。斯の如く神と自然とを全く區分するに於ては、自然の運動の區域甚だ廣漠となり、神自身の運動の區域は甚だ狹隘となりて、僅に時々奇跡的に其動作を顯はすものとす。然れども這は吾人の信仰と理性とを満足せしむる能はず、信仰は神の動作の爲に世界全体を以て其領分となし、理性は自然の理法の爲に宇宙全体を以て其領分と爲さんことを要求せり、果して然らば此兩者の要求する所は、互に衝突撞着するものにあらず耶、吾人は如何にして相互の満足を得せしめん耶、余輩の思考に依れば、此満足を來さしむるに只一個の道あり、神の動作と自然理法の動作とは互に其區域を異にするものにあらず、寧ろ後

者は前者の理性に從て働く合理的形狀たるに過ぎずと爲すにあり、曩に神の全能全智及至聖を論ずるに當り、余輩は説を爲して、神の意志は其理性の指示する目的に從て運動し、而して其理性の指示する所は、これ即ち永遠の真理にして、世界の秩序然たる自然の理法に依て發顯するものなり、されば神の意志は是等の理法に逆ひて運動すること能はず、又其必要あるを見ざるなり、神は其理性に定めたる是等の理法に從て働き、決して窮厄せらるゝ事なきは、恰も彼は窮厄せられて善を行ふものにあらざるが如し、これ即ち神の至聖なる所以、又神と人類と異なる所以也、其理性の理法に於て働くは彼の自然なり、之に逆ひて働くことを得るや否やは、神に就ては不必要の問題也、神は常に世界の秩序の中に牽束せられ、其理法の動作に束縛せらるれば、時として此束縛を脱するの必要を感じ、自ら定めたる自然の理法を破り、之に逆ひて其動作を爲し、以て己が生けることゝ自由なることゝを顯はすと云ふが如きは、これ決して神を尊敬するの言にあらず、却て神を人類同等視する甚だ劣等なる神の觀念なりと云はざるべからず、自然の理法を破るの所業は、神の意志が其理性の束縛を脱するものにして、即ち其理性に存する永遠の真理の必然的支

配を脱するもの也、これ豈に神に於ける甚しき自家撞着にあらざるなきを得ん耶、これ豈に吾人が理性及宗教心に撞着する虚妄の假定にあらざるなきを得ん耶、奇跡を以て世界の秩序を破ると見做す時ハ、是れ神の全能に關する嚴密なる想念にも、亦自然の嚴密なる想念にも撞着する處あるを免れず、自然の詳細に關する吾人の知識の甚だ不完全なるは、更に疑を容れざれども、自然は秩然たる因果の理法に依て連環するものなれば、其理法に逆ひて發する現象ありとするの、自然の總念に撞着するところあるは、吾人が既に識認する所なり、而して奇跡問題に於て吾人の爲に須要なるものは、多少偶然の性質を免れざる自然に關する知識の詳細にあらざして、寧ろ吾人が思想の理法にありて、必然的の性質を有する自然てふ全體の想念なり、自然の理法ハ彈力性を有するとの説も、一層之を綿密に研究すれば、これ又其の撞着を免れず、未だ以て此問題の救助と爲す能はざる也、自然の理法が外に顯はれて運動するに於て、種々なる事情と時と場合により、様々なる變形を生ずることありと雖も、必竟其各部の動作に於て然るのみ、其理法の全体に於ては固より絶對的にして、其間に變更を許すものにあらざれば、固より彈力性あるにあらざり、必

竟吾人が一の結果よりして其原因に推論し、既知の原因よりして將來に起るべき結果を豫知し得るが如きは、畢竟自然の理法の犯すべからざると、其運動には些の誤謬なく、一の變易をも有せざるの道理に基くものたるに因る、換言せば吾人が合理的思想及合理的所爲は、必竟自然の理法の不變無謬なるに基くもの也、或は自然の中にも奇跡に類似する者なきにあらざり、夫の劣等なる生物よりして高等なる生物の發するが如きことあるは、是其好適例にあらざりやと唱ふるものあれども、今一層綿密なる考察を費す時は、自然の理法を破るの性質を含める、正當なる奇跡を證するに足らず、世に新始(New Beginning)と稱するものあれども、是固より自然の理法に乖離して現出したるにあらざり、世界全體の秩序中に加入せしむべきものなり、彼等は其未だ發生せざる以前に於て、種子として存在し、時己に熟するに至り、自然の理法に従て現出し、秩然たる世界全體の發達の正當なる一段階となるものにして、更に奇跡にあらざり、世に原因結果の自然的連環を破り、普通一般の理法に逆ひて起りたる痕あるを見ず、故に余輩は右に述べたる新始の如きを以て、絶對的の意味を附したる奇跡と稱するを得ず、夫のライプニツが辨護したるは之を「ミラクル」と云ふ

より寧ろ相對的「ミラビレ」を稱するに止まらん。下等と比較して驚くべき高等なるものあるは、これ唯自然の全軀に於ける發達の必然的一部分にして、之が發顯以前に已に其準備を爲し、時期熟するに至り自然の理法に従て出現したるものなれば之を以て眞誠なる奇跡と爲すに足らず。例せば人類の靈を以て其以下の自然に比較し以て奇跡なりと稱するが如し、其相對的超自然の性質は、正當なる奇跡にしかる絶對的超自然の性質と甚だ差等あるは、一目瞭然たる處あり。人類は他と等りく世界全軀の正當なる一部にして、其全軀の理法に服従すべきと明なり。原始よ於して地上に於ける生命の自然的正當なる發達は、人類の此世に出現するを以て目的とし、人類已に顯はるゝに至りては、彼の存在は其軀質に存する理法及地上のあらゆる生命の保存に關する理法に制限せられ、其中に始て生育を全ふするを得るもの也。

或人説を爲して曰く、人類に自由ありて以て自然に主たるを得ば、これ豈に奇跡の有得べきを實際に證明するものにあらずやと。若し人類が自然に主たるを以て、彼等は其理法の上に位し、之に離れ之に逆ひて自在に自然を使用し得るの力を有

すると云はゞ、これ唯一種の空想にして更に實際に有得べきことにあらず。普通の知覺を備へたるものは、かゝる空想に依て其身を處し、以て自然に對することなかるべし。若し人類の自然に對する自由は其意志の動作により、時々自然界に於ける事物に變更を來すの力あるものにして、即ち人類が自然界の主たる所以なりと云はゞ、何人も此事の眞理なるを疑ふものなからん。然れども這は有りふれたる眞理にして、殊更に之を提出するも、奇跡問題を解釋するに於て何の效能か之あらん。之を以て神も吾人の如く其意志の動作に依り時々特別なる動作を顯はし、以て自然の理法に逆ふことなきも、其理法の自然の運行に放任する時は、未顯の事變を其特別の干渉に依て、特に之を現出せしむるとの事情を證明するものなれども、是等は夫の諸種の宗教に於ける、超自然的若しくは自然に反對して顯はるゝ、正當なる奇跡を説明するに足らず。若し之を説明するを得るとせば、單に夫の所謂神の攝理的奇跡を證明するに止まらん。加ふるに神は時々世界の自然的運行に干渉し、或は其因果の自然的動作を變更阻遏するが如きことありと假定するは、是豈に神と宇宙の關係をして、超然神論の主張する所と同一ならしむるにはあらざる耶。余輩が數

々陳辨したるが如く超然神論の神は一個の實在者にして世界以外に位し、世界の實在者と同等並立し、其實神と稱するに足らず、萬物を悉く網羅する唯一なる世界の根本にあらざる也。余輩が已に評論したるが如く神と世界の關係は、超然神論者の思惟するが如きものならず、必ず眞誠なる唯一神論的關係たらしめざるべからずとせば、余輩は神の意志を以て、多の原因中の一個の原因と見做し、世界以外に在て時々之に干涉するものと見做すを得ず、寧ろ世界の唯一なる大原因にして、其動作は相對的諸原因の秩序的動作に依て顯はれ、彼等の作用により其目的を成就するものなるを認めざるべからず。

人類の自由に訴へて自然界に於ける、奇跡の有得べき證據と爲すの議論は、到底成立し難き事は、已に陳辨したるが如し、然れども此議論の中に於て何が故に諸宗教に依て奇跡の起りしやの疑問を解釋するに、甚だ重要なる一の思想を發見するを得たり。抑人の道義的及宗教的動作は、其善若くは、神てふ觀念に依て、隨意に限定するものなれば、純然たる自然の上に位する自由の動作たること更に疑を容れず、故に之を以て其情慾私心の純然たる自然的動作に比較せば、多少其中より超自然的の

分子を含有す。固より人の合理的本質或は人たるの運命よりして見れば、是等の動作は全く自然的なること明なり。此超自然は則ち宗教心の特相にして、道義的世界の秩序に属せり、古來宗教歴史の奇跡談に於て、自然界に於ける超自然的の事跡たる形狀を裝ふて現出したる者なり。外界に於ては自然の理法に悖戻するが如き奇跡は、斷じて有得べきものにあらず、然れども道義心及宗教心の如きは、是即ち神の爲せる大なる奇跡也。吾人は我嗜好に従ひ我希望に任せ、我一己の目的を達せんが爲に、世界の自然の理法を破り、或は之を曲非するの力を有せされども、吾人の信仰は能く此世に勝つの力を有す。蓋し信仰は神の愛に全く服従し、神に己を捧獻せる人の心より生ずるものにして、神の唯一なる意志の下に、各個の私意の傲慢、頑固を破却したるなり。故に能く世に勝つの力を有す。神の唯一なる意志は世界全体の合理的秩序を以て其動作の目的と爲せども、自ら之に各個實在者の最大なる善福を抱合せしめり。斯の如く吾人は神の至聖なる意志に定められたる、確固不拔の世界の秩序に逆ひては何事をも爲し得ざれども、善にして智ある神の意志の中には吾人の爲に最大の善を貯へ、何者と雖も束縛し得ざる自由と、又與奪し能はざる平

和ありとするは、是豈に吾人の宗教心に於て大損失を來せりと爲すを得る耶、古來奇跡の信仰に含有すると思惟せられたる、高尚善良なるものは、其實吾人が信仰の中に畜積したる、天の寶の福祉を外界に反射せしめて、之を眺詠したるに止まるのみとするは、是又宗教必の爲に大損失なりとする耶、されば宗教歴史に於ける奇跡談は、永遠なる心靈的の奇跡、即ち信仰の動作を外形的に表彰するものとせば、宗教上に其信仰を保持するを得ん、蓋し宗教心の發達するに於て、其奧妙不可思議なるを外形的に顯はし、宗教的美術の表號、或は是等の表號に依て人心に訴ふる教會の禮拜に於て、尙ほ奇跡談は其位置を保持し得るもの也。

第七章 救濟及中保

神と交通和親し、以て世界の惡より贖はれ、圓滿なる救濟を遂げんするはこれ總の宗教が各其道に依て達せんと欲する結局也、余輩が前章に陳辨したるが如く、救濟を全ふせんが爲に神と交通せん事を欲する慾望心を以て、之を同情の神の意志に歸せしめ、亦其意志の啓示を神の恩恵ある發現及其救濟の動作の上に認るは、宗教心に於ては至要の事柄なり、固より此發現救濟には、外形的のものあり、内心的のものあり、一方より之を見れば、救濟は人に向ふ神の意志の動作、即ち其恩恵に發す、又他方より之を見れば、救濟は神に向ふ人間の意志の動作、即ち信仰に依て成就するを得、此兩側面は本來宗教の進行に於ては、唯一に歸するもの也、而して其中に含蓄する二種の觀念ハ、宗教歴史若しくは宗教普譚に於る中保者の一身に於て之を合湊表示す、蓋し斯の如き中保者は信仰の眼には一身にして神と人との兩分子を含有するが如く見ゆれども、其實信仰其自身は即ち同時に神性と人性との兩分子を兼有するもの也、人は常に其内部の抱懷を外部に顯し、以て其心の満足を買はんと欲するものなれば、宗教歴史若しくは普譚に於て、神人間の中保者談あるは、蓋し自然

の勢をらんかゝる中保者中には神の使者若しくは其代表者として其動作により中保の職を奉じ、以て神の天啓を人類に通達するものあり、或は又其性質に於て神人の中間に立ち、神人の兩性を具備し、一身にして神又は人たるを顯し、以て神人和合の理を外形的に顯はすものあり。

宗教歴史に於る是等中保者の種類頗る多端なりとす、自然崇拜教にも、中保者は著明なる位地を占む、彼等の中には神が人となりて少時俗界に足跡を止め、人類の爲に救済の動作をなしたるものあり、或は人間にして其功德と好運とにより、漸々昇進して終に神と化したるものあり、又天より降臨したる神子にして、其の高貴なる本性を高尙なる生活に依て顯はし、完全の極終に人性を變化し、神の世界に進達せるものあり、余輩はかゝる昔譚を以て二個の原因に歸するを得べし、一は理想、他は實際、或は一は鬼神説、他は歴史なり、昔譚中の勇者は一方に於ては、理想的且つ超人類的の實在者、即ち半神若しくは神子なり、而してこれ皆純乎たる自然神より脱化し來れるものなれ、共同時に彼等は又古代に於ける武勇拔群の人、或は王、或は立法者、或は剛勇の軍人、或は惡を平定したる者、或は國法制度の創立者、或は崇拜儀式の始祖、或

は王族若しくは祭司の種族の有名なる祖先の如きもの也、而して古代歴史上の事實を以て理想的勇者の上に應用するに於て、茲に二様の結果を生ず、一方には其國民的口碑漸次に理想的となり、他方には勇者の昔譚は漸次に人類、國民的に變ずる事これなり、有名なる希臘の鬼神論者プルルル曰く、二個の創始的要素即ち詩歌と昔譚との間に交會を生じ、其動作著しく、殊に智能に富み、多くの難に接して活潑なる運動を爲したる國民の間に於ては、其結果最も著しきものありと、然り昔譚と詩歌との交會、即ち實際的歴史と理想的鬼神説との交會は、余輩又之を高等なる宗教の勇者若しくは中保者に對する信仰に於て見る所也。

希臘の神話中にて最も有益なるをヘラクレスの昔譚とす、何となれば其中には普く希臘及東方の鬼神論、自然詩、武勇詩、希臘の祖先談及倫理若しくは教訓的哲學等の諸分子を網羅するものあれば也、ヘラクレスは素と日の神なり、然れ共彼は日の勇者となり、又物質的及道義的光明の表號となれり、彼は、ゼウスの子なれ共其母は人なりき、彼は種々の困難誘惑に際遇せしも、常に是等を制して勝利を得、彼は滅しかたき神の力の發現にして、其地上に於ける謙恭なる人間の生活に於ても、亦天上

に至りて榮光を受くるの時に於ても、齊しく其神聖なる威嚴を證明し、彼は千辛万苦中に尙其身を全ふする人類善徳の模型、彼は神の命により神の力を以て神に遣られたる勇者、世の救主となりて煩惱せる人類を其禍より救済し、當初彼は専ら地上の怪物を退治するを力め、古代の矇昧野蠻を除却するに力を致したるものなりき、然れども彼の行爲には深遠なる道義的の意義を有するものあり、彼とプロメテウスの關係の如きは即ち其一例なり、後者は人生の自然を代表するものにして、猥に自由と文明とを冒貪して、自ら罪と禍とよ落ち、ヘラクレスは理想的人類にして、種々なる動作と苦難の中に在て從順を全ふし、以て其神聖を表彰し、其功績により竟に福祉に達するを得たるものなり、夫の神と人とに見棄られたるプロメテウスを、其無限の苦患より救済する業は、獨りヘラクレスに許されたり、此に於て余輩は已に希臘の神秘談中に、第一、第二のアダム、即ち死を來したるものと、死を滅するものとの觀念既に顯はれたるを見る、ヘラタレスは又冥府を滅し、冥府の怪獸セルベルス(Cerberus)に勝ち之を俘にせり、希臘の神秘祭に於てはヘラクレスは、オルフェウス(Orpheus)と共に下界に於ける勇者として祭られ、ヘラクレスが畢生の大業たる

生の力を以て死を滅す行爲は、其終局に於て其功を全ふするを得たり、彼は靈山エマに於て其身體を燒盡したる火焰の中より、條忽として榮光ある姿と變じ、其父、ゼウス]の遣りたる雷雲に跨り、アテネ(Athene)之か先驅を爲し、ニーケ(Nike)其周圍に飛從し、終に飄然として天に昇り、天神は彼の勝利を稱賛して、彼に勝者の榮冠を被らせたり、茲に到て運命の怒は消滅し、永遠の生命と喜とは其全勝を得て、完全に達したる彼を迎へたりき、ヘラクレスの神秘談も、プロデコス(Prodicus)の昔譚に於て其意味一層深遠となり、ヘラクレスは人類の純潔なる徳義心を代表する者となれり、彼の勇行は外界の戦に存せずして、専ら其内心に於ける道義上の克己にありき、彼はアテネに従ひ正義の困難ある道を選びて自ら之に處し、却てアフロデーテ(Αφροδίτη)に従ひ、卑賤なる快樂の生涯を送るを欲せざりき、ヘラクレスは希臘の「カラカガチャ」(Kalkaguthia)の模型にして、夫の正義に代へて快樂の道を選みたる「パリス」(Paris)の行爲と、全く其反對に出たるもの也、

希臘の宗教は自然宗教と、道義的宗教の中間に立てり、此宗教に在ては、ヘラクレスは眞る文華の勇者也、然れども道義的宗教若しくは歴史的宗教に在ては、其中保者

の性質稍前者と異なる所ありき、是等の宗教に在ては、人類を救ふ神の發現は自然の現象にも、また人類の文明を進達せしめたる勇者の行爲にもあらざりき、寧ろ至高なる神の發現は、彼等が特殊の宗教心に於て認めたりき、故に神人間に立つ神聖なる中保者は、其宗教の起原及發達に於て、最も力を盡したるもの、殊に其宗教の開祖等なりき、曩に余輩が一般の中保者に就て述べたる中保者の要は神と人との交通和合を客觀的に表彰するにありとの事は、是等の道義的宗教に於て、最もよく適中するを見る、是等の宗教に於ける其開祖の人物及行爲に關する觀念は、其の之を奉する民人の宗教心及道義心の反射なれば也。

ブンディイム(Bundehish)の神學に依れば、波斯の宗教に於て開祖ザラツスツラ(Zarathushtra)は其中心點なり、彼は世界歴史の中心に於て發現したれば也、世界創造よりザラツスツラの發現まで、三千載の間を以て世界歴史の前半とす、此間に在ては、アリマンの王國常に勝を制したれども、ザラツスツラの發現により、事態一變して、勝運全く善神に歸するに至れり、故に彼が生るゝや、善靈は喜ひたるも、アリマンは其滅亡の近迫せるを豫知し、光明の王國の勇將を除去せんが爲め、甘言を以て彼に約して

曰く、若し「アヒユラ」の詞を捨つることあらば、其報酬として全世界を擧げて汝に授けんと、然れども、ザラツスツラは此誘惑を排斥し、神の誠なる詞を世に顯はし、之を以て惡鬼を退治じ、アヒユラの王國と福祉とを此世に來すものとなれり、斯くして「アヒユラ」の勝利はザラツスツラより三千載の間繼續し、其王國大に繁榮擴張せり、而して其後サオシヤス(Saoshyus)と稱する大救主顯はる、彼はザラツスツラの聖靈に感して乙女の生む所也、故にサオシヤスは即ちザラツスツラの再來と稱するを得べく、彼はザラツスツラの事業を完結し、惡鬼の王國を亡し、以て「アヒユラ」の王國の勝利を全ふす。

波斯に傳はりたる回々教に於ける「マホメット」の人物に關する教説は、大に波斯の宗教の影響により發達を促したりと信ず、正統派の神等は彼を以て奇跡を行ふの力を有したる聖人、又は世界の審判者なりと主張し、正理派の神學は彼を以て大なる眞理を教へたる師なりといふ、然れども「シナイツ(Sinaites)」及「スーフラス(Sufrites)」は彼を以て元始より存せし神の光殊に「アダム」より以降人類に存したる光の化身なりといへり、「マホメット」は自ら人類以上の權威を有すると云はず、否、彼は自ら至聖完全

なりとも云はざりき。唯彼か世人に向て主張したる處は、其傳ふる天啓の誤謬なきことのみなりき。其の天啓の詞は彼自ら天使ガブリエルに依て授けられたりと云へり。然れども「イスラム」(Islam)の神學者は之を以て開祖の威徳を余ふるに尙不充分と認め、マホメットは生ながらにして、一點誤謬なき神の知識を有したるものと主張せり。是れ頗る法外なる言辭にして、彼か年少の比頃其國に行はれたる異教の信徒たりし著明なる事實を知るものは、誰か其自家撞着の甚しきものなるを信ぜざるものあらん哉。又マホメットの無罪説の如きは、彼の歴史上の事實と大に撞着する所あり。其始宗教改革の熱心を以て、自己の宗教を擴張したるにも係はらず、後年に於ける彼の暴戻放逸なりしを見れば、誰か容易に其無罪説を信するものあらん哉。是等の著明なる事實あるにより、「イスラム」の正理論者は正統派の主説を否定せり。然るよ正統派の神學は、其開祖完全無欠を證するにあらざれば、以て其宗教の完全なるを維持すること能はずと思惟す。これ蓋し彼等の爲に甚だ當然の事なりと知らる。此理想的と歴史的との中間に立ちて、調和の方便を作爲したる神學説あり。曰くマホメットは罪を犯すの力を有したり。然れ共實際に於ては毫も之を犯した

る痕なし。罪を犯すの力はマホメットの人性に屬す。然れども彼は奇跡的神能と、自己の徳義とによりて實際罪を犯すに至らざりしと。通俗の回々教徒は知識の攻究よりは、寧ろ信仰に重を置くにより、彼等の説は順次に超自然的に陥れり。故にマホメットに關する奇跡談は愈々旺盛となり、殊に彼か天國に登りし奇跡談の如き愈々出で、愈々奇なるに至れり。彼は天に至りて神より直接に豫言者たるの權威を授けられたりと宣ふ。彼ノ神性説を廻りて其根本を質すに當り彼は出生以前より存在したるものなりとの説さへ起るに至れり。シアイツの説に依れば、神は創造の時、於て自己の光の一閃を物質に注時せり。其閃光は即ちマホメットの靈魂也。神彼に語りて曰く、爾は我撰みしもの也。我の光は爾に宿らん。我は爾を導かん。我爾の爲に地を展へ天をして穹形ならしめ、また爾の爲に賞罰を設け天國と地獄とを造れりと。

斯くて豫言者は茲に至りて創造の中心及其目的となり。マホメットの孫ホサイン(Hosain)の死に關する昔譚も、亦此波斯の「シアイツ」の手に成れり。ホサインはオマヤツト(Omayyads)の戦争に戦没したりしが、彼の崇拜者は忽ち之を理想的に附會し

四百五十

彼を以て聖人及殉教者と爲して曰く、ホサインは神の豫定により罪の世を愛し之を救はんが爲に、其身を犠牲に供せり、之に依り神も彼を崇めて世界の審判者と爲し、彼又「ハラダイス」樂園の鍵を持てり、此昔譚は或祝祭の主目となり今日に至るまで年々波斯全國に於て、大なる儀式を以て執行する所也、此教主が罪人を愛し彼等を救はんが爲に、其身を犠牲にせりとの觀念は、更に一般の「イスラム」に於て見聞とせざる所にして、唯此觀念は波斯の「スーフズム」派の中に散見す、去れば是等は必竟「イスラム」が「インド、セルマン」人種の間には、其特有なる深奥の感情に適合せしめんと、殊更に其教説上に種々たる變更補足を爲さざるを得ざるに至りし一證なりと信ず、是等の變更は素と佛教に由れる歟、將た基督教より得たる歟は、今茲に研究を要せず、唯吾人の注意を促す所は、通俗間の昔譚及祝祭に於て、救済の觀念は歴史的人物の行爲に關し、其人物を理想的に描出し、不幸なる軍陣の戦死者を變じて、自ら其身を犠牲に供したる殉教者と爲し、以て崇拜に於ける必要の物件と爲したる事なり、波斯の「イスラム」間に於て救済の觀念が、普通信仰の一要素となりて崇拜の一部となりしは、専ら之を歴史上の事實に連環せしめたるに由る、去れば此歴

史的事實の救援に由らず、唯之を以て純然たる内心の實驗とし、神に對する奥妙不可思議なる愛の中にありと主張するものには、救済の觀念は「スーフズム」の秘教的攻究に止まるが如し、而して稍其觀念を一般に通用せしむるは、獨り宗教的詩歌に於てするが如し、夫の「サーデー」(Sadi)及「セラレヂン、ルミー」(Jalaludin Rumi)の詩二者共に十三世紀に屬すの中には、吾人が基督教の詩中にて最も精粹なるものを撰みて之に比較するも、漫に其下に出でざる奥妙深遠なるもの妙からざるは、余輩の承認する所也。

基督教を除きて救濟中保の信仰が、宗教上中心の要所を占むるに至りしは、獨り印度に在て之を見るのみ、彼處に於ては始め「バラマ」の秘教として顯はれたるが、後佛教に於て始めて普通一般の教義とはなれり、「バラマ」教の救済説の最も特異なる點は、夫の「マヌ」(Manu)の法律を尊崇する公教に對峙し、宛も反對の位置を有するにあり、蓋し「マヌ」の法律に於ては儀式的及道義上の行爲を以て、現世及未來の幸福に達するの道なりと教えり、然れども是等の公教の教ゆる所は、單に秘教に達するの方便若しくば其階段たるに過ぎざりし、毗陀の教に依れば一切の行爲ハ其儀式的たり、其

道義的たるに係らず、斷じて吾人をして救済に至らしむべきにあらず、唯是等は「サム
 サラ」(Samsara)に至らしむるのみ、何となれば一切の行爲は慾望力ある「エーゴ」より發
 ず、故に彼等は快樂若しくは苦痛を以て酬はるべし、然れども此快樂或は苦痛は、唯
 これ形體に屬して、無形の存在に屬せず、又變化あるものに屬して、不變化なる「バラ
 マ」の状態及救済状態に屬するものにあらず、又救済は道德上の改悛に依て得らる
 べきにあらず、何となれば其改悛なるものは、徳を進め惡を去るの謂なり、故に其働
 は或目的に向ひ之に變化を生ぜしめんとするにあり、然れども自己(Atman)は永遠
 不變なるものなれば、己れに向て變化を生ずるの動機を有せず、又他に向ひて變化
 を起すの動機あるも、是れ以て自己を感動すること能はず、また之を改悛すること
 も能はざる也、人類の終局救済(Release)は單に自己を知るによりて達し得へし、然れ
 ども其知識は一種特異にして、更に動作に關する所なく、假令善を慕ふ道義心の動
 作と雖も之と全く無關係也、此知識は自己が世界の大自然即ち「バラマ」と唯一なる
 を知るなり、一旦自己は「バラマ」と同一なるを悟るに至れば、「マヤ」の幻影に基く全一
 との分離直ちに滅却し、同時に有ゆる苦痛をも消失し去るもの也、固より自己と「バ

ラマ」とは常に同一なれば、救済は更に其關係に變易を來すにもあらず、亦自己を改
 新するにもあらず、唯無知の爲に彼我の間に横はりたる離隔物を除却せらるゝの
 み、然りと雖も救済の本領たる此知識は他の知識の如く、我等の動作に依て得らる
 べからず、別に一種特異の性質を有す、普通の知識に存する二個の對峙、知るものと
 知らるゝものとの區別は、此知識に於ては全く消失す、此知識は普通想念の方法に
 依て得らるべきものにあらず、反省法論理法、唯意識中に存する普通の對峙を超越
 する、不可思議なる直覺に依て得らるべし、故に曰く知らざるもの即ち彼獨り知る、
 なりと、かゝる高等なる知識は、普通原由の關係より説明し難きものなれば、公教は
 之れを以て神の恩惠の賜物なりとす、蓋し神の恩惠は人力の及ばざる所を成就し、
 又た自ら其の撰みしものに自己の本質を示す、秘教の説に依れば、これ人類の自己
 が絶体と唯一とになり、若しくは同時に主觀及客觀として人心に顯はれ、之よりし
 て其關係を隠没す、然れども救済の知識は、直接に人の行爲及其善行若しくは經典
 を講究するに依て得らるべきにあらずと雖も、是等の戒行は救済を來すの方便若
 しくは補助として宗教上に功あるもの也、彼等は公教者の主張するが如く、彼等其

者の中に功德ありて、其報酬を要すべきものにあらず、唯彼等は人類の心靈をして、救済の知識を受くるに便益なる道と與ふる恩惠の方便たるに過ぎず、パラマ教に唱ふる恩惠の方便は、其廣き意味より云へば、即ち左の如きもの、供物、施養、斷食、苦行、讀經、沈黙等なり。是等の行は尙方便の時代に屬するものにして、己に救済の知識に達すれば悉く無用となるもの也、恩惠の方便を其狭き意味にて云へば、靈魂の靜寂、自習、遁世、忍辱、專念等直接に宗教的感情に關係する所のものは、已に知るもの即ち救済の知識に達せしもの、爲にも、尙必要にして死に至るまで彼等が生活の一部を組織するもの也、而して救済は死に至りて全く成就す、救済の状態若しくは智者の幸福なる状態は、パラマの教義に依れば全く意識の特殊なる限定より脱したる有様なり、かゝる人には我と汝、原動受動及善惡等の區別は、全く消失するに至り、世界を以て幻影なりと悟るものには、世に其心を煩はすもの一物だもあらざる也、又自己の身軀の幻影なるを悟るものには、一切の苦痛——故に自己身体の苦痛をも更に感ずることなし、智者にして一旦身体は無形不變なる道理を悟りし時に、更に苦痛も快樂も感ぜざるなり、智者の意識に於ては、善惡に關せず總て過去の行爲は、

消滅して其痕跡だも止めざる也、既に「パラマ」を知り既に自己は動作あるものにあらずとの道理を悟りしものには、其以前に於て自ら動作あるものとの虚夢中の諸行は知識に依りて其の夢の醒ると共に、是も亦其痕跡を止めざるに至らん、此理を悟得する達人には、善惡共に其心を煩はすに足らず、其の未だ肉體なりし際其行善なりしにもせよ、將た惡なりしにもせよ、是等は二ながら彼の超越する處也、彼が爲せし所、又其怠りし所は、假令如何なるものにて、再び彼を苦むること能はず、此橋（救済の）は死も苦も乃至善惡の行爲も之を越ゆること能はず、總の罪ハ此橋に至りて還來するものなりと、然れども斯の如く己は動作あるものにあらずとの智識により總の罪を除却するは、必然靈魂の靜寂を來すと雖も、是等の知識は新なる道義的生活を惹起し、作善の勇氣を鼓舞するものにあらず、總の罪を除くと共に過去及未來に於ける一切の善行をも除却するもの也、蓋し既に自己の中に平和を得たるものは、再び之を束縛するの義務あることなし、自己の靈魂は「パラマ」なりと悟るに至り、已に其人の終局に達して之に負擔せしむべき義務あらざる也、一切の律法（無論經典の示す律法も其中にあり）は「パラマ」の知識に達する時は、恰も其及を砥石に

當て、鈍ならしめたる小刀の如きものなり。斯の如く知識を得て救を受けたるもの、靈魂は靜寂なり。雖も、开は唯死の靜寂なり、死して空虚なる心の靜寂なり。斯の如き心は善惡共に感覺を失し、眞偽二ながら其意味を失ふに至らん。斯の如く心の既に死せるもの、身軀は、恰も陶器師が其手を離したる後にも、尙暫時は車の廻轉止まざるが如く、暫時は此世に生存す。而して其以前に在りし生活力の殘物悉く消盡するに至り、智者の靈は新なる存在を得て幸福なるにあらず、唯、パラマの中

に吸収せらる是れ即ち救済の成就せるもの也。
 パラマ教の救済説は生活の秘教的理想にして、パラマの抽象的唯心説及一元説と密着なる關係を有するものなれば、其主説は或少數の哲學者の外に達すること能はず、多數俗間の人々は、マヌの律法に記されたる儀式及社會的善行の公共的理想を以て満足せざるを得ざりしなり。然のみならず、パラマ教の唱ふるが如き、理想的生活を送らんとせば、全く此世を厭離し出家脫俗して沈思默考に畢生を委ねざるべからず、印度に在ては其地勢稍遁世に適する所あるも、一切の衆生を悉く然らしむる能はず、社會の交通を謝絶して獨居安住するを得るは、此浮世の有様に飽厭し

たる少數人の外は敢て能する所にあらず、是等の故を以て、パラマの救済の道は、終に一般人民の所有たること能はざりし。此時に當り佛陀出で、大に救済の教義を一變し、第一之を「パラマ」の哲學より分離せしめ、普通一般人類の所有となり得べき最も實際的に變更せり。第二彼自身に於て一切衆生の了解し易き救済の模型を示し、第三其門徒等を以て一の組織体となし、以て各個人の稍不完全なる救済の動作を相助くるに至らしめたり。

佛教の通俗的救済と「パラマ」の秘教哲理的救済説とは、其形狀に於て甚しき相違ありと雖も、其實救済の概念に至りては、彼此殆ど同一轍なるが如し、蓋し彼此共に惡の原因は無知にありとす、無知は即ち意志をして虚無に牽着するものなりとす。又救済の基礎は知識にありとす、知識は人をして無知の幻影を看破せしめ、其虚無に執着せらるゝ意志を自由に安息ならしむに在り。固より佛教に在ては其知識の容量「パラマ」教の如く、自己は「パラマ」と同一なりとの理を確知するが如き哲理上の思想にあらず、而して此總念は佛陀が明に排斥せし所也。佛教に所謂知識なるものは、寧ろ實際的にして一切の苦痛は、意志をして存在より全く脱離せしむるにあらず

四百五十八

れば止むことなし、何となれば存在に牽着する意志は、凡て存在の理法に従はざるを得ず、一切實在の常住なき状態及一切安樂の定行なき有様に従はざるを得ざれば也、然れども、バラマ教に於て一旦知識を開明するに至れば、一切の諸行苦難も皆悉く幻影なるを悟るにより、智者の爲には過去の行爲は、善惡共に虚無に歸するが如く、佛教に於ても一たび變化の理法及一切安樂を慕ふの無益なる道理を悟るに到れば、此夢の浮世に執着したる意志は、之を離れて全く安住に達するを得べしと、去れば佛教の「ニルワナ」涅槃は實際に於て「バラマ」の「モクシャ」(Moksha)と更に異なる所なし、唯後者の如き凡神の哲理上の基礎を有せざるのみ、是等は二つながら慾望を滅却し、情慾を抑制し其心を死せしめたる状態也、又救済に達するの道に至りても彼此殆ど同一なるを見る、佛教に在ては儀式上の供物、毗陀の讀誦、或は苦難の戒行の如きに重を置かず、然れども總の施行、靜寂、忍辱、克己、遺生、沈黙等は等は皆「バラマ」に於て主張する恩惠の方便なるが、佛教も亦之を以て救済に入るの道と爲せり、佛教に於ける理想的生活も亦「バラマ」と等しく、出家遁世して全く世事を脱離し、家住を去りて獨り自ら清淨安立の生活を送るにあり、然れども此理想的生活を成就

するの道に於て「バラマ」教と其趣を異にするより、其結果に大なる相違あるを見る「バラマ」教徒は世を避けんが爲に各山中に隱遁し、無爲沈黙に其身を委ぬれども、佛徒は世を避けんが爲に多衆集合して寺院に潛み、此處に僧侶の團體を組織し、或は行脚僧となり、或は說法僧となり、普通人民の導師となり、教誡者となりて、明に一個の宗教上の職業を有するに至る、斯の如く比丘及比丘尼の集合體は、これ則ち佛教組織の中心にして、俗人の集合體は之に附屬することゝなれり、此寺院組織は佛教の長所にして、大に其教義を擴張するの方便となり、而して之に依て各個人宗教的生活の爲に其模範を與へ、其補助を與へ大に其生活を進むる、助援とはなれり、斯の如き僧侶の仲間も亦其模範を教祖に則り、又彼を以て其團體を結合する綱繩と爲せり、彼等は教祖の教訓及其生活に由り、其生活の理想を得、又之に由りて自ら獎勵を得たり、斯の如く佛教の救済説は、歴史的人物の生活と密着なる關係を有するにより、大に「バラマ」派の單純なる理論的救済説に勝る所あり、佛陀の教えし救済の道は甚だ淡泊且つ實際的にして、通俗人に適合する所あれば、始より佛陀の教義の爲には、大なる利益たりしと雖も、若し之のみを以てせば、恐くは佛教は到底自國

を越えて他邦までに傳播するの勢なかりしならん然れども其教祖の人物及生活は、彼の直接の徒弟の爲め、將た彼等に依て傳授せられたる信徒の爲に、活ける模範となれり、從來教祖佛陀を崇めて、管に宗教的生活の理想の化身と認めしのみならず、併せて彼を崇拜の目的となし、彼を以て世界に於ける至高の權能なりと尊崇するに至りしは、これ蓋し自然の結果と謂つべし、終に彼は佛教徒の眼中に於ては、世界を支配する神となり、其禮拜に於ては諸神の神、世界の父、一切の被造物を救ひ且つ之を支配するものと尊崇せらるゝに至れり、既に崇拜に於て其教祖を人類以上に尊上し之を恭敬するに至り、之より生せし必然の結果は、彼の生涯を飾るに數多の奇跡談を以てしたる事也、余輩は今佛陀に關する奇跡談の條目に就きて、茲に陳述するを要せず、唯余輩の注意を要するは、教祖の人物愈々信徒の前に尊拜せらるゝに從ひ、其の奇跡談愈々増加し、彼の誕生の如き種々なる怪譚の纏綿せるところとなれり、例せば彼は此世を愛するが故に天より茲に降臨して、女の胎内より生れたりと云ふが如し、而して佛教徒の爲には其教祖が此世に出現せしは一回に限らず將來に於ても同様の佛陀は世界の必要に從ひ、幾回も此世に現はれて一切衆生を濟

度することあるべしと。

佛陀の化身説に等しきものは、「バラマ」に於ける「ヴェシヌー」(Vishnu)の化身説なり、其中に最も重位を占めたるは、クリシナ(Krishna)の化身にして、其様佛陀に等しき所あり、クリシナは道義の點より云へば、佛陀に劣れる所あれども、彼は通俗的鬼神説及印度の古代に於ける勇者の昔譚とに關する所あるを以て其勢力頗る著しかりき、クリシナの誕生に係る數多の奇跡談中にて其重なる一二を擧ぐれば、彼が羊小屋に於て奇跡的に生れ、又迫害者の手を逃れんが爲に、其地を遁走せし事、是等は重なる「バラマ」の祝祭即ち印度の「クリスマス」の題目たり、クリシナの誕生祭ハ大に我「クリスマス」に類する所あるを以て、宗教界の一問題となり、兩祭禮の類似は偶然なるか、將た歴史的關係ありて然るか、若し歴史的關係ありとすれば東西孰れか其基なるや、大に世の注意を置きし所也、此疑問は曩に余輩が陳述せし佛陀の奇跡談との關係に等し、余輩は今強て之を定むるを欲せず、唯一層綿密なる歴史的研究の結果に放任するを可とす、而して唯余輩が茲に一言すべきは、かゝる疑問に關し神學世界に少々ならざる混雜を惹起したるが如きは、實に余輩が了解に苦む所なり、若

し少しく靜思せば假令其事は孰邊に歸するも、かゝる奇跡談を生ずる重なる理由は、必然心理的ならざるべからず、外形の事情如何に係はらず、凡宗教心殊に人類の救濟説を主張する宗教に在ては、奇跡談を造作する心理的動機は常に其中に存するもの也。凡そ救濟説を主張する宗教に在ては、其教の性質上より其教祖の一身に於て、神の救濟の力の發現を認めんことを希望するものなれば、始より努めて其教祖の人物を神と密接なる關係あるものと信ぜんと欲す、これ救濟を欲する宗教心の自然の働にして、余輩は其働の正當なるを否定すべきにあらず、亦其中に含有する眞理を輕視すべきものにあらざる也。

基督教に於ける救濟及中保説は、イメラエルの宗教とは密着なる關係を有す、然れども彼此の救濟説は、全く相符合するものにはあらず、神學者が常に唱導する舊約書中に於ける「メシヤ」に關する豫言と云へるは、甚だ複雑なる觀念を其中に含有するものにして、正當に之を云へば、彼に於ける眞實なる「メシヤ」の豫言は、更に基督教の救主に應ずる所なく、亦能く基督に應ずる。豫言は、彼に在ては更に「メシヤ」の意義を有せざるもの也。第一の種類を舉ぐれば、夫のダビテの子孫に關する豫言の如きこ

れなり、第二の種類は夫の第二「イザヤ」の豫言中にある、大なる耐忍と苦痛とを以て、イメラエルを教えたる神の隷僕の如きもの也、然れども、之を述る記者の眼中には、固より將來の「メシヤ」あることなく、單に當時に於ける「イメラエル」人中の豫言者若しくは其他の聖人中にて、彼の眼に理想的の「イメラエル」なりと認められたる姿を、理想的に描出したるに過ぎざるべし、善人の苦は罪人の贖たりとの觀念は、夫の「ユダヤ」神學の骨子にして自己及他人の善行は以て自己及他人の罪を贖ふに足るとの救説の基となれり、而して其弊や却て外形の善行を偏重するに至れり、斯く「パリサイ」宗の神學に於ては、過去及現在に於ける「ユダヤ」の諸聖人の功德を偏重するが爲め却て道徳心を滅殺し、「ユダヤ」人をして自己の正義を誇らしむるに至りたれども、使徒パウロは此救濟を十字架なる基督の死に適用し、之をして彼が救濟に關する救義の根本とならしめ、人は唯神の恵と信仰に由れる義に依て、其救濟を全ふするとの説に依り、「ユダヤ」人が因て以て憑托せし自己の義を全く放擲するに至れり、パウロの救濟説は頗る困難なる問題にして、今日に至るまで、其義を明了に覺知し得たるもの太だ稀なり、然り而して其困難なる所以のものハ、彼の救説は「ユダヤ」教

に基き又其中に含有する假定により、彼等の律法的宗教を亡ぼしたれば也、罪は相當の刑罰なくして許さるゝことなく、亦律法の要求する罪の刑罰は、則ち死に外ならざる也、然れども義人の苦は彼と關係ある同種族の爲には、其罪を贖ふに足るの功徳ありと、是等は、パリサイ宗の中に生長したるパウロの爲めには實に確固不拔の定義なりし、パウロ以前の基督教に於ても、義人の善行に依つて罪を贖ふとの説は、業に已に基督の死に適用せられざりしにあらず、されどもパウロが右の定義を基督の死に適用して得たる結論は、一種特色にして亦甚だ斬新なりし也、これ蓋し彼の基督の人物に關する觀得甚だ高尚なりしが爲ならん、彼は基督を以て唯、ユダヤ人中の一個の義人と認めず、又單に國民的メシヤにして其難行は獨り斯民の爲めのみとも思惟せず、彼は基督を以て第二のアダム天より降りし新人類の原型にして第一のアダムが一切人類の惡なる側面を代表せる如く、彼は其一切の義なる側面を代表するものなりと思惟したり、故に基督の死は其意味甚だ廣大にして、恰も人類は皆彼の中に在て、彼と共に死せしが如きもの也、故に其救済は天下萬民の爲にして、彼等を救ふに充分なれども、何となれば彼は天より降りし人類の頭領にして、彼

等一切を神の前に代表するものなれば也、其實際に於ては總て彼の死は、己の身代りなることを認め、之を以て我死と看做し、再び自己の意識中に實驗し自己を以て理想的に基督の中に入りて、又基督と共に死より蘇りたりと感識するものを救ふの力あるもの也、故に基督の死は抽象的客觀的には、全世界の贖罪を成就せり、然れども其贖罪が主觀的の効力を有し、罪より許されて義人となり得るは、獨り其信仰に依りて基督の死を内心に於て我の有と爲すものに限る、即ち之を以て唯に一人が萬人の身代りに死せしとの外形的經驗に見做さず、寧ろ萬人が一人の中に在て、一人と共に死せりとの内心的實驗に認むるものに限る、斯くてパウロは基督の人物に關する高尚なる觀得に加へ、信仰の意義を解するも亦頗る深遠なり、彼は信仰を以て神に對する順行の中心點と爲せり、彼の説に依れば信仰とは基督と共に生死全く一ならんが爲に、其心を己を救ひし主に奉呈すると也、此信仰により多くのもの共に生長して一の靈となり、一の身體の諸肢となれども、其頭領は一なり、彼等は神の子なる基督の心、即ち己を捨て、他の爲に盡さんとする愛の精神、自ら神に等しき所の威嚴を顯はすに、暴行を用おず、私意を挿まず、温和、柔順、謙遜にして、神の

爲め又人の爲めに盡し、或は之が爲に種々なる苦痛を受くることに於てせし眞愛の精神に勵されたり。斯の如く他の人の功德及難行に於て罪を贖ふことを得るとの「パリサイ」宗の教説の意義を變更して、之を修正する時は、其教説に附着する有害の分子の悉く除却せられ、茲に深遠なる道徳上の觀念を現出す。一たび純潔なる人類の原型及己を捨て、人を救ふ愛の模型なる救主を信じて、之に其心を憑托する時は、其人の内心に於て大なる變化を生じ、古き罪と古き律法の束縛とは、共に消失して、茲に斬新、純潔、自由なる善を行ふの精神を發揮する也。

去れば「ユダヤ」教に於ける贖罪の觀念は、「パウロ」の爲には彼及彼の書を讀む「ユダヤ」人をして、基督教の救済の觀念に達せしむる木槌たりしに過ぎず。基督教の救済は人心以外にあらずして、寧ろ人心以内であり、即ち罪の律法の奴隷たる古き状態を脱して、神を信じ神を愛するの狀態に復歸するにあり。此點より見れば基督の死の如きは、罪の罰を要求する律法を満足せしめんが爲め、神の設けられたる贖罪の謂のみにあらず、一方に於ては其最も好きものを以て我等に授け、亦其報酬としては我等の心の外には、更に要求せざる神の愛の證據也。又他方に於ては我等の神に

對する順行の模型也。「パウロ」も亦基督と等しく、救済の教義の中心は内心よ於ける道義的の動作たり、即ち古き罪ある人は死して、新なる神を愛する人の出生することとなりと教えり。「パウロ」に於ては此道義的救済は、歴史上に於ける基督の死により、始て原動力を得たるのみならず、基督の死は智慧の差別なく永く一切の人に向ひ、大なる勢力を有する模型及動機なりき。斯の如き模型及動機は救済の宗教に於ては、必須欠くべからず、何となれば人心の内部に於ける道義的救済の進行の如きは、甚だ不可思議なるものにして、到底言語を以て説明し得べきにあらず、故に是等の模型に依り大に救済の宗教の發達を助ることを得たり。「パウロ」が基督の死を以て萬事を網羅する救済の中心點なりと教へたりしは、實に此點に於て然りとせず、亦斯の如きは固より否定すべきにはあらざる也。然れども「パウロ」の教義は大に彼が「ユダヤ」教徒たりし時より、保持し來れる「ユダヤ」教の律法的と密着に關係する所あるを以て、彼の教義は甚だ解釋に苦むと同時に、彼自らも頗る惑迷せるが如き所なきにあらず、恰も彼の胸中には二個の心靈ありて、一は律法を墨守する古き「パリサイ」人の心靈にして、他は信仰の中に神の小兒の自由を得たる、新しき使徒の心

靈也。此二個の心靈のパウロの胸中に於て相戦ふ状態は、自然彼が救済に關する教義の上に反映して、彼の説ハ舊慣なるユダヤ教と斬新なる基督教との中間に彷徨するが如き觀なき能はず。此議論は之を理論上より得ること頗る難事なり、然れども實際的宗教の生活に於ては、甚だ有益たることを記憶せざるべからず、吾人は使徒パウロが經由せし進行の過程、即ち律法的よりして幼兒の如き信仰の狀態に進むの道程は、後世に於ても多の基督信徒殊に「プロテスタント」の基督信徒が常に實見せし所たるを忘却すべからず、彼等は昔時パウロが爲せし如く、律法的觀念の木挺に依り、自己を律法的宗教の上に率揚したる僣強也。世人が律法の奴隷たる恐怖の狀態より、福音に於ける幼心の信仰に達するの時に於て、此兩者の中間に立ち、之が棧橋とされるパウロの神學に依て大に裨補せらるゝ所あるは、これ人情の自然にして心理上正に然るべきものと信ず、これ即ち基督教會に於て、此種の教義が甚だ解釋に困難にして、又種々の難問の纏綿しつゝあるにも係はらず、常に多の人の喜びて採用する所となりし所以也。これ蓋し至當の事なり、何となれば教會の教理の目的は、唯正當なる觀念を備ふるに在り、而して其正當なる觀念とは、實際的に

宗教心を培養するに有益なる觀念を云ふ也。

パウロの救済説は一種の特質あるにより、其起原と同様の假定存する所にあらず、れば、容易く了知すること能はざるものなり、彼の救済説が獨一の教説たらざるは之と異なる救済説の既に新約書に存するの事情に依て考ふるも明也、ヨハネ神學に於ては、パウロの議論の起點たる贖罪の説あるを見ず、何となればパウロが甚だ苦營したる律法は、此神學に在ては業に已に超越せられて、神は即ち愛にして自ら惠あるを顯はす前に、律法の要求する罪の刑罰を要求するか如きものにあらずと教えられたり、去れば此神學に在ては、メシヤの死は、神の呪咀を満足する罪の贖なりと云ふが如き思想更にあることなし、救済ハ中保者の功德及苦行によりて成就すべきが如きものにあらず、救済は已に救主の身に存せり、彼は自己の神の子たる意識に於て、救を來す恩寵と誠實を持せり、彼亦是等を其動作及言詞と其死及生に依りて世界に授けたり、此神學に於ては救済の能は、基督の死の如き一個の事實に存することなく、寧ろ彼の眞誠なる靈より發射し來れる、世を輝し人を活す力に在て存する也、此靈近世の詞を以て之を云へば、宗教的天才といふが如きものならんは

第四福音書の記者が、當時猶太的希臘的思辨に流行したる「ローゴス」の總念に依て顯はせし所なり。此總念に於ては、猶太神學の天啓の詞(Memoria)と希臘哲學の世界を形造し、之を支配するの理性とが相混和して顯はれたるもの也。此二個の觀念ハ第四福音書の記者を距る一百有餘年の昔時に在て、已に「ローゴス」の手により相混和したるもの也。去れば「ローゴス」てふ總念は、當時一般の人の熟知する所となり、普通の觀念たりしや明也。第四福音書の「ローゴス」の總念は、其起原「ローゴス」の哲學に在るか、或は「ユダヤ」の神學にあるかの疑問に至りては、全く無用の贅辨たり。切に之を云へば、「ローゴス」の總念は第二世紀に於ける一般普通の宗教心の所有となり、之れり。第二世紀の宗教心は其一般に使用する「ローゴス」總念の種々なる起原等に就き、彼是と細に穿鑿するの必要を感せざりき。此甚だ便利なる總念は、實際は東西の智慧の相合して産出したるもの也。かゝれば、「ローゴス」總念の起原問題に關する無用の辯論を費さんよりは、寧ろ第四福音書の記者は、何の目的を以て當時流行の「ローゴス」總念を耶蘇の身に適用したる耶、又其適用の結果は如何なりし耶を、精密に講究明悟するに如かざる也。先づ第一余輩に明なる所は、若し基督教の教祖にして、

天地創造及救濟の歴史に於て、中保の役務を爲せし「ローゴス」が肉躰を形りて顯はれたるもの、即ち化身なりとすれば、これ基督教をして、世界に於ける諸の天啓の終局、即ち「ユダヤ」教及其他の異教の上に、遙に超越したる完全なる宗教とするにあり。ヨハネの書に於けるが如く、基督と神の關係は、其本質より云へば神と同一なれども、其存在の點より云へば、彼は神に憑依するもの也。而して其間最も密着なる關係、恰も親子の濃なる情愛を以て相結ばれたるが如きハ、これ豈に基督教否、有ゆる宗教の完全なる理想にあらずして何ぞや。若し第四福音書の記者にして、「ローゴス」は昔より存在し、神の天啓を司りしものなれども、歴史上始て耶蘇の身に於て完全に顯はれたるものと爲すは、これ豈に基督教は甚だ斬新なる宗教なりと雖も、突然不要用に此世に顯はれ、原因なく若しくは其以前の事情と全く無關係にして現出したるものにあらず、寧ろ人類の宗教心を實成したるもの、常に人類に存せし神の理性の力の發達したる極點なりと云ふにあらずして何ぞや。余輩は「ヨハネ」の神學の「ローゴス」説に於て、眞誠なる思辨的思想の痕あるを見る、其合理的唯心論は遙に猶太的基督教の狹隘なる國民的「ホシチピスム」の上に位し、否、現今に於ける宗教的

「ボジチビズム」よりも遙に其上に位するものなるを認めざるを得ず、然れども此「ロゴス」説の弱點をも決して輕々看過すべからず、「ロゴス」は實に神聖の原理たるのみならず、一個の神性ある「ペルソナ」也、而して直ちに之を歴史上の耶蘇と同一なるものと認めたるにより、耶蘇の生涯に於ける歴史的性質ハ全く失せて、人にはあらで人の形狀を装ふたる神を現出するに至れり、他の福音書に在ては、耶蘇に關する奇跡談夥多にして、爲に大に耶蘇の人物を誇大にしたる所なきにあらず、余輩は尙ほ其中に明に人の分子を認め得れども、第四福音書の耶蘇に至りてハ、全く理想的にして活潑なる歴史的の分子を失ふに至れり。

古代の基督教會は救済を以て神、基督、及惡魔の間に於ける争闘、若しくは訴事の如く思惟せり、而して人類は、唯其中間にある争闘の受動的、目的たるに過ぎざりし也、かゝれば當時の教會が救済に依て和順すべき二個の分子なる神と人とを、外形的に中保者の一身に代表せられたりと認めたるは、蓋し自然の結果と云はざるべからず、故に彼等は基督に在ては神人の兩性二ながら完備せりと思惟したり、斯の如く中保者の一身に於て、神人兩性の完備を認めんと欲せし理由は、アンセルムスの議

論を以て明白なりと信ず、彼は救主に於ける神の化身の必要を論じて曰く、抑人類の罪は神に對する凌犯、且つ其の世界の秩序を壊亂するものなれば、これには無限の刑罰相伴ふものなり、神ハ又自己の威嚴に對し、人類の罪を不問に附する能はず、故に神は其の凌犯せられたる威嚴を回復せんが爲め、無限の贖を要求す、若し其の贖なからんか、彼は止むことを得ず、犯罪者たる人類を其の罪に相當する死の刑罰に處せざるを得ず、然れども此の贖は罪ある人類の得て爲し能はざる所、何となれば、凡て人類の有するものは、皆有限の價值あるもの而已にして、一も無限の贖に相當すべき價值あるにあらざればなり、又人類は其の力に及ぶ限を盡して神に従ふも、これ唯自己の義務を果したるに止り、其犯罪を償ふべき餘徳あるにあらざればなり、去れば此困難を免るゝためには、人類が神に對して負ひ而して自ら之れを贖ふ能はざる犯罪を、人にして又同時に人より殊勝なる「神人」に依て贖ふの外他に其の道あるを知らざるなり、然れども此の贖は「神人」たる基督の柔順なる生涯によりて爲し得べきものにあらず、蓋し基督の柔順なる生涯は、これ即ち彼の當然なる義務を盡したるまでにて、未だ以て餘徳あるものと爲すに足らず、唯彼が其の聖き生

命を捧げて、十字架の死に就きたるは、これ即ち基督の善行が其義務以外に逸出したるものなるにより、神は之を以て限なき價値を有する贖として、神人なる基督と同種族なる人類の罪を贖ふに十分なる價値あるものとして受け給ふべしと、右の救済説は中古の思想を其儘に反射したるものたるや明白なり、當時に在りて互に其威嚴を冒されたる時には、或は之に酬ひ或は其贖を要求して、始て満足を得たりしにより、彼等は直ちに其關係を人と神とに及ぼし、彼此の間に於ても亦然るが如く思惟したり、彼等は人類同輩の間に在て始て適當なるを得る辨償の方法は、全く其類を異にする造物者と被造物との關係に類推して、敢て道理に背かざるや否やは研究せざりき、又斯の如く人類相互間の辨償法を直ちに神に適用するは、これ豈に神をして人類の位地に下らしめ、却て其真誠の威嚴を毀損するものにはあらざるやの疑問は、更に彼等の念頭に浮ばざりしが如し、アンセルムアンセルムの救済説は、カトリック教會に於ける、聖人の餘徳説を直ちに基督の救済に推及したるまで也、蓋し餘徳とは自己の義務以上の善行を意味するものにして、其功徳は他人に之を分與し以て其不足を補ふに足るとするもの也、カトリック教會に於ける救済の教義中には

顯然人類に餘徳を積むの力あり、又其餘徳ハ之を他人に分與するを得るとの假定を含有するものあれば、アンセルムアンセルムの辨償説の如きは、則ちカトリック教會の救済説より、自然に發し來れる結果なりといふを得べし、唯アンセルムアンセルムの爲せし所は、教會中に行はれたる善行餘徳説に基きて、基督の救済の働を説明し、又聖人達の善行の餘徳は、基督の救済の業を模寫し、或は繼續するものと主張したるにありき、故に第一の中保者たる基督の外に、多の中保者聖人達を現出するに至りしは、甚だ當然なる事なり、而して是等の聖人を教會てふもの、中に總括し、之を以て神人間に於ける一大中保者と主張するに至りしは、これ亦自然の結果なりと知るべし、然り而して這般數多の中保者は終に根原の中保者たる基督を排除して、教會の崇拜に於て神學の議論に於ては然らざるも、痛く重用せらるゝに至りしは、これ亦怪しむに足らざる也、斯の如きは必竟基督の一身に於ける神性を偏重したるの反動なりと知らる、基督の身に於て人性は神性の爲に次第に其痕を收め、彼をして彌々不可思議的に人心の得て達し能はざるものと見做すに到り、神人間の欠乏を充さん爲に數多の新しき中保者を造作し、以て從來基督に望みたる神人間の中保を最も

人心に近く且つ了解し易き聖人達に従りて之を埋めんと欲したり斯くてカトリック教會に於ける聖人崇拜は總て宗教上の中保者崇拜に基くものにして之と其興廢存亡を齊しくすべきもの也。中保者崇拜の最後の結果即ち教會を以て諸聖人の集合躰として神人間の大中保者と爲せしは宗教上に甚だ重大なる結果を有し且つ其害も甚しかりし也。煩鎖學派の説に依れば教會は基督及諸聖人の功徳を積蓄したる倉庫の如し故に教會は各個人に對し是等の功徳の實を其需用に従て分與し以て彼等を救ひ神の恵に與ることを得せしむるものなりと斯くてカリック教會は一切人類の良心に對し絶對的の權力を有するに至れり。救済及中保に關する「カトリック」教會の教義にして最も攻撃せらるべき弱點は即ち茲に在り故に「プロテスタント」は常に之を以て其批評の急所と爲せり。諸聖人の功徳に基く「カトリック」教會の中保説を排除せん爲に「プロテスタント」は唯一なる中保者たる基督の功徳を以て充かなりとし他に中保者の要なしと主張せり。然れども彼等が此眞理を主張するに當り其大体に於ては尙ほアンセルムスの觀念を固守したるが如しアンセルムスの救済説は其根據中古の「カトリック」教會に於ける世

界の觀得に屬するものなれば今や悉く排除せらるべきものなるに「プロテスタント」の神學者が尙ほ之を固守したるは抑撞着の甚しきもの也。彼等は人類の行爲中にて其の職分以上に出で餘徳たるもの一も有ることなしと主張しながら基督の死に關する贖罪説に於ては尙ほアンセルムスの餘説を維持したりき否。彼等はアンセルムに一步を馳せて管に基督の死のみならず又其の生涯の順行も齊しく餘徳あるものにして之を吾人に分與することを得ると主張せり。然るに一方に於ては彼等専ら良心の主張する各個人の責任は獨り各個人のみ之を負ふことを得るとの説に重を置きしが如きは實に不權衡の甚しきもの也。然れども余輩は此不權衡に於て屢に述べたるパウロの救済説と齊しく觀念と形狀と方便と目的との間に生じたる齊しき争闘あるを見る。パウロは「ユダヤ」教の律法的贖罪説を利用して以て其律法的宗教を排除することを得たり。「プロテスタント」の神學者は基督の贖罪に關するアンセルムの説を利用して「カトリック」教會に行はるゝ諸聖人の功徳説を排撃し併せて人類の行爲中に其職務に越ねたる餘徳あることを排撃し人は唯信仰に依れる恩惠のみによりて救はれ得るとの説を主張したりき。斯くの如く教會

の始に在りては基督の餘徳を認定しながら、其後に到り教會中の諸聖人の餘徳ありしことを否定せんとするは、撞着は實に撞着たるを免れずと雖も、余輩は之を以て歴史上に於ける己むを得ざるの結果と認めざるを得ず、又かゝる撞着は實際的宗教の生活に於ては、理論界に於けるが如く、甚しき不權衡を感せず、蓋し實際界に於ては様々なる感情相合して、理論上の不權衡の如きは數々其の中に和平せしむるを得れば也。論理上より之を云へば、教會に於ける救済説に對する「ソシニ派」(Socialists) 及正理論者の批評は甚だ適切なりと信ず、然れども教會が敢て是等の理論上の反對に屈することなく、尙パウロ、ゲルハルト(Paul Gerhardt)の物せる、呼傷を蒙れる神の仔羊よとの歌を謠ふて止まざるは、甚だ正常なり、蓋し這般の歌は其根底には已に維持しがたき教義的觀念ありと雖も、彼等は唯死に至るまで人類を愛したる救主に對し、感謝の情に堪へざる、眞誠なる福音的の感情を發揮する機具たるに過ぎざりしなり、内心の感情伴はず唯冷々たる知識上の目的たる教義の如きは、實に論理上の反對を受るのみならず亦道義上の攻撃をも免れず、余輩は數々理論上の教説をも偏重して、内心の暖なる感情的信仰を忘却したるの時代に於て、道徳上の

退歩ありしことを忘るべからず、去れば「パイテメム」(Pietism) 及其他之に類似する教派が、重きを純乎たる教義的の觀念に置かず、寧ろ内心の實驗感情意志等の動作を重じ、教説の如きは單に是等の感情を發揮するの機具と認めたるは、宗教歴史に於て其功蓋し少々にあらず、彼等の主張する所によれば、救済はパウロの主張せしが如く、心中の出來事たらざるべからず、基督は我等に代りて死せしとの意義を變じ我等が基督の中に入りて死し、基督の死は即ち我等の古き人の死なり、又基督の復活は即ち我等の新しい人の復活にして、其出來事は皆悉く我等の心靈中に存するあり、救主の動作は即ち是等心中の様々なる状態を發揮するにありと云へり、斯かる觀念は「ミスチック」(Mystic) 「パイテニスト」(Pietists) 及「ヘルムツチニスト」(Hermhutists) 等の物したる心靈的唱歌の中に於て最も著しく顯はる、「ゴットフリート・ノット」(Gottfried Arnold) 「テルステゲン」(Tersteegen) 「フランセス・リヒター」(Fr. Richter) 「ランバハ」(Rambach) 「ヒルレン」(Hiller) 「ボガツキー」(Bogatzky) 「ミンゼン」(Menzel) 「ジンゼンドルフ」(Zinzendorf) 「ノヴァリス」(Novalis) の總作せし唱歌は、甚だ温に甚だ強く甚だ深く甚だ清く且つ宗教的感情の自由ありて、實に福音的基督教の精神を最も能く反射したるものにして、教法改革の精神の眞

誠なる反響なりと知らる。

然り右に述べたる最も深遠に、最も活潑なる感情的宗教心は、最も深遠なる思想と甚だ密着なる關係を有することあるは、余輩が是より陳述する古今の神學者及哲學者が、救済の觀念の中心なりとして主張せし所と、好く符合する所あるを見て明了するを得べし。余輩が是より述べんと欲する所は、是等神學者及哲學者の金言中僅に其一端を叙するに過ぎざるべし。讀者若し其全豹を知らんと欲せば、余が第一卷中に述べたる所を参考して可なり。譯者曰く此第一卷とは、フ氏の宗教哲學中の第一卷にして、余が抄譯を逸せしもの也。其第一卷に於ては、フ氏は、*マイステル、エグハルト*よりロツチエーに至るまで、諸種の神學者及哲學者の宗教思想を詳論したりき。讀者若し英譯、又は獨文の原書に就て之を知らば大に益する所あらん。*マイステル、エグハルト* (Meister Eckhart) の説に従れば、救済とは吾人が自己の意志及思想を斥けて全く神に服従し、神をして自己の中に働かしめ、かくして己を忘れて神を受くるにより、神と一体となり神亦我等の中に宿れること宛も基督に於けるが如しと云へり。獨乙神學の唱ふる所に依れば、神の働にて吾人を救ふに足るものは、吾人

の中に存するものにして、吾人の外にあるものは、更に吾人を救ふに足らず、吾人は其働を我心中に實驗し、之を知り、之を愛し、之を感じ、之を味ふにあらざれば、以て其救済に與ること能はざるべし。然れども吾人の中に於ける働とは神の愛により奮勵せられて、自己の愛より脱離し、神の靈と神の意志に依て一切の作善を教えらるゝことなり。我等の私意はこれ即ち我等の爵なれば、此私意より遠離するは、これ即ち救なり、罪の免除なり、福祉なり、自由なり、又是等の目的を達するに更に他道あるを知らざるなりと、プロテスタントの接神學者も齊しく此道理を教え、以て教會の教義に反對せり。ウワイゲル (Wigell) 曰く基督の死と其功徳ハ、彼と共に新しき命に復活したるものにあらざれば、其功績あることなし。我等を救ふものは我等の外なる基督にあらず、唯我等の中に住めるもののみ能く之を爲し得るなりと。フランク (Frank) 曰く *アマム* と基督は吾人の各個中にあり、何となれば吾人は各、肉と靈とを有すれば也。肉に依れる基督歴史的耶穌は、我等が彼に依て神に達する爲に與へられたる一例たるに過ぎず。基督の歴史は其肢なる有ゆる信者の中にて、再演せられざるべからず。夫れ道吾人の中に在て肉となりて苦痛を受け、死して復活し、吾人の中

かり古きアダムを放逐するものなりと云ふを得べしと、ペーラーに依れば救済は吾人の意志の諸の争闘及苦惱の根原たる私を離れ、其本原なる神の意志と全く和一するにあり、信仰とは常に基督は吾人の罪の爲に死せりとの歴史上の事實を認定するのみにあらず、信仰は即ち神に向ふ愛の外他に一の愛を有せず、自己の意志を全く神の意志に投じ、神と和一して其中に生活し、神の靈をして吾人の中に活きて働かしむるにあり、然る時は吾人は有ゆる罪より免るゝを得、何となれば神の静謐なる永遠の中に其の自由を得たるものに向ひては、罪は全く其力を失へばなりと、ギョルダノー、ブルーノー (Giordano Bruno) も亦説を爲して曰く救済は其心を道義的美術的に高尚ならしむるにあり、下等なる情慾を去り、誠と善を慕ふ高尚なる情慾を發揮するにあり、救済は神を愛するの愛其心に存する諸の情慾中の首座を占め、心靈の完全を得んが爲に力を致すに於て始て成就するものなりと、スピノザも亦ブルーノーの跡を追ひ、人類の福祉は神に對する知識上の愛にありて存すと云へり、此知識上の愛は神の完全を知るに依り、始て吾人の中に發揮せられ、吾人に與ふるに諸の情慾を抑制し得るの力を以てし、又吾人をして諸の不自由より脱離せ

しむる也、又完全なる平安と内心の自由とは最大の福祉を來す方便にはあらずしてこれ即ち最大福祉なり、スピノザの説に依れば救済の爲に必要なるものは神の永遠の子即ち神の智慧を知るにあり、歴史的基督に關する知識の如きは絶對的に必要あるものにあらず、何となれば神の智慧は一般人類に啓示せられたるも、耶穌基督に於ては他に勝りて殊に著しく顯はれたれば也、カントの説に曰く救済の爲に必要ある信仰の目的は理想的基督にして即ち神の心に適ふ人類の理想なるもの也、かゝる理想は素と人類の理性より發す、然れども基督の如き道德の力大に發達して總て之に反對する分子を壓倒するを得たる、歴史的人物に於て外形的に顯はれたれば、余輩は彼を以て完備せる徳性の概念の一例として見るを得べし、果して歴史的基督は其品性に於て右の理想に好適する所ありしや否やは左まで關係する所にあらず、又此點に就ては吾人は到底明に悟得する能はざるべしと、ヤコビ (Jacobus) も亦宗教的理想と歴史的眞實を明にし、其クラッテム (Christus) に贈りし文に曰く、余輩は凡て人の神性と認め、又之を見て神聖なる生活を發揮せしむるものは、爾の眼中に於ては悉く基督の姿と其の名稱の中に合着せることを了解す、爾

の基督の中に於て尊崇するもの、又神聖なるものなるにより爾の心之に依て正しかれば、爾は偶像を崇拜するにより爾が中なる理性と特性とを辱めざる也。爾の外なる基督ハ如何にありしも其の實際は爾の總念に好適する耶否耶、或は基督なるもの眞實に世に存在せしや否やの問題は如何に成行も爾の觀念の誠及之より發せし諸の感情の價值に對しては、更に關係あることなし、唯爾の中に於ける基督のみ爾に對して大なる重を有するもの也。爾に在ては彼は寔に神性なるもの也、爾が神を見るを得る限りは、彼に依て神を見ることを得ん、爾が彼と共に至高の觀念に達する時、爾惟へらく（無邪氣の誤なり）爾は唯彼に於て是等の觀念に達し得るなりと、フ・ヒテラーも亦教會の神學に於て明に二個の區別を立て其價值も亦甚だ異なる所ありと爲せり、即ち一は純正哲學的にして其中には人類の存在と神の生命とは同一なることを認めたるの意を含む、他は歴史的にして此合一は始てナザレの耶穌に於て人類の意識に顯はれたるものといふとなり、人を救ふものは右に述べたる哲學的の分子にして歴史の如きは、單に其補助たるに過ぎざる也。若し人眞實に神と合躰し彼の生活に入るを得ば、其如何なる道によりて此點に

達するやの疑問に至りては更に重を置くを要せず、唯之に達する道に就き彼是論辨を費すは有害無用の議論たるに過ぎず、かゝる辨論を費さんよりは寧ろ其物自身を得るの勝れるに如かず、福祉に達するの道唯一あるのみ即ち己を殺して基督と共に死し、一言せば更生すること是れ也、其道に關する歴史的事實の知識の如きは救濟の爲には何等の效能もなきもの也、ヘーゲルの客觀的思想は右の主觀的唯心論者の如く、歴史的事實を以て悉く無用視して之を放棄すること能はざりし、彼の見解に依れば固より人類が神と和合し得るは其靈性に基く也、尙一層精細に云へば有限なる靈と無限なる靈とは、其本躰に於ては唯一なることを認識するに基けり、各神人の本性唯一なるを悟れば總て相對中に於ける撞着は消滅するものなりと、彼亦曰く此眞理は歴史的事實の形狀を裝ふに於て、始て宗教心に了得せらるゝを得然れども歴史的事實に於て外形的に顯はす所のものは、元これ心靈の本性を一個の事實若しくば人物に依て假に顯はしたるに過ぎず、人類の神と和合するの眞理は基督教會に於ては、始て其教祖の身に於て外形的に顯はれたり、故に神と人との間に於ける不調和を除却したる意識は、教會の爲めには一人の神人及其救濟

を來す死の觀念に於て具體的に顯はされたり、前なる二個の議論の重なる誤謬は、感情あり意志ある「エーゴ」の實驗たる救濟をして單に知識上の事情のみなるが如く見做したるにあり、然るにシュライエルマヘルは此痛所を看破し救濟及和合は勢力ある福祉ある神の意識を分與せらるゝことなりと云へり、斯の如き意識は基督教會に於ける高等なる生命にして、素と其教祖より與へられ其働は不行に繼續するもの也、此意識を分與せらるゝに於て余輩は二個の動作を認めざるべからず、一は外形的なる神の動作、他は人性特有の宗教心の發達これなり、彼亦此高等なる神の意識を分與せらるゝの道を示して、一方に於ては一般なる基督教の精神が各個人の上に及ぼす勢力なれども之を基督の動作なりと云へり、固より基督の動作と云へるは其文義に拘りて解すべきものにあらず、寧ろ彼より發したる有ゆる福祉が彼の死後數百千年の間此世に繼續して其働を爲すを以て、彼基督の業なりと云ふが如き意にして、換言せば彼の歴史的な生活により間接に與へられたる結果也、然れどもシュライエルマヘルは是等の結果の最後の原因を以て、人類の天性に依て成就する神の動作にありと爲すにより、彼は教祖の歴史的な人物を以て超自然

性質を有するものと主張し、又其人物は絶体的理想と同一なるを證すべきは、理に於て必然なりと思惟し、之が爲す精密なる議論を設けたり、然れども彼が其議論の正當なる結末を求めずして、却て實際上の必要に偏依したるは、蓋し蔽ふべからざる事實也、然れども彼は尙ほ是等の理由に依るも、以て實際的必要を満足せしむること能はざりき。

此點に於ても宗教哲學は決して或種の教義及哲理上の學說を假定して、直ちに論起すべきにあらず、寧ろ汎く歴史を尋ねて其中に顯はれたる人類の宗教的實驗に基きて其說を立つべきものなり、勤めて自己の偏見を去り及ぶ限りは公平單純に是等の事實を解説せんと試み、又心理學上の助援を輕視すること無く、余輩は宗教上の教義の依て起りし源を公平に解釋し、又自ら獨斷的教說に陥るの弊を免るべし、一旦歴史を繕きて東西二個の宗教救濟の觀念を中心としたる所のものを考察せば、假令其觀念を顯はす道に於ては大に異殊なる點あるも、或箇條に於ては其間甚だ相類似する所あるを見る、印度の宗教と基督教とは齊しく救濟を中心としたるが、亦齊しく其救濟は儀式及道義上の行爲に依て得らるべからず、唯だ新なる

生活の理想若しくは新なる宗教的及道義的意識の中に現出するによりて得らる、也。此理想は教誡若しくは反省により直接に得らるべきものにあらず、寧ろ天外の眞理が自然心の闇黒を破り、其心を自然の情慾の鐵鎖より脱せしめて、之を自由ならしめたる結果なりと、此兩宗教共に理論上の知識及實際上の練磨即ち克己及慈善の動作等は救済の意識若しくは其状態を來し之を完備するに甚だ有益にして必須欠くべからざる方便なりと教へり、兩宗教共に救済の意識は、社會一般の共有する所にして、之を得るには人種階級及男女の差別なく凡そ人間は皆其救済に與かり、其恩澤を蒙るを得るものなりと教へり、又兩宗教共に社會の理想的生活を以て其教祖の人物と連環せしめ、彼は即ち理想若しくは至高の善を其身に顯はしたるものと教へたるが故に、其教祖をして常に尊崇の目的たるのみならず、亦崇拜の目的たるに至らしめたり。

右兩教の比較は余が敢て作爲したるものにあらず、歴史上の事實也、余が是等の事實を並舉したるは固より基督教を卑下し之をして佛教と同等の位地に置かんと欲する謂にあらず、余は常に其の反對に出で又之を説くや實に明白なる言辭を以

てしたれば、余の反對論者が余を難批して右の如き見解を有するものと云ふは、甚だ憫笑すべき豈言と言はざるべからず、現今に於ては吾人は已に遙に是等の事を超越し、神學者をして比較宗教學を自在に應用するも、自ら反對論者の爲に其名譽を傷けらるゝことなからしむべき也、斯の如き比較は宗教上の現象を學理的に講究するに於て甚だ有益なり、若し其比較にして昔譚の細條目に涉る時は、彼我兩教の間或は歴史的關係を有する所なきやの疑問を喚起することあり、かゝる研究は近時セーデル(Seydel)の爲せし所にして其方法甚だ面白かりき、然れども或は餘りに大膽に過ぎたる所なきやの疑あり、假令其主張する學説は到底之を維持し得るや否やは未だ知るべからざるも、斯の如き講究の宗教學に於て甚だ有益なるは亦蔽ふべからざる事也、然れども余が曩に述べたる兩教に於ける大體の類似の如きは、之を歴史的關係より解説し得べきにあらず、唯其宗教心の一般普通の動機よりして之を解説するの外なし、これ此比較的研究の吾人の目的に於て甚だ有益なる所以也。

下等なる宗教に於ても救済の説なきにあらず、然れども其救済や單に世界の外形

的惡より救ひ出さる、事のみ、是等の惡は崇拜者の或る特殊の犯罪に依り惹起したる神の憤怒と關係するものなれば、其救済を得る道も亦崇拜の方法に依り専ら神の憤怒を宥むるにありと思惟したり。故に其崇拜に於て神の憤怒を宥むるが爲に、様々なる儀式を設くるに至れり。然るに道德心の漸々發達するに従ひ神の意志は吾人に向ひて善を求むれば一切の惡はこれ神に對するの犯罪にしてかゝる犯罪は單に儀式上の行爲に依りて償ひ得らるべからざれば、之を償ふの道は儀式上の行爲に加へ、道德上の善行を以てすべし、これ即ち犯罪を消滅する正當の方便なりと、斯の如きは「マズダイズム」(Mazdaism) 秘教的「バラマ」教、「ユダ」教及「カトリック」基督敎の如き律法的宗教に於て見る所なり。然れども是未だ以て永く宗教心を満足せしむること能はず、宗教心は惡の原因甚だ深くして容易に外形の行爲により之を除却し得べからざることを發見せり。惡の本は各個の犯罪にあらず、夫の律法的宗教は律法に示されたる所の行爲を以て之を償はんを欲すれども、惡は即ち内心の狀態に基く根本の禍にして、唯自己をのみこれ顧みて常に義務に反對し及外形の事情に反對する意志の利己的の動作に存す。かゝる利己的の意志は己むを得ず律

法に従ふことあるも、其中心に於ては甚だ之に従ふことを好まざる感情あるが爲に、其不潔不自由及不幸を感ずるを免れず。斯の如き根本の惡は決して外形的行爲によりて降すべきものにあらず、蓋し外形的行爲は其源内心にあれば其原因たる内心と同じき性質を有する也。凡そ行爲は現世若しくは未來に於て報酬を受くべき權利ありと主張するにより自ら利己的の不潔なる有様を示す、自己の善行を以て快樂幸福を得るの資本とするが如きは、是れ豈に神より離れたる自己に執着し又虚空なる此世に眷戀する結果にあらずして何ぞや、斯の如きは是れ豈に心靈が尙ほ此浮世を愛し、己を神とし世界を神として之に仕ふるの幻影中に幽閉せられたるものあらずして何ぞや。

右の如き思想は齊しく印度の聖人、或ハ使徒パウロ或は「イスラム」の「ミスタク」或は「カトリック」敎の「ミスタク」及最後に於て「プロテスタント」の敎法改革者及神學者の如き人々の心情を感發し、彼等をして左の結論に到らしめたり。人ハ行爲に由て救はれず唯信仰に由るのみ、即ち高尚なる眞理を感得し之によりて自己の靈魂を詐の愛より自由ならしむ。詐の愛は即ち其靈魂の罪と禍の本也。此點までは以上に述

べたる人々は皆同一轍に出で、唯如何なる真理を信ずれば靈魂は自由なるを得、又如何なる道に依れば其自由を實成し得べきやの點に於て、始て彼等の道に分岐を生せり。若し惡の根原は各自の意志の全く誤りたる傾向にありとあれば、之を治するの道唯二様あるのみ、(一)意志は全く墮敗したるにより悉く其働を滅却し生活の理想を無爲に歸す、(二)意志の墮敗したる傾向を轉し正當なる傾向となし、誠の愛を以て詐の愛に勝つ、即ち前者は印度後者は基督教に於ける救濟の道也。兩宗教共に救濟は理想の真理を信ずるによりて成就るものとす、然れども其真理の容量に至りてハ二者全く異なる所あり、前者は意志の働は悉く虛無に到らしめ、即ち幻影、罪惡及苦痛に到らしむるにより其の動作は全く無益なりと確信するにあり、斯の如きの確信より來る實際上の結果は、意志を殺し世界を捨て靜寂なる死に至るにあり、後者に在りては誤は神に反對する自己及神を離れたる世を愛する詐の愛に存す、去れば神の欲する所の善はこれ即ち吾人が意志の爲にも至高の善なれば、我身は全身を擧げて全く之に服従し、以て我生活の目的を成就し完全なる満足若しくは至高の救濟を得べき也。此確信の實際的結果も亦己に克ちて自然の意志を殺す

にあれども、これ唯方便にして己を殺すは誠なる自己を活し、平和と幸福の中に在りて、神と交通する誠の生活を得るの方便なり。此救濟の道は是れ獨り正當ある道にして吾人の生活に氣力を與へ、之をして有益たらしむ、余輩が之より陳述せんと欲する所は此種の救濟也。

救濟の信仰の起原及發達を攻究するに當り、吾人は常に之に相接伴する大真理あるを見る、即ち宗教上の信仰を惹起するは、獨り理論的攻究に依るにあらず、又唯だ宗教上の真理を他より教へられて然るにもあらず、寧ろ信仰は靈魂の根底に達する深遂なる感情の動作に基くもの也、而して其感情は之を性質よりいふも、亦起原よりいふも多少不可思議なるもの事なり、斯の如き實際上の真理は生活の方向を定め又同時に其理想を定むるの力を有す、而して其真理は單に理論の一逼に依りて知り得べきものにあらず、人或は是等の真理に就きて多少知る所なきにあらず、或は總念的に其意義を解釋し能はざるにもあらず、然れども若し其心中に於て之を實驗し、其活力を感得する者にあざれば、未だ以て眞實に之を解得したりと云ふべからず、斯かる實驗は一切の人に於て同様に深達明透なるものにあらず、かゝる

實驗は其人の意志が、是等の眞理を捕捉し之を承認し、之を我有と爲し、之をして其心を支配するの力又は其生活の最重要なる寶物と爲すにあらざれば、充分に之を得ること能はざるべし、換言せば靈魂を救ふの力を有する眞理は、獨り活ける信仰に依て得らるべし、然れども斯の如き眞理は意志に向ひ其自然的固有の情望を放棄せんことを要求するものなるに、意志は如何にして之を我有と爲すを得る耶、是れ豈に意志の爲に、甚だ困難なる事業にあらざ耶、然り、若し意志の自然的情望は、常に能く満足と快樂とのみを來すものならば、意志は到底かゝる苦業を爲すの力を有せざるべし、然れども實際は決して斯の如きものにあらず、神の智慧と其公義とは自然及道義界の秩序に於て、業に已に意志をして其自然的情望を放棄せしむるの道を備へたりき、意志の自然的情望は、數々自然界の惡に接して其目的を破られ、快樂を求めて却て苦痛に陥るが如き經驗は、人の生涯中幾百千遍なるを知らず、また利己的の意志と其動作は常に自ら損ひ其心に於て、神の律法に逆ふ若しき經驗あるにより、意志の自然的情望も却て其目的を達せんと欲して之に達するを得ざるの實驗を得るもの也、又意志の自然的情望は其心に分離を生じ、靈魂を利己と順行

の間に挟み大に之を苦患せしむることあり、斯の如き實驗は意志をして其自然的情望を遂げんとするは甚だ不利なることを感せしめ、漸々高尚なる生活の原理に従ふの得策なるを悟らしむ、此の不満足は人をして其の舊來の情態より離れしむるものなるが、之に加ふるに自個の意志と善との和合即ち全心を擧げて善に服従するの結果は、人をして幸福と自由とを得せしむれば、是又靈魂をして舊來の状態を離れしむるに大なる力を有す、善の誘引力は若し其の靈魂にして自己の中に善に向ふの力を有せざる限は、更に之を感動し得るものにあらず、其の力とは神より援けられたる理性の力は是れなり、理性の力は各個の意志をして其の根本たる神の唯一なる意志に連環せしめんと勤む、此の力の消極的の動作は惡を責むる良心の聲、罪を感ずる苦痛、罪に仕へ自己を愛し及此世を慕ふの無益なるを悲しむ事、其積極的の動作は自然の不幸なる状態より救はれんことを希ひ又は高尚なる生活に入らんことを欲せしむるもの也、此兩者即ち舊來の状態の不満足及高尚なる生活に伴ふ福祉の誘引力が、相和して心靈中に働くに於て、人は始て信仰の動作により救はるべき救濟の眞理を受くることを得、然れども此目的を達するの道は孰れに

踏するも左まで關係ある事にあらず、高尚なる生活の新理想が内心の奥底より發揮するも、又其理想は外形より效儀的に授けられたるにもせよ、其理想に違せんとする新しき願望を發揮するに於ては、即ち一のみ、唯此新理想を外形より授けらるゝに於ては之を受くる人にして其内心に於て直接に之を感識し、以て其内心の紛亂を醫するの力と爲すにあらざれば、斯の如き真理は恰も電光の閃くが如く、心に映射し來りて靈魂を輝し之を炎上せしむること能はざるなり、其熱光の前に於ては頑固なる利己的精神も忽ち溶解し去り、傲慢なる心は之が爲に存廢にせられ、懷疑心ハ之に依て勇氣と信仰とを得るなり、斯の如く心靈を活すの真理に全く服従するに至り、疑團、不信仰及傲慢は悉く消失し、争闘止みて内心の分裂は癒へ、弱り果てたる靈魂は今や新に得たる平和により善を欲し善を行ふの勇氣を得たり、見よ、舊は去りて悉く新たに成り、罪の苦しみ感懐は悉く去れり、何とあれば其の原因たる自己の意志と神の意志との不調和已に除撤せられたればなり、一切の恐懼は去れり、又己を苦め且つ之を軟弱ならしめたる世界の惡も共に去れり、使徒パウロの詞を用ゆれば、神若し我儕と供ならば誰れか我儕に敵せんやと、平和と共に

歡樂も靈魂に歸り、歡樂と共に意志と行爲の自由の力も共に歸れり、是等靈魂をして其狹隘と軟弱とを去り、全く新しき光を匂ひて世界を觀せしむ、故に内心の生活の改新すると共に、外形の生活も亦新なるに至る、此驚くべきの變化ハ人間の自力に依て、恣に成就したるにあらず、寧ろ其原因人間以上に存するが如く感得するを以て、世人は人間以上の能力の働に歸し、神の豊なる恩恵の賜物なりと認む、然れ共若し能く綿密に此理を攻究せば、宗教家が更に證據を要せざるの真理として、保持する所を確認するの外、余輩は他に其の道あるを知らず、余輩は已に善惡を賞罰する良心の聲は、これ則ち各個の意志の不法なる動作に對する、神の正義の反動なりと認む、去れば心中の分裂を醫する救濟も亦世の罪人をして、其の犯罪の結果に放任し、之を苦難に陥るに忍びず、再び己と和親し、以て平和と歡樂とに復らしめんと欲する、神の愛の結果と云はざるべからず、神の愛は人の心を動し、人をして靈魂の誠の家は即ち靈の世界に存することを知らしめ、多岐の路に彷徨躑躅せる人の心靈をして、其の父たる神に復らしめしめんと欲するの情を發揮するもの也、物質界に於て萬物を一の中心に吸引する重力は、即ち其

中心より發する勢力と云ひ得るが如く、世界の理性を供ふる相對者をして、根本の唯一に歸着せんと欲するの感情を發揮するものは、これ即ち一切諸靈の根原造化の神の働といふは至當の言也。神の善にして愛なる意志は、人類と活ける交通を爲さんことを欲し、人類が道徳心の起りし時より、常に已を顯はし人類をして其の來らんとする救済を熱望せしむるものなり。此愛なる意志は世界の歴史に於て、種々なる方法と種々なる時期に於て、人類より自らを顯はしたり。即ち人類が其崇拜する神の憤怒を宥めんが爲に設けたる贖罪の儀式に於て、或は將に來らんとする救済の福音を宣る豫言者の慰多き言に於て、或は過去若しくは將來に於る黄金時代に關する昔譚及詩歌に於て自らを顯はしたり。然れども此意志は最後に於て基督信徒の實驗に於て心靈を救ふ神の恩寵となりて顯はれたり。使徒パウロ曰く、神の靈は我儕の靈と共に、我儕が神の子たるを證すと、救済の眞理を一句の中に網羅し盡したるの語は、右に述べたる我儕は神の小兒たり、即ち我儕は神と同質なり、我儕の存在は彼に依り、我儕は彼が愛の目的なり、我儕は彼と愛の中に在て親密なる交通を爲すべきものなりとの外に勝れるものあるを知らず、又パウロが所謂神の靈は我儕

の靈と共に證するなりと、即ち我儕の意識中に此救済の眞理發揮し、我儕は此眞理に捕へられ、又は之を活ける信仰に依て捕ふことは、これ即ち我儕の靈の中に於ける神の靈の發現の結果なりとの事は、實に好く救済の眞理を説盡したるもの也。我儕の心の中に在て我儕に語る誤なき聲の證、其聲は我儕の有又は我儕の實在の一部分なれども、我儕より發したるにあらず、故に又相對的「エーゴ」より發したるにあらず、故に我儕の中にあり、又我儕に依て顯はれたる神の聲、即ち聖靈の證なりと唱ふるは、實に至當の事なり。此聖靈の證は教法改革者及「プロテスタント」の神學者がパウロと共に、宗教上確信の堅牢なる内心的の基礎なりと云へり。「キヲ、カント」派の神學派は、之に訴ふること能はざるべし、何となれば此派の神學は聖靈の證てふ事を以て、中古の迷信異教の神秘談及其他の妄信として擯斥し、之に代ふるに教會の歴史的證を以てせんとすれば也。

救済の必要を其内心に於て感したるものにあざれば、救済に與かること能はざれば、救済の確信は各個人の中に於ける、意識上の直接なる事實なり、若し此確信あらんか、假令全基督教會が之を批難することあるも、更に其良心を害せらるゝこと

なかるべし、然れども若し内心に於ける此確信をからんか、如何に教會の證を以て其欠を補綴せんと欲するも、到底其効なかるべし、凡救済は各自己の實驗に基くものなれば、之に代ふるに他人の實驗を以てせんとするも、到底救済の確信を起すこと能はざるべし、他人の實驗に基く歴史的證據は、各個人をして自己の實驗に達せしむるの方便として、有益なるも、各自の實驗に代り以て救済の確信を惹起するの力をなし、歴史的信仰は人を救ふ能はずとは、これ救法改革及正當なるプロテスタント教の緊要なる教義なり、吾人は如何なる議論を以てするも、此教義を捨離すること能はず、此緊要なる真理にして一たび固信せらる、時は、吾人は始て救済の信仰に於ける、歴史的方便の甚だ大切なるを悟り得べし、固より吾人は各個人を以て其一般なる宗教的生活に於ても、又其救済の意識に於ても、全く孤立したるものにして、更に歴史的關係なしといふを得ざるべし、各個人の宗教心は、深く其根底を歴史に基くものなれば、之と全く分離して考察し得べからず、社會より受くる諸の感得は、各個人の宗教心を發揮して之を漸養するには、甚だ欠くべからざるもの也、若し此感得に由るにあらざれば、決して救済の意義を發揮し、其鞏固を持すること能はざるべし。

此點に就きては宗教界の偉人と、普通の人の間に大なる差違ありと雖も、其差違たるや必ずしも絶對的にあらず、寧ろ比較的なり、救済の意識が前者の心中に發揮するに於ては、常に必ず其基く所の者なからざるべからず、ルーテルの救済はパウロに基き、パウロは耶蘇に基き、耶蘇は舊約の豫言者に基きて其救済の道を立てたり、また彼等が主張せし救済の天啓は、大よ其周圍の世界に關係する所ありき、彼等の感情彼等の苦心は、常に彼等一個人の實驗たるのみならず、また當時一般の宗教心を代表せり、當時の必要一般の救済を求むる熱望等は、是等の偉人の心に反響して、彼等に於て深遠なる宗教的實驗となりたり、而して夫のルーテルが寺院の中において苦心經營して得たる救済の道は、時の日耳曼人種全体を震動し、而して彼等は又皆從來教會の設けたる救済の道を以て満足する能はず、萬口一聲新なる救済の道を求めつゝ、ありしなり、故にルーテルが自己の靈魂を救ふ爲に發見したるの道は、周圍の多數人をして救済に至らしむるの道となれり、これ彼の詞が一切の人心に強大なる反響を惹起したる所以なり、然れ共かゝる反響は又彼に取ては其述る

どころの道及其從て來るところの事業は、彼自身のものにあらず、即ち神自身のものにして、彼は唯だ神の事業を爲すものなるを證明するの記號となれり。斯の如くパウロも亦其福音の誠なるを證せんが爲に、彼の教が衆の人の良心に強大なる感覺を與へたる著明の結果に訴へたり、而して彼れ自らも亦其實験に依て己が傳ふるところの福音の愈々確實なるを慥かめたりしならん。余輩は亦耶穌に於ても、彼の心に自ら救主たるの意識を發起したるは、彼の周圍なる飢餓苦惱せる人民を憐み、また彼の詞が實際に彼等の苦惱を降するの力を有したる事實に基けるものなるを信ず。去れば孰れの時代に在ても、かゝる偉人の心に救済の意識を發起し、之を發達せしめたるものは、彼等の周圍なる社會の狀態及其必要に由り、又彼等の信仰も其傳ふる所の道が、周圍の人心に強大なる感覺を與へ、彼等をして己が傳ふる道に、同感同情を表せしむるとあるを見るにより、愈々其鞏固なるを得る也。殊に救済の道既に備り、唯其爲す所は此救済を當時の人に傳述し、之を以て彼等の心靈を救はんとするものに於ては、其宗教心の實驗へ、愈々周圍の社會と密着なる關係を有す。他人の宗教上の實驗を、外形的に與へらるゝも、若し自己の心中に於て自ら之を

實驗するにあらざれば其效なしと雖も、他人の實驗は亦大に自己の實驗を鞏固ならしむるに於て甚だ欠くべからざる也。殊に宗教上の實驗に於て、鞏固獨立を欠く所のものは、他人の實驗により愈々其確信を鞏固ならしむるの必要あるを見る。救済の宗教に於て最も重要な信仰たる中保の信仰の起原も亦茲に在り。抑救済の信仰なるものは、多の人に於ては原造的のものにあらず、寧ろ他人より授けられたる理想を再現するによりて起る、而して其の理想は單に律法的にして、儀式若しくは道義上の行爲慣習等に關係するのみなれば、是等は唯理論的教義若しくは實際的命令、生活の規法に依て他人に通達するを得、蓋し是等の教義若しくは命令の如きは、之を傳ふる人物に委頼する所甚だ少く、是等は頗る明白にして何人にも了解し易く、唯之を傳ふる人にして師若しくは豫言者の權威職務を有する事實さへあれば、これにて充分なり。然れども救済の宗教に於ては事情全く之れと異なり、此に在ては理想の關係する所は、直接に外形上の行爲にあらず、却て其信仰及内心の狀態にあり、而して其影響するところは其思想感情及意志の全体の働にあるもの也、かゝる内心の實驗は世人の熟知する如く、之を教誡的に他人に通達すること甚だ難

し、如何なる方法を用うるも、到底満足に之を傳ふること能はざるべし、縦し之れを他人に通達し得るも、其力甚だ微弱にして其心を感動するに至らざるものあり、余輩は茲に夫のスピノサが主張せし、一の心理的真理の存することあるを見る、感情は感情に依て制すべき也、正當なる感情を發起するの力は、總念よりは寧ろ觀念にあり、今救済は神に反する自己の意志の詐妄の愛を、神聖にして善に向ふ眞誠の愛によりて、打勝つことにありとすれば、救済を成就するに最も有益なる道は、此眞誠の愛を發起するに、最も適當したる者たらざるべからず、然れども吾人の實驗する如く、理論的教義若しくは實際的命令の如きは、以て此の眞誠なる愛を發起するに足らざるなり、何となれば感情は理論によりて發起せらるゝ者にあらず、愛は律法によりて強ひらるべきものにあらず、これ宗教に於て單に道德のみを主張するは、甚だ無効力にして却て人を倦ましむるの惡結果ある所以なり、然れども夫のフットーの云ひし如く、善にして一旦人性的善の理想的繪畫の上に顯はれ、或は直接に之を知覺し、或は間接に之を想像して内心に描く時は、其力能く人の心を善に誘引するに足るものあり、固より抽象的に考察せば、至高の理想は神自身の善なり、故に神

は我等が最も高尚なる愛の目的となり得べきものならざるべからず、然れども實際に就て云へば、普通の人には是れ又頗る困難にして、總ての宗教歴史は能く此事の困難なるを證明し、又其道理も頗る明白なりと信ず、何となれば深遠なる宗教心を有するものにあざれば、活潑明透なる神の觀念により、其感情を動かし、意志の傾向を變更すること能はざるべし、又普通の人は神の善の觀念を得んとするに當り、其途に様々なる障礙物の横りあるを免れず、即ち彼等が實驗する外界の惡及彼等が内心の罪これ也、此二個の障礙物あるにより、普通人は神の愛を信するの勇氣なく、却て先づ其怒を恐るゝの心を發起す、されば神の愛に達し、救済の信仰に至るの途に横はる、此障礙物は、如何なる方法に依て之を排除するを得る歟、此疑問の答解は基督教の歴史に於て見るを得たり、基督教は人なる救主の愛の理想的繪畫に於て恐怖を除き、頑摯を退け、以て信任と悦服とに至るの道を示したり、凡そ特種の性質を有する歴史的現象を明瞭に解得するの道は、之を以て普通に實驗する同種の事實と對照せしむるに如かず、昔時より詩人及聖徒の主張せし所、又吾人が日常實驗する所の一の大なる事實は、凡て高德なる人士の感化力頗る強大

にして、其周圍の人を罪惡より救ひ、彼等を高深ならしむるの勞力を有する事也。此感化力は必ずしも彼等の行爲のみに由るにあらず、彼等が直接に成就せんと欲せし事業のみに由るにあらず、又は彼等が傳へし其教説のみに由るにもあらず、かゝる感化力は遙に是等人士の事業若しくは行爲若しくは直接なる動作及之に伴ふ直接の結果等をも超越するものなり、何となれば是等は常に個人的若しくは時世の制限を免れ難きところあるなり、彼等の感化力は彼等の人物にあり、彼等が生活の全脈に存せり、凡人は其行爲を以てし、高德なる人士は其人物を以てすと此詩中には甚だ深遠なる真理を含有し、殊に目下の問題に關して大なる關係を有す、大に人の心を感動するの力あるものハ、實に善の活潑なる發現、真誠なる人類の理想の化身たる高貴の人物其物也。かゝる人物の感化力は實に廣大無邊にして、一切の人の心に高尙なる生活の光明を放ち、善を以て單に律法命令として示さず、却て活潑にして生命ある勢力として之を顯はし、人をして善の愛すべく慕ふべきを感ぜしめ、之に服従するは義務にあらず、寧ろ快樂なりとの道念に入らしむ、これ即ち罪に憐める良心に救助の手を假し、喪心落膽せし人を奮勵し、失望佗條の人を復活せし

むる力を有す、其の無慾にして廣大なる心且つ温和にして人の罪を恕し、之を助け、之を醫するの愛に由りて罪を悔ゆる者を勵し、一切の罪を赦し、一切の惡に勝つ廣大無邊なる神の愛を信ずることを得せしむ、また忍耐以て善を行ふの模型に依り弱者を扶け、彼等をして新しき生活に入るの勇氣を起さしむ、斯の如く總ての世にありて高貴なる人物が人に及ぼしたる、感化力の洪大なりしことは、何人も之を識認する所なるが、余輩は人類の歴史に於て、之と匹儔すべき者なき救主の理想的人物に於て、此事の最も著しく顯はれたるを見る。夫の清き稚の如き心を以て神と人とを愛したるナザレの耶穌の心より新なる生活の潮流、人類に進入し來り再び潤乾することなく、愈々進むに従ひ愈々濶大となり、凡そ人類の中に顯はれたる善と眞との分子を吸集し、以て人生の全脈を濡し、之を活し、之を富ましむるに至るべし。基督の人物は遙に他の儕輩に擢拔し、其無双なる理想的性質により、人心に活氣を興へ人心を鞏固ならしめ、救濟の信仰即ち人類の宗教心中の最も高尙なるものを惹起するの力を有せしにより、世人が彼を尊崇して人類以上に位すと見做したるは、吾人の敢て怪まざるところ、これ實に正當にして且つ有益なる宗教心の一現象

なりと謂つべし。神は吾人の父なり吾人は神の子たるべきものなりとの眞理は、基督の神に對する親密なる意識、彼が稚心を以て天父を信じ、之を愛し、之に交りたることに於て始て明瞭となれり。去れば此新なる意識は、恰も天より來り神の自ら顯はす所の如く、基督信徒の心に感識せられたるなり。斯の如き高尚なる神の意識はナザレの耶穌より發射し來るにより、天より降りし神の獨子なりと信ずるに至りしハ至當なり。又此信仰により基督信徒は確固不拔の眞理たる總て高尚なる生活の理想、殊に至高なる神の子の理想ハ、偶然人類の心に發生したるにあらず、又人類が恣に作爲し、或は發見したるにもあらず、神の天啓に基くものなる事を明白に顯はせり。余は斯かる深遠なる眞理を普通の人に解せしむるには、夫の頗る幼稚にして素樸なりと雖も、其中に自ら深遠の意義を有する基督の奇跡的誕生則ち救主ハ天より降臨せりとの事を以てするの外他に良法あるを知らず、また神の子たる意識の中には、神の愛の確信をも含有す、故に世界に勝ち其恐怖を脱し、苦の中に在るも尚ほ其慰癒を得、其途に横はる障礙物及誘惑に對する勝利既に此世に於て始り、未來に於て成就すべしとの意義をも含有せり。斯の如く内心に於ける救済の實驗

及世界の惡より逃るゝはナザレの耶穌が神に對して有したる意識より發射し來りて基督信徒に及ぼしたりとすれば、彼等が救主を以て天より降りし世界の主なり、神の位に坐するものなりと尊崇するに至りしは、これ亦了解し難き所にあらず。軟弱なる人類も其信仰の力により神と交り、永遠の生命を繼ぐことを得るとの高尚深遠なる眞理を顯はすには、夫の基督が墓より蘇り死に克ち生の主となれりとの話説に於てするの外他に良法あるを知らず。然れども「クリスマス」と「イースター」(Easter)の間に「グッド・フライデー」(Good Friday)なるものあるを忘るべからず、神の子は天より降り先づ地上に於ける苦痛の盃を飲盡し而して後始て天の主と尊崇せらるゝに至れり。これ亦普通の眞理たる吾人の中に附與せられたる神の姿、即ち吾人の中に在て神性なるもの、吾人の高尚なる自己を形るものは、先づ此世の苦痛を経過し、人生の不潔を淨め神に従順なる道を踏み而して後始て神と交るの平和と喜悅とに達するを得る也。偶々詩あり曰く、

「死するは再び生んが爲なる眞理を悟らざる間は、人は苦痛の世界に在て猶た
び人のごとし」

救主の死に關し尙一個の中心たる宗教的經驗なるものあり、神と和合して其小兒となりたるとの幸ある意識に先ち、彼より遠離したるとの不幸なる意識なるものあり、此不幸なる意識ハ我等の罪に向ひて怒れる神を恐るゝ結果なり、然るに余輩が疑に述べたるが如く不幸なる恐怖の狀態よりして、幸ある神の子の意識に變ずるは其實吾人が心中に於ける直接なる變化の結果にして、信仰の力により自然的利己の意志より神に従順なる新しき生活に遷り、即ち詐妄の愛より眞誠の愛に遷るの謂也、單純なる教會若しくは律法の如きは此眞誠の愛を發起するの力甚だ乏し、是等は特に善の人性的理想によりて發起せらるべし、基督信者に於ては此人性的理想は世を救ひ人を助けんが爲に其身を犠牲に供ふるまでに人類を愛したる救主の姿に於て認むるを得、斯くて余輩は左の如き結論に達す、基督の愛は基督信徒の心に善の人性的理想たる彼を愛するの情を起さしめ、利己的の詐妄の愛に打ち勝ち、吾人と神との間に横りたる障礙物を除却し、再び之を和齊せしむる也、斯の如く神人間に横る障礙物を除却し人をして神に復らしむるものは、これ則ち罪の赦宥を得たるものなれば、此理論中の中段を除きて直ちに前後を連環すれば基督の

死は罪の赦宥を來せりとの理論に至らん、是に由て考察せば、教會の教義は實際的にして且つ堅牢なる基礎を有する宗教上の經驗に基く也、凡て宗教心は自然的(心理的)中間の階段を看過し、直ちに其結果を以て神の直接なる動作に歸するはこれ宗教上に於ける常觀也、去れば右に述べたる怒れる神を恐るゝ狀態より、忽ち神の愛を確信する新なる生活に入るには、其中間に心理的自然的階段ありて、之を誘引したるに相違なしと雖も、宗教心は是等の階段を看過し其結果を直接なる神の動作に歸し、基督の死は神の憤怒を除き、人類の罪を贖ふものなりと信ず、固より正當なる觀察を下す時は、かゝる見解は撞着あるを免れず、神は人を己と和齊せしめんと欲するの愛なるに却て基督の死により、漸く其憤怒を宥むるといふが如きは、其だ自家撞着なるにあらざり、然れども教會に於て尙ほかゝる教説の行はるゝは必ずしも偶然にパウロの教義を其儘に採用したるにあらざり、却て斯の如きは、律法的より高尚なる神の子の意識に遷るに於て甚だ適當なる道と信ず、人は律法の下に立つ間は神の憤怒の結果として、尙ほ神より離隔せるを感ずれども、彼自ら此感情を除却するの力を有せず、彼惟へらく神の正當なる要求は、必ず或る行爲若しくは

苦痛によりて之を満足せしめざるべからず、然らざれば其恩恵に與ふること能はずと、然るに此律法の鉄鎖より逃るゝは、唯人の自ら爲し能はざる所の辨償を中保者に依て成就せられたりと信するの外他に道なし、然らば救主の死も此點より見れば人類に代りて其罪を神の前に贖ふたるもの也、是に由り人は感謝の心を以て彼を愛し、其全心を舉げて彼に服従するに至る、かくて神と和合し罪と恐より逃れ其救済を全ふす、かゝる屈曲なる道により眞に正當ならざるも、尙ほ或る事情により心理的に觀察すれば、頗る自然的なる見解に基き、正當なる結果を得たりと思惟す、即ち心の爲に且つ生活の爲に有益なる結果を伴ふ救済の意識を得たる也、何人にも一旦此事情を通曉する時は、教會の教ゆる救済の教義も、亦相對的眞理を其中に含有するや、恰も正理論唯心論等の學說に等しき所あるを識認するを得べし、一たび救済の教義の心理的起原を正當に了知する時は、其心自ら濶大を生じ、常に右に關する諸種の教説を容れて綽々餘裕ある所あるべし。

余輩が上來論述せし所に依て考ふれば、中保者の信仰に二種ありて、其意義甚だ異なれり、第一の意義に依れば中保とは怒れる神と罪ある人との間を裁判的に調和

することとなり、第二の意義に依れば、非凡原創的宗教家が世に顯はれ其の天啓の教により救済の意識を人類の歴史に輸入したる事なり、かゝる中保者の姿は永久歴史の間中存在し、其教會にありて此新なる意識を發起し、之を保持する所の最も有力なる方便たるなり、第一の意義に依れる中保者の信仰は律法的宗教に屬し、之を高尚なる道義的救済の意識に依て考ふれば頗る劣等なる宗教發達の階段なりと雖も、人類の教育に與りて必要有益なりしは更に疑を容れず、第二の意義に依れる中保者の信仰は、永久欠くべからざる眞理也、而して假令如何に高尚なる點に、救済の宗教發達するも、決して此眞理を無用視すること能はざるべし、何となれば人類の宗教心を發揮し、之を活潑ならしめ、之を鞏固ならしめ、且つ之を深遠ならしむるに、尤も有力にして純潔なる方便は、宗教上の理想的人物の姿に如く者はなし、斯の如き理想的人物は、これ其崇拜者全体の標準にして、彼等之を首領として彼と一躰となり、又彼等の欠乏を補足す、理想は實際に勝る、實際は理想により其欠點を補足し其偏頗を除き其撞着を去れば、中保者に對する信仰には理想の分子多く混入し、以て不完全なる實際の欠處を補足せり、斯の如く理想の分子に依りて補足せられた

る中保者は固より實際の歴史的人物の其儘なる姿にはあらず、唯歴史的人物は其高尚なる理想的中保者の信仰を教會の中に發せしめたる起因たるに過ぎず、切に之を云へば教會の意識中に生活し且つ時勢と共に變遷進化する所の中保者は、これ即ち宗教心の描出せる理想的人物なり、然れども教會は自己の高尚なる宗教心より發したる理想を、歴史的人物と連環せしめ、以て中保の信仰を愈々鞏固ならしむ。此中保者に對する理想的信仰は、これ夫の「バイブル」に於ける榮光ある基督、昇天したる基督、在天の基督、靈なる主といふが如き總念の因て以て發せし源也。右に述べたる高尚なる理想的道義的、中保者の信仰と、之より稍劣等なる裁判的中保者の信仰とは、始より相混淆し、パウロの如きも其中保の信仰中に共に兩義を含有したるが如き所より考察せば、實際の宗教に於ては、此二様の意義の間に、明白なる區分を劃すること恐く難事なりしならん、去れば此意義に就き、獨斷的の教説を固守し、互に相爭喧するは寧ろ無益の業と云はざるべからず。

中保者の信仰に關し、尙一個の攻究を要する點あり、凡そ中保者の理想的畫象は、教會の意識中に在ては不變のものにあらず、寧ろ宗教及社會的生活の進歩と共に、常に

變遷進化窮りなし。此重要なる點に就き、從來學者の注意する所甚だ僅少にして、彼等は殆ど教會の信する基督は、常に同一にして夫の「ナザレ」に住みし耶蘇を直寫したるものと思惟したるが如し、彼等へ全く左の事實を忘却したり、最初より教會の意識中に住める基督の觀念には、多く主觀的の分子を混入し、又其分子は時勢と共に増長し、其形狀も亦種々雜多に變遷したること也。凡他人の心に描出せる人物の繪畫は、決して其人物の實際と同一なるものにあらずとは、これ現今批評學に於ける最も確實なる真理也。吾人が日常接近する人々の人物は、其實際の儘直接に之を了得すべきものにあらず、吾人の耳目に觸るゝ所により、觸覺の與ふる諸種の事實に就きて、自己の判斷を下し、以て自己の心中に描出するものなれば、其人物の畫象には多く主觀的の分子混入せる事は、甚だ靚易き道理なれば同一の人物にして其存在中他より受くる批評は、其種類甚だ多端なり、然り而して其人物にして非凡又は獨特の性質を有することあれば、之に對する批評は人に從て益々其趣を異にすること少からず、これ蓋し非凡なる人物は他に之を比すべきもの少なきにより、世人が之を正當に評論すること難澁を覺はし爲ならん、殊に其人物にして吾人と時

代邦土を異にするに於ては之か評論を爲すや愈々難事なりか、る人物は數多の人の手を経て吾人に紹介せらるゝものなれば、其間に於て中間者の主觀的分子を混入し、彼より是に移るの間に、其畫象は多少變更を來さざるを得ず、また今に及びては其描きし人物の畫象は、果して現物に違はざるや否やを糺すに山なきにより愈々實際と相違するに至るの道理也。普通の歴史的人物にして而かも其生涯は専ら公共の中に送り、其言行は世人の熟知する所にして其人物に關する歴史家の批評其だ異なり、同一の人物を評する多くの歴史家にして、同一の見解を存するものなきが如き自様なるに於ては、宗教上の人物の如きは特に之を正當に批評せんとするは愈々其至難なるを感せん、蓋し宗教上に在ては主觀的分子其だ混入し易く、爲に一層の困難を來す也。第一宗教上に於ける重要な位地を占めたる非凡の宗教家の如きは、其生涯多くは社會の裏面にあり、歴史上の表面に立ちて事を爲すはただ僅少なるが故に、彼等の人物は後世より回顧せば朦朧として雲霧の裡に包繞せられたるが如き憾なき能はず、これ實に彼等の人物に就き種々なる怪説を捏造し、或は自己の主觀的分子を混入して、其人物を描寫するに最も適當なる所以也。又宗教

上に於ては感情の勢力甚だ強大にして、之が爲め大に其傳説を左右せらるゝことあり、宗教上の傳説につき第一に要する所は其事實は果して正確なるや否やにあらず、寧ろ其傳説は果して宗教心を養成するに適當なるや否やにあり、然れども凡宗教心を養成するに適不適あるは、大に各個人の宗教的特質に關する所あれば、宗教心の發達する程度に従ひて、之を養成するに必要なる傳説も亦大に其趣を變更せざるを得ず、去れば教會に於ける宗教上の傳説、殊に其信仰の中心たる中保者に關する傳説に至りては、時の必要に従ひ多少の變更を來すことあるにより、教會の宗教的生活の變遷進化するに従ひ、其信する中保者の理想的繪畫も、亦從て變更せざるを得ざる也。

今宗教歴史を繙き中保者に關する信仰の容態を一見する時は、忽ち余が上來陳述せし議論の正當なるを悟るに至らん、基督教の歴史に於ける基督の姿は佛教に於ける佛陀の姿よりも、其變遷殊に著しく、其形狀も亦大に異なる所あるは、著明の事實にして吾人の注意を要する所なり、これ蓋し基督教の大に佛教に勝れる所ある結果なるを知らざるべからず、基督教に於ては宗教心を養成するに、有益なる動機となるべ

きもの殊に多く、故に其發達の力強大、亦能く時勢に應じて自ら變易するの力多し。基督教の發達に於ける全般の容態は、常に其當時の基督の姿に依りて反射せられたる所あり、余は今此議論を鞏固ならしめんが爲に、基督の姿に關する重なる發達及形狀を叙述する所あるべし、固より其細目の如きは今茲に掲載し盡すべきにあらず、余輩は新約書の中にて、基督に關する諸種の見解あるを見る、最初の教會は耶蘇を以て神の人、若しくは豫言者、奇跡を行ふ者、神の詞を傳へたる者、師又は殉教者及將來の「メシヤ」と認めたり、パウロは基督を以て神の子の原型にして天より降臨せし者、其化身、順行、十字架の死、復活及昇天の如きは、彼を信する信者の心に心靈的に再び實驗するものなりと云へり、黙示録の記者は基督を以て榮光ある天の王にして、正に此世界を審判し、其榮光の王國を建設せんが爲め再び降臨せんとするもの、如く云へり、希伯來書の記者は基督を以て信仰の始、又は終、天の宮殿に於ける完全なる祭司の長と云へり、ヨハネは基督を以て「ローゴスの化身、神の獨生の子の發現にして、彼は始より存在し、眞理の爲めに證を立てんが爲に、此世に來り眞理の王國に於ける王たるべきものと云へり、古代の親父等は基督を以て、總の

理性及天啓の原理たる神性ある「ローゴス」の完全なる發現よして、彼は即ち總ての眞理を人類に顯はしたる者なりと云へり、基督教が勇猛なる獨乙人民の間に傳はるに至り、彼等は基督を以て天の王及軍卒の大將の如く思惟したり、故に彼等ハ皆此大將に向ひ忠節を盡すべきものと思惟せり、コンスタンチン(Constantine)の世に於て基督教會が、始て世界を統御するの第一着を占めたる時、教會は基督を神に等しき神の子なりとして、直ちに神と同質なる神の子なりと尊崇するに至れり、中古の教會が世界を併呑したるの時に於て、基督は唯主なる神と崇められたり、かくて彼の神性の前に於ては、彼の人性は殆ど消滅せんとす、然るに教會は其僧侶及「モンク」等により、世界を支配したれば、基督も亦諸聖人の頭領となり、教會に蓄積したる恩恵の寶の創設者となれり、教法改革により基督教を闇黒なる教會より出し、人の心と生活とに歸らしめたる時、基督も亦人智の達すべからざる天外よりして、再び人心の中に復歸し來り、神秘的なるルーテルは基督を以て靈魂の新郎と云ひ、彼は憐なる人類の靈魂を愛するに依て、自ら之が新郎たるを約し、其弱を扶け之をして己の威嚴に牽揚したり、實際的なるズウィングリ(Zwingli)は、基督を以て神の軍隊を指

揮する大將軍なりと云へり。レーフラム教會に於ては、基督は聖靈を注がれて探ま
れしもの、模型又は首頭なりと思惟せり。ルテラン教會に於ては、基督は苦惱と痲
傷との頭を僂したる即ち苦痛を受くる愛の姿として彼を信ぜり。パイナスムは基
督教を煩瑣學派の束縛より脱せしめたるものなるが、彼等は基督を目して恩恵あ
る靈魂の朋友、平和の從順なる主にして其愛の力により、總て之に從ふものを思ひ
ると云ひ、冷淡なる正理論者は耶穌を以て有ゆる勝れる師、智慧と愛と善とに富め
るもの、其詞と模範とにより我等を善徳に導くものと云へり。カントは基督を以て
神の心に適ふ人類の道義的理想、ロマンチズム (Romanticism) は基督を美なる靈
の理想と云へり。往古の個人的リベライズムは基督を以て、宗門政治と傳説とに對
し、良心の自由を主張したる先登者と云ひ、獨乙帝國の建設以後の近世獨乙の神學
ハ、基督を以て神の王國の創設者なりと云ふ。
若し人あり右に述べたる基督の姿の數多なる中に孰れをか眞誠也やと問はば、余
輩は之に答へて斯の如きは、未だ上來叙述せし中保者に關する信仰の歴史的評論
及心理的解剖を會得せざるもの、質義と云はんのみ。此兩様の研究の結果に依れ

ば基督の姿は、唯當時の宗教及道義的理想を正當に代表するを以て充分なりとす。
其時に於ける教會の理想を最も純潔に、最も適切に、最も了解し易く表明する基督
の觀念、又崇拜に於て最も能く基督信徒の宗教心を養成するに適應する基督の姿
は、假令其形狀は如何なるも、余輩は之を以て最も正當なりと斷じ得べし。教會の教
義論者の誤謬は、かく相對的眞理を有する基督の觀念を以て唯一絶對的と見做し、
自己の見解に反對する所は、悉く皆不正當なりとして、之を排斥せんとするにあり、
此誤謬を免る、最上の道は、余輩が從來陳述せし如く、中保者の信仰の心理的起原
を今少しく科學的に攻究するにあり。總て生活は發達す、生活の眞誠なる理想は、決
して一時に成就すべきものにあらず、必ず生活の發達と共に變遷進化すべし。此變
遷進化の間に在て永久不變なるものは、唯進化の理法あるのみ、神の人類に授け給
ひたる宗教的能力、即ち人類に於ける神の永遠の天啓あるのみ、凡そ歴史的なるも
のは時勢に從ひ變遷する現象たるに過ぎず、神の定め給ひし人類の終局に達する
方便たるに過ぎざる也。

第八章 人生の終局

人類は天賦固有の理性を供ふるにより、高尚なる超感觸的運命の存することを自ら感識す、茲を以て諸國民中、大概皆を圓滿なる幸福の状態即ち黄金時代ある事を信ぜざるはなかりき、而して其黄金時代は、或は世界の原始に於てありしと云ひ、或は其終局に於てあるべしと云へり、又將來の黄金時代を説くにも兩様あり、一は之を以て人類歴史の終局にありといひ、又は各個人の性命は永遠無窮にして死後に至り未來に於て各圓滿なる幸福の情態に入るものなりと云へり、希臘、羅馬、波斯及希伯來の昔譚に能乗したる過去の黄金時代及希伯來の昔譚に基き、オトゴメチン以降の基督教會の信じたる黄金時代に就きては、余輩數々之を陳叙したりき、是等の黄金時代の説は、固より正當なる歴史の區域に屬すべきものにあらず、寧ろ宗教的昔譚の類に屬するものなれども、其中には重大なる真理の存することあるは、何人も之を否定するを能はざるべし、第一是等の昔譚(殊に、バイブル)及教會の教ゆる所のものは、人類の理想的狀態を表號的に顯はしたれば、固より人類の原始に於てかゝる完全なる狀態の存したるとなく、また存すべきの道理なしと雖も、人類は始よ

りして斯の如き完全の狀態に達すべき運命を有するは、争ふべからざるの真理なり、又是等の昔譚は現今文明の狀態に魁し、幼稚なる自然の狀態ありしことを查に記憶するの結果也、現今人類の狀態は、勞働、苦役のみ多くして、之を無爲、淡泊、幼稚なる太古の時代に比すれば、寧ろ不幸なる境界といふべし、人類も其幼稚なる時代に在ては未だ罪惡を感ずること少かりしにより神と交ふことも稍親密なりしならん、又世の災害中の最も大なる疾病の如きも當時に在ては人類の未だ經驗せざりし所にして、彼等の生活は甚だ淡泊にして常に其本能力の指導保護の下にありしを以て疾病の災害に罹るも亦少かりしならん、又是等の昔譚は人類が其淡泊無爲なる幼稚の時代を離れ、勞苦多端なる文明の途に就き、其幸福と平和とを以て新なる智識と能力とに交換し、以て覺束なき將來の幸福を得んと苦心しつゝある時に於て、顧みて昔時の自然的無爲時代の幸福なる狀態を思へば、之を景慕して止まざりし事實を致ゆ、余輩が嚮に述べたる如く希臘、波斯、希伯來人の間に傳はりたる惡の起原の昔譚は、則ち此事實を想像的に表示したるに過ぎず、かゝれば何人も是等の昔譚に含有する重大なる真理を否定し得るものなからん、是等は各個人の一身

に於ける生活の状態即ち彼等が成長して労働苦役の間に其日を消磨するに當り、幼時の淡泊無心幸福圓滿なりし時代を回顧し、之を追慕するの念轉た禁ずる能はざるが如きの事實を、直ちに人類歴史の原始に推及して人類の全軀をも亦斯の如くなりしならんと思像し、之を表號的に顯はしたるに過ぎざる也。

幼年の時代は實に各個人に於ける黄金時代と稱するを得べしと雖も、誰か復理性を備ふる人にして何時までも幼時の境界を繼續せんことを希ふものあらん哉、人性の種々なる實驗、労働、辛苦等の助により漸く發達し、漸く其運命を實際に成就し得るなり、故に智者は云はん、我は後にあるものを忘れ、前にあるものを望み、神の上に召給ふ所の褒美を得ん爲に其標準に向て進むなりと、大人は已に幼時の幸福を失ふと雖も、諸の苦惱を経たる後に於て、之に勝れる幸福と平和を得るの道なきにあらざれば、幼時の自然的幸福に復らんことを望むより、寧ろ此高尚なる將來の完全に向ひて進まんと思ふ。幼時の幸福は自然的にして未だ善惡苦樂の味を知らざるものなり、然れども將來の幸福は是等の反對なる諸分子を調和せしめて、故意に形造するの状態なれば、其前者に勝れるや、萬々なり、斯の如く人類全軀も徒に過去

にありしといふ自然の状態なる樂園を失せしを悲み、之に戀々するは其だ無益の業なれば、人は其運命の理想を原始の未だ發達せざる時代に求めず、寧ろ是等は放棄して其前に横る高尚なる幸福と平和の運命に向ひて進行すべき也、幼時の圓滿なる幸福の状態は、彼等自ら労働して得たるにあらず、自然に彼等に備はれる天賜なり、去れば人類は此自然の賜物に満足することなく、世の辛酸、労働を嘗め、其心中の諸能力を調和せしめ、以て自ら幼時の如き圓滿幸福なる平和の状態に進達すべし、人類の運命即ち其心中に賦與せられたる諸能力を發達せしめて神に等しき完全なる状態に達するには、其諸能力の自由なる働を経由せざるべからず、故にかゝる完全なる状態は人類歴史の原始にあらずして、其終局にあるや明也、これ夫の多種の宗教に於て此世の終局若しくは未來に於て、完全なる幸福平和の状態の存するを主張する所以ならん、余輩は宗教歴史に顯はれたる右に關する諸説の重なるものにつき左に陳述する所あるべし、今之を大別すれば、蓋し三種に過ぎず、(一)輪廻説、(二)復活説、(三)永遠不滅説。

靈魂の流轉説は、これ夫の朦昧なる民人の間に行はる、靈は、其物の存命中と雖も、

暫時他の形體に假寓し得るとの見解の特別なる形状たるに過ぎず、悪鬼に襲はるゝ説及其他魔術、幽霊の説の如きは皆此に基けり、斯の如き假定と、夫の死後形體を離れて宿るべき家なくして、世界に漂浪する靈魂が再び新なる形體に宿りて此世に生るゝとの説とは、其間相距ると遠からざれば、彼より此に遷移するは甚だ容易也、北亞米利加之赤人は死せる幼兒の靈魂は、再び女人の腹内に入り、彼等に依りて此世に産るゝものと信ぜり、此流轉説により彼等蠻人の、容易に「アマケスマ」(Amesem)の問題を解釋するを得たり、靈魂の流轉は其の新に得る所の形體の性質によりて進歩ともなり、或は退歩ともなる黑人及澳大利の土人の如きは、彼等が死したる後に其靈魂が白人種の身軀を得て、再生し來らんことを望むが故に、彼等は白人種を以て、彼等の祖先の靈が進歩的流轉によりて、此世に歸來したるものと信ぜり、又其靈魂が獸類の體軀に入りて、此世に再生するの信仰も普通にして、其の入る來る所の動物の有害なると、又は美麗なると醜惡なるとは、其物の前世に於ける行爲の善惡若しくは浮世に於て有したる地位の高下に由ると思惟せり。

印度に於ては靈魂の流轉説は「バラマ」教の要部を占めたり、此説は此教に於ける天

地創造及善惡應報の教義と常に連帶せり、抑も全世界は原始の唯一なる「バラマ」より順次に發射し來り、萬物は皆悉く「バラマ」の發現の形状なれば、遂に唯一なる「バラマ」に復歸す、故に各個人の靈魂も亦唯一なる世界の靈たる「バラマ」の分形なれば、萬物の流轉と共に這も亦無窮に流轉すべし、其の流轉の際に於て高等なる生活に入るか、若しくは劣等に墮落するかは、其の前世に於ける行爲の善惡に依て定るが故に、將來の状態を定むるものは、善惡應報の定則これ也、然り而して此無窮の流轉より救はるゝ道は、唯自己と「バラマ」とは同一なり、特殊の自己は不實なり、其願望及動作は悉く虚妄なりとの道理を悟る、高尚なる知識を得るの一法あるのみ、斯の如く悟道し來るものは、已に虚空の現象たる此世界より救はれたるものなれども、尙ほ其救済を完備するは、死後各個の形體を離れて、唯一なる「バラマ」に復歸する時にあり、佛教も此點につきては「バラマ」と同一の理を教へたり、唯其の異なる所は、佛教の教ゆる涅槃には、「バラマ」の如き凡神的哲理の基礎を有せざるにあり、佛法は寧ろ己の意志を殺し、願望を絶つ實際的の事情に重きを置き、死後靈魂の状態の如きは、之を攻究するの必要なしとして、却て不問に置きたるが如し、然れども佛教も「バラマ」教

と齊しく靈魂流轉説を以て、其救済に關する教義の不拔なる假定と爲したるが如し。埃及人も亦靈魂の流轉説を信ぜしかど、總ての靈が悉く流轉するとは思惟せず、唯罪業深くして死後の安息を得るの價値なきもの、靈のみ、其特別の刑罰として流轉するものと信ぜり。ヘロドトス (Herodotus) の説に依れば靈魂流轉説は素と埃及より希臘に輸入し、始て「オルフ井」(Orphic) の神秘祭に於て顯はれ、又之よりして哲學者エンペドクレス (Empedocles) 及ピサコラス (Pythagoras) の徒は此説を採用し、又彼等によりてプラトンは之を學び、彼の手に於て一層理想的の意義を有するに至れり。然れども此説たるや、或はヘロドトスの想像に發せしものにして、歴史的根據の因るべきなきや知るべからず、或は靈魂流轉説は始より「オルフ井」の神秘祭に屬せしものなるやも知るべからず、果して斯の如くんば其理由甚だ明白なり。「オルフ井」及「テヲニシ」(Dionysian) の神秘祭は素と万有循環の觀念に基けり、故に始に在ては自然界の万物の變化、死滅及復活等に關係せしに相違なしと雖も、終に其理を人類に及ぼし、此にも亦靈魂の流轉ありと信したるならん。夫のデヲニッス、ザグレウス (Dionysus-Zagreus) は、凡て植物の枯死するや秋期に於て殺され、春日に至りて復生

し、又「デメテル」(Demeter) の女「コーレ」(Core) は、年々歳々「ヘーデス」(Hades) より地上に還來することあり。斯の如き事よりして直ちに人類の靈魂は、死後再び新なる形體を得て還來するといふが如き説に推及したるは、甚だ解し易き理なり。去れば印度及埃及に於けるが如く、希臘に在ても靈魂流轉説は、自然に發生したるものなりと謂つ可し。

靈魂の流轉説と形體なき靈魂の永存説との中間に位するものを復活説とす。此復活は將來に於ける或る一定の時に於て、總の靈魂が新しき形體を以て蘇るとの説也。流轉説に於て永久同一なるものは、唯靈魂あるのみ、其形體の如きは或は動物、或は人類あれども、復活説に依れば靈魂の蘇ると同時に、從前の形體も蘇生し、其形狀は當初に異なることなしと雖ども、唯之を組織する材料に至りては、從前よりも高貴にして、其力も亦遙に勝れる所あり、故に復活したるものは、其の靈に於ても其の體に於ても、從前の人と全く同一なり。此の説は波斯の宗教の 주도せし所なるが、之より轉して「バビロン」勝寓後は「ユダヤ」教に遷り、終に基督教にも進入したり。然れども基督教に於ては、稍高尙なる希臘の靈魂不滅説と相混和したれば、其の復活説も一

種特別の形狀を装へり。波斯人の信仰に依れば「アヒュラ」と「アリマン」の争闘は、救世主サラシヤス(Sraoshyas)の顯現に至り、終に「アヒュラ」の勝利に歸して終る。此救世主の顯はるゝと同時に死せるものゝ復活起り、其極に至りて世界の審判行はるゝ也。一切の人はザラヅスツラの子の前に召集せられ、彼等の善惡の行爲二つながら明白なるに至る。此時に當り神に背きし者は、恰も黒獸中に白獸の混じたるを見るが如く、一目瞭然たり、故に彼等は悲鳴して其罪惡の責を己等に充分致せざりし正者の怠慢に歸して、正者を叱咄すれども、何人も此囁語に耳を傾くことなく、彼等は唯其耻辱を受くるの外なし。此に於て乎、善人と惡人とは全く分別し、前者は天國に昇り、後者は地獄に墮す。然れども其分別は僅に三日三夜の間にして、世界の大改革起り、一切を整理して、各其の分別を購和するを得べし。一個の彗星月の一邊より地上に墮落し、諸山の礦物噴出して河の如く地上に流れ、一切の人は此河流に身を投じ、善人は恰も温なる乳湯に浴するが如く暖ずれども、惡人は恰も炎の窟中に投せらるゝ、恰も如き苦痛あり、一切の人の淨められて此炎窟中より出で、唯全く亡ぼさるゝは獨り惡魔あるのみ、茲に於て乎大なる歡樂あり、父子、兄弟、朋友再び和同して復た離別

することなく、一切の人は聲を放ちて異口同音に「アヒュラ」と永世不死の聖徒等を讚美す、これ「アヒュラ」の造化の終焉なり、茲に於て「ゾーマー」の汁(波斯の神酒)より一種の飲料を製し之を飲ましむ、而して之を飲みたるものは、永世不死なることを得る也。此新なる生活は前なる生活と全く別種類にあらず、唯一層高尚なるものとせりしのみ、大人にして死したるものは、其復活の時に於ては四十齡となり、常に此年齢を以て永存し、未だ幼少にして死したるものは、十五歳の若俊として復活すべし、家族の有様も現世と異なるとなく、各其妻女と其小兒等を得、然れども茲には新なる小兒を産むことなし、人は各詩くところに從ひて蒞るべし、一の供物を爲さず、一の施行をも爲さざりしものは、裸躰にして行かん、又是等の善行を爲せしものは、天の使によりて美はしく装はれんと、右は波斯の未來説の要點を擧げたるまでなり、此教に依れば善惡の應報あり、善惡の審判ありて、善惡二道に分別すれども、永遠の形罰なるものあらず、最後に至れば總のものは贖はれ、終に平和と歡樂とを存するのみ、波斯の聖徒の常に希望して止まざりし所は、聖き復活の體軀を得、新しき世界に一の不潔物なく、「アヒュラ」自ら之を淨め、又之よりして門戸は常に開きたる光の

家に永久生活することなりと(チーレーの説)。彼斯の宗教は、バビロン虜寓後の「ユダヤ」教に於ける復活説を形成するに大に與りて力ありしなり。古代の猶太人の宗教上の希望は、彼等人民をして長く世に存在し、又彼等か家族及種族が其中に在て、永く繼續する事のみにして、未だ死後各個人が永久生存することに及ばざりき。希伯來人は人の生命は其身体と決して離るべからざるものなりと思惟せり、好し死後「シオール」(陰府又は下界)に於ては、靈魂の存在することなきにあらざるも、开は幽鬱たる植物的のものにして、勢力なく、感情なく、又た神の恩恵を蒙ることなき有様なれば、何人も之を以て喜びて望むべきものと思惟したるものなり。汝のいつくしみは暮のうちに汝のまこと、滅亡のなかに宣傳へられんや、汝のくすしきみわざは幽暗に、汝の義は妄失の國に知らるゝことあらんや(詩篇第八十八篇第十一章第十一節第十二節)。此詩は古代の希伯來人が彼の世、即ち死後「シオール」に於ける状態に關する見解を明示す、彼等は之を以て無望暗黒、忘却の地にして一の喜悅もなく、亦た一の憂愁もなき場所と思惟せり。然れども猶太人の宗教心が次第に個人的に轉化するに當り、右の如き見解は永く彼等を滿

足せしむること能はざりき。彼等が獨り猶太國民全躰と神との關係のみならず、進みて各個人と神との關係に重きを置き、また夫の「ヨブ」の書に始て見えたるが如く、此世に於て善人義者の苦痛多く、却て不義者の幸福多き事實と、彼等の宗教に於ける善惡應報の教義の間に、頗る撞着あるを發見するに至り、彼等は國民全躰が神の奇跡により復興せらるゝ希望を、國歩艱難の時に於て國家の爲に其身を犠牲に供したる、各個義人の心情にも及ぼし、好し彼等は國民全躰の復興を見るの機會を得ざるも、彼等各個の身に復興あるの喜悅を得るに至らんと期せり、かく虜寓後の「ユダヤ」教に於て、其内心の發達により、曾て朦朧として希望したる復活の信仰は、波斯の復活説により一層明白となり、後又「マカビー」(Maccabees)の時代に於て國民の宗教心大に其光を放ち、千難万苦の中に於て自國の宗教を維持したる時に當り、復活の信仰ハ愈々其基礎を鞏固ならしむるに至れり。復活の信仰が猶太人の間に在て一般普通の信仰として顯はれたるは、夫の「マカビー」の時代に顯はれたる、二個の書に於て見る、即ち「マカビー」書及「ダニエルの豫言書」也。「ダニエル」第十二章第二節に曰く、また地の下に睡りをる者の中、衆多の者目を醒さん、その中永生を得る者あり、また耻辱

を蒙りて限りなく差る者あるべし。穎悟者は空の光輝の如く輝かん、また衆多の人を義に導ける者は星の如くなりて永遠に至らんと。耶蘇の時代に於て復活の説は、猶太人通俗間の信仰中にて、已に確定したる簡條なりき。中には、サドガイ人の如く、之を疑ひしものなきにあらざれども、一般の民人は概ね此説を信仰したり、殊に、パリサイ人の如きは、最も之を固守し、また彼等が肉に依れる、メシヤの信仰と等しく、此復活をも大に感觸的に解釋したりき。去れば此信仰が自然に基督教に遺傳し來りしは、蓋し基督を以て、メシヤと信ぜしは、重に彼の復活に基する所なればなり。然れども基督教に於ては、始より復活の觀念頗る心靈的なりし、パウロの如きは復活の脉は、血肉を以て組織したる現在の身體の如きものにあらず、即ち靈脉にして之を組織する要素は、甚だ貴き靈質なりと云へり。パウロも當時一般の人と共に神性ある神に等しき、靈の居住に最も適當したるものは、斯の如き靈脉ならんと思へり。余輩は後段に至り基督教の復活及其永遠不朽、又は天國の福祉等の關係に到りて、細に論述する所あるべし。

人の靈魂は死後形體なくして存在するとは、これ人類間に於ける最も普通の信仰

なり。余輩は之を稱して靈魂の永遠不滅説と云はん、然れども靈魂の永存は、必ずしも總ての人に附屬する者にあらず、唯高等なる社會の位地を有し、若しくは高德大功ある人の靈魂に限れりと信ずるもの往々にして見るが如し、斯の如き場合に於て靈魂は死後存在すると雖も、絶對的不死なる者にあらず、靈人は惟へらく、靈魂も亦滅亡することあり、軍陣に於て戦死し、或は死者の審判者の棍棒に碎かれ、或は死の橋より落ちて深淵に沈み、其他種々なる災難に遭遇することなきにあらずと、然れども死後靈魂の存在する事實は、靈人には甚だ確實なるが如し、彼等は呼吸を以て人の生命、人の靈魂なりと信ずるに、其人死するに於ては、其呼吸彼を去るが如し、果して然らば其身脉を離れたる呼吸は、何處に飛散するものなりや、これ靈人が普通に起す所の疑問なり、彼等夢中或は幻影、又は彼等の想念力により、向に死したるものが、其生ける時と少しも違はざる、容貌を以て顯はるゝを見ることあり、去れば斯の如き現象を心理的に解釋するの道を知らざる靈人等、如何にして其現象の眞實なるを疑ふを得ん哉、また如何にして彼等が夢想する朋友、親戚は、死後尙存在する靈魂の發現なるを疑ふを得ん哉。

死後靈魂の住所に就きては、其説區々多々なり、最も素樸なる説に依れば、靈魂は其死體を埋めし場所若しくは生前に居住せし場所に永留すと、夫の死せるもの、靈魂が、其家に止り之を保護するとの信仰に基く、*マキス* (Makis) 及 *ペナテス* (Penates) の崇拜は右の説に基くものならん、然れども死者の靈魂が其家に止るは、却て家の不吉災難と認め、或は其靈魂が家の近邊に彷徨するを厭忌するの傾あるものは、種々なる方法を設けて、是等の靈魂を家より遠げんとす、或る蠻人の如きは、其家に死者あれば直ちに居を轉じ、以て前の住家を死者の靈魂の住家たらしめんとす、然れども斯の如きは事頗る贅澤に過ぎ、到底實行し能はざる時は、彼等は他の方法により其厄難を避けんとす、例せば死體を葬むるに當り、之を其家の門戸より出さずして、其窓より送ることあり、或は其後より火を投じ又は水を流すが如きことあり、斯の如き慣行は今尙開化したる民人の間にも、往々其痕を存することあるを見る、死者の靈魂と其體とは、密着なる關係を有し、其の靈魂の安息は、死體を葬むる形狀に關係すると思惟するものあり、故に葬られざる死體の靈魂は、常に安息することなく、世に漂浪せりと思惟せり、此の觀念は開化不開化を問はず、有ゆる民人間に汎く流行し、死體

と靈魂との關係の密着なるを信するの證據は、死者の墓前に食饌を供へ、或は其死體と共に之を埋め、時々食饌を死者に供するが如き事に依て明了するを得べし、支那及印度人の中には、祖先の靈前に供物を捧くるは、其崇拜の一要素たり、基督信者の間に行はれたる、殉教者の墓前の愛餐若しくは總ての靈の口を守るといふが如きは、必竟是等舊慣の殘物ならん、斯く死者の靈魂が生前の住所に歸來して、永寓するとの説ありと雖も、死者の靈魂の住所に關する最も普通の信仰は、之を以て來世の場所、之に達するの道、其旅中の困難及彼處の状態等は、これ諸宗教に於ける鬼神論を形造する最良の材料なり、又是等の事情に關する知識は、單純に神の啓示に由ると爲せども、中には詩歌的の想像に依り、諸神若しくは勇者が下界に降り、暫時彼處に止りて其形狀を報道したるものと爲せり、希臘の鬼神論に於ける此種の物語は、世人の熟知する所なり、*リオニシウス* (Lionisius)、*オルフエウス* (Orpheus)、*ヘラクレス* (Heracles) 及 *オデッセウス* (Odysseus) 等の陰府に降りし物語、近時發見せられたる夫の *アツシリア* (Assiria) の *イスマン* (Ishtar) の下界に下りし事及 *ワイナモイネン* (Vainamoinen) が死者の地なる *マナ* (Maná) に旅せし事情は即ち此の類なりき、凡是等の諸神が冥府に降りし物語の起原を尋窮せば、皆悉く大

陽の運行に關係する所あるが如し、太陽は即ち天の勇者なり、彼は夕に闇黒の地に降り、且には復た生者の地に歸來す。來世の場所を西方の島若しくは高山にありとし、或は地下の深處にありとするの説の如きは、必竟前述の大陽と關係せる所あり。希臘の鬼神論に於ける幸福島の物語は、他の鬼神論に於ても多く散見す、例せばホル子ジャの昔譚に於けるが如し、然れども來世の場所は地球の西方若しくは地下にありとするの説多きし、これ夫の大陽が夕に地下に沈み、又た死者の體を地下に葬る等の事情より發したる觀念ならん。希臘の「ヘーデス」(Hades) 羅馬の「オネコス」(Orco) 希伯來の「シヨール」(Sheol) H耳曼の「ニフヘー」(Nifhel) フネーの「マナ」(Man) 及其他の名稱の如きは、悉く皆總ての死者の集る地下の場所を指すものにして、其起原は概ね皆墳墓の觀念より來りしものならん。斯の如く下界の觀念は死者を葬りたる墳墓の觀念より進化し來れば、其の始は更に道義的の意義を含まず、善惡共に齊しく皆死後に集る場所なりき、故に下界は善惡に係はず、一切靈魂を納むる場所なり。來世の觀念と道義的應報との觀念相混和するに至り、始めて下界に分界を生じ、一方は幸福なるもの、住める輝ける場所にして、他は亡滅に至るもの、住め

る闇黒の場所なり。希臘人は普通の「ヘーデス」と、特別な刑罰の場所とを區別し、普通の「ヘーデス」には善惡の區別なし、然れども惡人の到る所を「タルタロス」(Tartarus) と稱し、善人の行くべき所を「エリシオン」(Elysium) といふ。猶太人は普通の「シヨール」と「ゲヘナ」(地獄) と「パラダイス」(Paradise) 若しくは「アブラハム」の懷とに區別せり。其他諸邦に於て來世は、幸福と災害との二個の場所に區別せられ、其間には超ゆべからざる淵潭を設けり。又幸福者の住家を地球の上なる光の國、即ち神及聖なる靈の住める天國にありとの説あり。斯の如く來世を觀ずるは、これ古代の「アリヤン」人種光明の宗教に多く見る所なり。夫の毗陀の詩中に曰く、

「永遠の光いで大陽の輝き限なき、不死不朽の地に於て、神よ、我をして住ましめ給へ。ウリイウロスウワタ」王の支配せる天の宮殿、大なる水ある場所に於て我をして永久不滅ならしめよ。第三の天あり、自由なる世界の中心に於て、我をして永久不滅ならしめよ、有ゆる願望は成就し、いやちこなる大陽の光は輝き、快樂と自由の外は何物もなき場所に於て、我をして永久不滅ならしめよ、快樂と幸福と歡樂とを永續せしめ、有らゆる願望は無言なる所に於て、我をして永久不滅ならしめ

波斯の天も亦善人の到る所にして、彼等は審判の橋を渡りて茲に達すれども、悪人は此橋を渡らんとして地獄の深潭に墮落す。日耳曼人は神の住所なる「ヴァルハラ」(Valhalla)は天に在りて、貴人は茲に到るを得れども、普通の民人は下界に行くべきものと思惟し、猶太人も亦「パラダイス」若しくは「アブラハム」の懐は、天に在りて義人の爲に其褒賞を貯へ、又天國は彼處よりして地に下ると思惟せり、猶太人の來世論に於ては、天上の世界は將來に於ける「メシヤ」の王國の意義と終に混和するに到り、「ヘレニズム」(Hellenism)に於ては天上の世界即ち無限なる靈の住むべき場所は、これ即ち終局の場所と云へり、蓋し「ヘレニズム」は復活及地上に於ける「メシヤ」の王國の總念を甘受すること能はざりしが故なり、基督教に於ても地上に於ける「メシヤ」の王國の希望漸く衰滅するに従ひ、人類の終局たる福祉の場所は、天國に位するもの、如く思惟するに至れり、余輩は後段に之を詳論すべし。

來世に關し一個の重要な問題は、彼處に到る靈魂の狀態是れ也、或る民人は來世は唯現世の存在を其儘に繼續したるものと思惟すれども、或る民人は之を以て現

世の善惡應報の場所と思惟せり、或者は來世は現世の反響、若しくは影の如きものにして、其狀態は幽鬱なれば、固より現世に比して望むべき所にあらずと思惟せり、これ余輩が屢に述べたる希伯來人の未來説にして、また「ホーメル」に於ける未來の觀念も斯の如し、夫の「アキレス」(Achilles)は影の如き未來の王たらんよりは、寧ろ現世に於て人の被雇者たるの勝れるに如かずと云へり、然れども多くは來世を以て理想的の世界、總の願望の満足する所、總の幸福の永存する所と思惟せしは、夫の蠻人及開明の人種に於て、往々見る所の來世の觀念なり、其詳細の如きは邦土、人種によりて大に其趣を異にす、例せば「西塞」に苦める「グリーンランド」人は、來世は常に夏の氣候にして、太陽は常に輝き、清水、魚類、鳥類、海豹及馴鹿の類群集し、是等を捕ふること甚だ容易にして、中には生ながら釜中に煮たるもあり、北方日耳曼人は「ワルハラ」に於て彼等日々戰鬥を爲し、中に痠傷を蒙り、或は戦死するものありと雖も、負傷者は癒え死者は蘇り、彼等勝者も敗者も共に野鳥の肉を啖ひ、麥酒を傾け、蜜汁を啜り、「オーディン」(Odin)の卓子に於て相集ひ、相歡樂し、毎夜是等の飲食物を盡すと雖も、翌日に至ればまた元の如く完備すと、回々教の信者は天國に於ては、黄金と象牙を以て製

したる臥床に眠り、數多の嬋妍たる乙女に冊かれ、美味あれども酩酊を來さず、頭痛をも起さざる酒を飲み、荆棘なき樹に生る菓實を喰ひ、珍奇なる鳥肉を啖ふことを望む。隱遁主義の佛教信者の天國は、右の如き肉情を満足せしむる場所にはあらず、禪定寂滅の階段を経て、終に涅槃に入るの場所なり。論客ラビ (Rabbi) は基督教會の哲學者オリヂンの如く、天國を以て學問と哲學上の辨論絶ゆる間なき討論會場と思惟し、ヨハ子の福音書以後、スコラ學派に至るまで、基督教の「ミステク」派は、天國の福祉の神と共に常在すると思惟せり。

是に由て之を觀れば、世人が來世に關する觀念は、必竟現世を理想的に描出したるものなるが如し、果して然らば善行美德は、現世に於て世人の尊敬を受け、名譽の常に伴ふ所なれば、此理を類推して來世に於ても亦かゝるべしと信せしハ、當然なる推考なりといふべし。此に於て人の靈魂は死後尙存在すてふ淡泊なる學説は、一轉して彼等は死後に至り、來世に於て其善惡の應報を受くるとの學説に變遷したれども、最初間は來世に於ける靈魂の運命は、其者の内心の徳義よりも、寧ろ彼等が現世に於て社會の爲に計畫したる外形的善行によりて定ると思惟せり。夫の勇敢な

る古代の日耳曼人亞米利加の赤奴、アツテリス人及亞刺比亞人等は戰場に死没したる勇者又は出産の時に死せし女人は、來世に於て幸福を受くる權利あるものと思惟せり。然れども道德心漸次に發達し道義上の觀念一層高遠なるに従ひ、來世に於て人の運命を定むるものは、其外形的の行爲よりは、寧ろ内心の善惡、道德上の價值によりて定ると見做すに至れり。現世に在りては善惡混淆、彼此共に其内心の價值に關係なく、世の禍福を受くることも錯雜すれども、來世に於ては此兩者全く分別し、外形の禍福は其内心の善惡に必ず應答する者ならんと、夫の死の河に架したる死の橋は、善人之を渡れば無難に彼岸に達し得れども、惡人は忽ち失脚して地獄に墮落すといふ昔譚の如きは、必竟此觀念に基くならん。此古今の差別なく、多の民人中に見る昔譚にして、今其の起因を尋ぬるに、這は全く天の虹に基す、幼少人の眼中には虹を見ては、天空に架せられたる一大橋梁にして、現世より天國に達する通路の如くに思ふならん。此事實は幼稚素樸なる人類の心は、容易に自然界の現象に附するに道義的及宗教的の意義を以てするの著明なる例證として見るべく、自然界の現象は、これ夫の幼稚なる人類が、常に道義的及宗教的理想に蒙らしめたるの形狀

なりき。來世に於ける善惡應報説は、最古より埃及人の間に傳來し、此國に在りては人民の道德及宗教上に大なる力を有したるの説ありき。埃及人の説に依れば、凡肉體を離れたる靈魂は、直ちに「オシリス」と、死者を審判する四十二の審判者の前に顯はれ、死者の書と稱する祭司の法律に依て審問せらる。此時に當り彼等靈魂は左の如く白狀せざるべからず、我は在世間何人に對しても故意に惡を爲したることなし、又た一の不敬虔なる行爲なく、下僕を其主に讒したることなく、人を殺したることなく、また人を欺きたることなく、國の尺度權衡の法を犯したることなく、神の肖像を惡口したることなく、死者を包みたる布片を盗みたることなく、姦淫したることなく、乳兒の乳を奪ふたことなく、野獸を牧場に放ちたることなく、神鳥を捕へしことなく、我は潔白なり、潔白なり、潔白なりと、而して此の自白にして事實と相違する所なければ、其の靈魂は光燦爛たる天國に入り得れども、若し其の自白事實と相違する所あれば、彼等は西方にありと云ふ闇黒なる「ヘーデス」に遣らるべし。希臘の俗間の信仰に於て、「ヘーデス」の觀念次第に變更し、多少其の中に道德上の應報の意義を含有するに至りたれども、其應報は普通一般に及ばず、獨り善惡共に著明な

るもののみに限れり、夫の「エリシナム」(Elysium)の幸福なる地は、神に愛せらるゝ勇者の到る所にして、勇者にして罪を犯したるものは、「ラタマンテス」(Rhadamanthus)及「ミノース」(Minos)の審判を受けて、「タルタロス」の刑罰に入る。然れども普通一般の民人は、更に是等の賞罰に關することなく、皆悉く「ヘーデス」に在りて、夢の如き生活を送るべきものなりと、右は普通俗間の信仰に由る神秘祭の禮拜に於ては、來世に於ける靈魂の運命に關する觀念稍高尚となれり、靈魂流轉説の如きは、「オルフ井」神秘祭の特有にして、「エリシニー」神秘祭に於ては、總て其の祭禮の儀式に依て淨められたる人は、神と共に幸福なる生涯を送ると教えり、ピンダル(Pindar)の詩に曰く「エリシニー」の神秘祭を見たる後に於て地下に降るものは幸なり、彼は「ゼウスの定めたる生活の終局と原始とを知るものなりと、彼の説に従へば神秘祭に與りたるものは「ヘーデス」に於て高尚なる神「下界」と共に、幸福なる生涯を送るを得れど、衆多の人は彼處に到りて、嚴密なる審判に與からざるを得ずと、プラトーンも亦曰く神秘祭に與からず、其の淨禮を受くることなくして「ヘーデス」に來るものは泥土の中に住せん、されど其祭禮に與かり、淨禮を受けて彼處に來るものは、神と共に住せ

んとソフ・クレメ(Sophocles)も亦曰く、是等の儀式に興りて後「ペーデス」に到るものは無上の幸福なり、生命は彼處にありて唯彼等の爲に供へらる、然れども其他は總て悪を受けざるを得ずと。

希臘の哲學者の來世に關する學説は、皆上述の神秘祭の教義に基く、ピサゴラス(Pythagoras)の流轉説は、素と「オルフ・井」の神秘祭に發源したることは、余輩已に開陳せり、固より靈魂流轉説の如きは、ピサゴラスの哲學とは更に内心の關係を有せずヘラクリトスに至りては大に彼と異なる所あり、ヘラクリトスの説に依れば、世界の靈は其進化して世界となり、歸化して唯一となり、其の昇降流轉するに當り、各個の靈も亦之と共に流轉せざるを得ず、各個の靈は其高貴なる存在を離れ、肉體中に宿るに至り、其の根本たる神性と別離せらる、去れば其の神性に不格恰なる肉體を脱離する時に至り、始て元の純潔なる神の生活に歸するなりと、故にヘラクリトスは人を可死的の神、神を不死的の人と云へり、此理を以てすれば人の生は神の死なり、人の死は神の生なり、是等の觀念はプラトローの哲學に再現し、爾後思想界の傾向は之に依て定まるものとなれり、プラトローは是等の觀念を自己の唯心哲學に編入

し、以て哲理的の基礎を附し、靈魂は始なく已に原始より存在したりとの所謂靈魂不滅の理を學理的に證明したるは、實にプラトローを以て嚆矢と爲す、彼が之を證明する論法に二道あり、一は實驗的若しくは推理的、他は純正哲理的なり、其推理的證明論に於て、彼は人の生を醒に比し、其死を眠に擬し、其の他變化の中に在て、尙一定不同の質を有するものに比したり、彼又謂へらく、抑吾人が通有性の觀念を意識し得るは、必竟元是等の觀念を有したるより、今之を憶起するものなり、故に人の靈は原始より存在したるものたらざるべからずと、彼又實驗上より證明して曰く、吾人の心靈は肉體に關係なくして、獨立の動作を爲し得る也、されば現時に在ては、已に斯の如き獨立の運動を爲し得る靈魂は、身體共に其の運命を等くするの理あるを見ずと、プラトローは靈魂の不滅を哲理上より證明するに當り、其根據を彼の理想論に則れり、抑理想なるものは永久同一にして之を拒否又は變化することなし、然らば斯の如く靈魂は其本質より云へば、生命と同一なり、故に生命の反對なる死ハ之に伴ふことなし、不朽の生命といふが如きは、已に靈魂の總念中に含有せるものなりと、近世に至り或人説を爲して曰く、プラトローハ自ら各個靈魂の永世不滅を主

張したるものにあらず、彼の言に然か見ゆるは、唯彼が世界の靈の永久不滅なる道理を、公教的に解釋したるに過ぎず、蓋し各個の靈は實在と非實在との混淆にして轉化の原理に従はざるを得ず、故に各個の靈は朽滅することあり、これプラトニーの理想より正當に結論し得べき所なりと、寧ろ吾人はプラトニーの觀念よりして正當に斯の如き結論を引用するを得べし、蓋しプラトニーの理想説は其歸する所、唯心的凡神説にして、其中に各個の實牀及靈魂の永久不滅等を容るゝの餘地なければなり、然りと雖もプラトニー自ら斯の如き結論を自己の哲學より得たりと爲さざるを得ざるか、哲學者にして自己の哲學中に含有する、正當なる結論を自ら引用することなく、又は其結論の必然的に自己の哲學に伴ふことを認めざることあるは、吾人が往々哲學歴史に於て見る所ならずや、或は彼等が實際上に於て必要なりとして主張する議論は、往々其理論と撞着するが如きことあるは、決して稀有の事にはあらず、去ればプラトニーに於ても亦然り、彼の議論は其哲學の正當なる結論に撞着する所ありとするは、彼が故意に無學なる俗流の爲に其議論を、公教的に裝飾して之を述べたりとの説よりも、遙に優勝したる所あるを見る、右の公教的裝飾説と大に

撞着するは、彼プラトニーが靈魂の不滅説に重きを置き、之を以て其道義學に於ける甚だ重要な實際的の眞理と主張したる事實なり、彼フェードー(書名)の結論に曰く、吾人は力の及ぶ限りは徳と知恵とに進むべし、何となれば其報酬は甚だ高價にして、希望は絶大なれば也、然れども今は茲問題に向ひて彼是冗辨を費すべき時にあらず、此問題が如何に決着するも、哲學及び宗教界に於てプラトニーは、個人的永遠不滅の説を主道したる勇將と認められたるは、争ふべからざる事實也、彼の勢力は常に此説を保持するにありし、これ彼が基督教の神學に於て、重大なる勢力を有する所以也。

希臘の哲學と基督教の神學との中間に立ちて、其媒介を爲せしものをアレキサン德里ヤの「ヘレニズム」とす、プラトニーの主張したる靈魂の不滅及其先在説は、アレキサン德里ヤの知恵の書及フ井ローの書中に於て再顯せり、また希臘學に化せられたりといふ「エッセンス」(Essens)の中にも此説あるを見る、是等に在ては猶太の普通の教説たる復活説は、漸々其地歩を形體なき靈魂の不滅説に譲れり、而して其不滅なる靈魂の居住たる來世には二個の場所あり、一は神に恵まれたるもの、場所、他は

神に罪せらるゝもの、場所なり、即ち前者を天國といひ、後者を地獄と呼ぶ。ブツトの書中には靈魂の死後來世に於て、數千年の間賞罰を受けたる後、再び流轉するをありとの説あれども、フ井ローに至りては、殆ど此説の痕を絶ちたるが如し、ヘレニズムに於ける未來の希望は、其靈魂をして肉體の牢獄より脱せしめ、聖き幸なる靈と共に永遠の存在に入ることなりき、かゝる未來説は耶蘇の時代に於て、エッセニズム (Essenism) の媒介により、猶太人間に於ける、普通一般の信仰に影響を及ぼしたりき、何となれば復活の時に於ける、メシヤの審判に關する信仰と共に、死後直ちに善惡の應報を受け、或は地獄(ケヘナ)に落ち、或はアブラハムの懷に入るとの信仰を一般に有したるが如し。夫のルカ傳第十五章に於ける富めるものとラザロの説話の如き、又は耶蘇が十字架の上にて其の傍に於て處刑せらるゝ、罪人に向ひ、今日汝は我と共に、パラダイスに入らんと云ひしが如きは、則ち死後直ちに善惡の賞罰ありとの信仰に基くならん。然れども彼の、パリサイ宗に依て最も明に代表せられたる、正當なる「ユダヤ教」に在て重なる希望は、「メシヤ」の王國を此世に建設するにあり、而して前述の死後直接の賞罰の如きは、寧ろ世界の終局に於て執行せらるべき復

活及審判を受けて、其運命を定むべき豫備の如きものと主張せり。基督教の來世説に於ても、ユダヤ及希臘の二分子混入し、爲に或は實體的となり、或は唯心的の性質を帯ぶることあり。古代の基督教會に於ける來世説(其大體はパウロの説)は、基督の再來を信ずること甚だ厚く、一切の信徒皆彼が此世に降りて、メシヤの王國を建設するの期切迫せりと信じ、此王國は或は感觸的或は理想的と認められたり、然れども其大體より云へば、舊約に倣ひ此世に於ける理想的神政の建設なりき。斯の如く、メシヤの王國の觀念は、其起原、ユダヤ教にあり、又其形狀も「ユダヤ」的なるにより、世界の永遠なる完局の觀念と、全く和合すること能はざるにより、常に彼此の間を區別し、前者は單に中間の常態にして、永遠の福祉を此世に於て先嘗するに過ぎず、基督教及「ユダヤ教」の默示に於ては、地上の「メシヤ」王國は其期有限にして、世界の完局に先つとの觀念發生せり。ヨハネの默示には其王國は一千年間繼續すべしとあり、故に此時期を稱し「ミレニオム」(Millennium) 又は「チリアムス」(Chiliasm) なりとす。これにより死者の復活及審判を二期に分ち、一は「ミレニオム」の始にあり、他は其終にありとの説起れり。「ユダヤ教」に於ても等しく復活と審判とは「メシヤ」の王國の始

にありと教に黙示録に於ては第二若しくは總復活の後に於て世界の完局來るものと教にたり。舊天舊地は去りて新天新地之に代り、而して新世界新エルサレムは新婦の新郎を迎ふるが如き裝飾を爲して、天より地に降り神自ら聖徒の中に住み彼等を輝し永遠より永遠に至るまで彼等を治め給ふ、聖徒も亦其首領たる基督と共に神の榮光に浴し彼が世界の政に參與す、「ユダヤ」教の來世説に於ても「メシヤ」の口即ち此世に於ける「メシヤ」の支配と、來るべき世界即ち世界永遠の完局の状態とは常に相混和して其間に確固たる境界を設くること能はざりし、また新約書に於ても地上に於ける基督の一千年間の支配と、永遠の天國とは決して明に區分すること能はざりし、三福音書の來世説に於ては唯一個の終局の最大なる災害あるを見るのみ、又た其終局の状態を説明したるものを見るに、純然たる現世の分子夥多にして、人をしてこれ寧ろ永遠の天國の状態よりも、地上に於ける状態を指すにはあらざるやを疑念せしむるもの多し、パウロの如きも基督の再來を以て既に切迫せるものと信せしが、其再來は世界の永遠の完局の時なるや、將た黙示録に所謂「ミレニウム」の如く、其以前に於ける「メシヤ」の王國の始なりしや、之を明劃に識別す

ること至難也、第四福音書に於ては、地上なる「メシヤ」王國の觀念全く其痕を絶ち、之に代ふるに基督は聖靈により、常に我等と共に在住し、我等が永遠の幸福は、業に已に此世に於て神と基督とに交通する事に於て始めりと教えり。死後に於ける靈魂の状態に就きても、新約の教ゆる所種様にして、其の間殆ど調和すべからざる觀念多し、新約に於て死後の状態を眠と稱するは普通の事なるが、これ死者の靈は「ヘーデス」の中に於て眠り、總復活の時に於て復活するとの意ならん、然かるに他の場所に於ては、之れと大に撞着するの語あり、即ち死者の靈は死後直ちに「パラダイス」に至り、基督と共に新しき天の住所に居らんと、かゝる状態は決して眠の状態にあらず、又斯の如く「パラダイス」に於て基督と共に存在する靈魂の状态は單純なる豫備の状態にして、異日總復活と其の審判とにより、永遠の福祉に至るべき假の場所といふは、甚だ了解に苦しむ所なり、斯の如く「ユダヤ」教の來世説に基く實体的分子と靈魂は死後直ちに基督と合昧するものとの理想的分子とは決して調和すること能はず、使徒パウロの來世説に關する理想的分子は、彼が信仰の特色たる「ミスチズム」(Mysticism)の結果也、彼惟へらく信徒が基督と交り、彼と一昧和合

するは既に此世に始るものなれば、其状態は肉體の死により中斷せらるべきものにあらざ、却て之に依て完備するならんと、第四福音書の記者は此事につき一層明白なる意見を提せり、永生若しくは永遠の福祉は信仰により、此世に在て始まる、何となれば永世若しくは永福の如きは、神及基督と交はりて完備したる有様に外ならず、然れども此の交なくんば信仰も亦存すること能はずと、固より此福音書中にも、復活説即ち死者が審判の日に於て其墳墓より復起するとの説なきにあらず、悪人の運命に就ては、一定の見解を得ること頗る難し、彼等の謂は復活の望なく、永遠死の中に止るにありとの説甚だ多數なるが如し、然れども他の説に依れば彼等も遂に復活し、總審判の時に於て闇黒なる地獄に投ぜられ、永遠の苦痛を受け、或は消えざる火災に焼かるゝとの事也、彼等悪人も亦全く望なきにはあらず、終には救はるべしとの意義を有するの説あり、一切の人基督に在て復活し死ハ滅され、神万物の中に在すとの事は、永遠の地獄と其苦痛との觀念は調和し難きものなり、斯の如く來世に關する所説の區々なるは、蓋し其の希望超絶的性質を帯ぶるが故なり、然れ共特に斯の如きの異説を其の間に生したるは、基督教に於ける來世説、其の源を

或は「ユダヤ」教或は希臘の哲學に發したるものあるが爲なり、基督は直ちに再來し榮光の中に其の王國を地上に建設し給ふとの信仰は、紀元後二世紀の間専ら基督教會に行はれたれども、第三世紀に至り時勢漸く一變せしかば、右の信仰は全く其の脊後に退却するに至れり、爾後基督教會は曩日の如く通世主義を固守せず、却て現世に於て其の勢力を張り、宗門政治によりて實際に世界を支配するの希望漸く増長するに従がひ、奇跡的に建設せらるべき基督の王國を信ずるの信仰は、一轉して已に教會の中に實成せられんとする神の王國の觀念に變遷するに至れり、斯くて古代の基督信徒が、常に呼吸せし空氣即ち切迫せる基督の再來說は、「ユダヤ」教の異端として、カトリック教會の排斥する所となり、爾來右の致説は再び教會中に在て、其の頭を擡ぐることを能はざりき、これ實に社會の變遷と共に其の宗教心も從つて變遷する一大例證として見るべし、然れども教會は常に世界の末日に於ける、最後の完局に關する古代の基督信徒の信仰を固持したりき、即ち末日に於て人類の總復活あり、世界の總審判あり、基督を信せざる不敬虔者の刑罰、善人殊に眞誠なる基督信徒が圓滿なる幸福に入ることにて、時間ハ其の終局

を告げ、一切の衆生は永遠に入るなりと、罪人の到るべき場所は地獄にして、其の刑罰は肉體上の苦痛の永遠無窮なるにありと、(夫のオルデンの如き唯心論者は、之に對して大に異説を唱へたれば、直ちに異端者として擯斥せられたり)かゝる感觸的刑罰は深く通俗人の心を感動し、粗暴なる蠻人を教育し又た訓誡するに、甚だ有益なる機具たりしは疑を容るべからざれども、此の結果は數百年間異端者及魔術師等を處刑するに殘酷なる方法を用ゐたる原因とありしや、又疑を容れず、救はれたる者の行くべき場所は、現在の天地の溶解されたる中より、現出すべき新天地なり、而して其新天地の分子中にて、感觸的又は超感觸的の分子の孰れか多少なるやに至りては、被救者の幸福なる生活の條目に關する觀念の如何に由る、此の點に關しては基督教會の説當初より分裂し、一方に在ては來世の新天地は、全く唯心的又は心靈的とす、これ第二世紀の「ノスチック」派の専ら主張せし所なり、夫の第四福音書及オルデン等の主張せしアレキサンデリヤの神學に於ても、大に此の傾向を有せり、固より中には反對なる分子の混入せざるにあらざれど、後世に至り右の心靈的未來は、夫の「ミスチック」派の思辨的神學者の主張する處となれり、其の説に依

れば救済は愛と知識の中に在りて神及基督と一体に和することなり、而して斯の如きは現世に於ける、基督信徒の生活の理想たり、夫の肉體の復活の如きは、或は之を不問に措き、或は唯眞誠なる教説に附屬する、寧ろ不重用の分子として之れを其の儘に保存し、及ぶ限り其の中より感觸的の分子を排除せんと試みたり、他方に在ては頗ぶる極端なる肉體の復活説を保持し、吾人の身軀は現状の儘にして、骨肉、皮毛、臟腑に至るまで、悉く復活すべしと、此の説の如きはパウロの所謂靈軀説とは、大に撞着し、ユダヤ教殊に「パリサイ」人の主張せし復活説に復歸したるものと謂つべし、然れども終に教會の主張する教説とはなれり、而して之れに含有する諸般の難問及撞着の如き、到底之れを解釋すること能はざるものは、直ちに神の全能と人の知識の有限なることを以て、其の異論者を壓伏したりき、正理論の起るに當り、全く此の復活説を排斥せり、カント曰く、人類は此の世に存在中と雖も、此身軀を左までに貴重するものにあらず、况んや煩累多くして擾雜なる身軀を永遠に提携するが如きは、寧ろ望むべき所にあらずと、古代の基督教會は、原始の基督信者の來世説に於ける、最も重要なりし信仰箇條を排撃し、基督の地上に於ける千年間の王國の觀

念を以て「エダヤ」教の誤謬なりと認めたりき。今又正理論は其「エダヤ」教の殘物たる、肉體の復活を全く排斥して、純然たる無形の靈魂不滅説を主張せり。かくて教會が死と復活との間に於ける、中間なる各個靈魂の状態と認めしものを以て、來世に於ける永久不變の状態なりと主張するに至れり。

來世説に關する議論は上陳の如く、正理論の起るに及び、全く其感觸的の分子を排除し、單に靈魂不滅をのみ主張するに至れり。而して其議論の燒點となりしは、靈魂不滅の信仰の爲、鞏固なる基礎を發見することにてありき。スピノザは其の上帝論に於て敬虔なる靈魂は、神を愛し彼の不變なる本體に關與するにより、永久不滅なりと云へり。又其の倫理論に於て人の靈魂の靈性及活潑なる部分は、神を愛する愛の大なるに従ひ、其中の汚滅すべき部分よりも大なるものにして、固より永生不滅なりと云へども、吾人の自覺の依て繼續し得る記憶力は、物體に委頼する所あるにより、死に至りて消滅するものと云へり。然れども斯の如きはこれ即ち個人的不滅を否定すると同一なり。好しスピノザは自ら故意に、かゝる結論を引用せざりしとするも、彼が倫理論に於ける前提中には、必然此結論に至るべきものあるは疑を

容るべからず、來世に於て善惡の應報を全ふすべき道理に基き、靈魂の永生を證せんとする、所謂道義的證據に對し、スピノザは反對の説を提して曰く、抑幸福は善徳の報酬にあらず、即ち善徳其者なり、神を愛するの愛は、自ら其中に肉慾に打勝つ勢力を有す、これ即ち吾人の幸福なりと、唯心的道義學者なるレヤンツペリ（Shanteshury）も、夫の來世に於て應報を要するとの主義主義に反對するに當り、スピノザと同様の論法を用ひたりし。懷疑論者なるヒューム（Hume）は靈魂の不滅を證するに、此世に於ける善惡の報酬公平を失する所あるを以て、必ず來世に於て其補欠なかるべからずとの議論の弱點を示し、余輩は善惡の報酬は、唯現世に於て之を認るのみ、豈に不分明なる來世に於て、斯の如きことあるや否やを知るを得んやと難せり。

ライプニツ及ウルフ等に基ける文華に於ては、靈魂の不滅説は信仰中の重大にして既に確定したる箇條となり、ライプニツは靈魂を以て限なく發達する能力を有する、非造不滅の元子なれば、固より不死なりと斷し、ウルフは尙此の議論に加へて、此非造なる靈魂は、其以前の狀態より現今の生活に入るに當り、諸觀念を形造するの能力を失はざりしにより、必ず復た此生活より脱して、未來の狀態に遷るに當

五百六十

り、同じく之を失ふことあらざるべしと云へり、メンデルソン (Mendelssohn) は右の問題に關し、文華の爲めに代言者となり、其「フェードン」を稱する書に於て、靈魂の不滅を其性質上より證して曰く、抑靈魂は單純なるものなれば、奇跡にあらずして之を滅ぼし得るものなからん、然れども奇跡を以て之を滅すが如きは、決して有得べからざる事なりと。彼又結局原因的に於て證して曰く、人は益々完全ならんことを希望す、而して此希望は造物者の附與する所にして、死と雖も漫に此希望の満足に達するを妨害する能はざるべし、此希望にして無限に存在せんか、靈魂の本領たる思想及意志の力も、又偕に繼續せざるべからずと。カントは亦靈魂の本質上より哲理的に其不滅を證するの議論を駁して、これ夫の「エーゴ」若しくは自覺の作用の総合的統一と、其の單純なる性質とを混亂せしに基く暴論なりと云ひ、彼は之に代ふるに彼の所謂道義的證論、余輩は之に證論の名稱を附するは不適當なりと俱す、實理性の假定といふの穩當なるに如かずを以てせり、即ち吾人が性質の感觸的にして不順なる處あるにより、時間の中に在て道義の理法を、全然實成することは、到底善し能はざる所なり、故に此實成を全ふするには、永遠の存在を要す、然らば來世に

於て幸福と善徳とは必ず相應照するに至るべしと。

フ・ビテールの後年の哲學に於ては、カントが主張せし道義的假定に、哲理的轉換を與へ、彼れは道義的人性には滅すべからざる神の發現の形狀ありと思惟せり、然れども果して一切の各個實在者は永遠不滅なりや、或は此の世に在て通有的價值を有するものを、自ら發達せしめたるもののみ然るを得るや否やに至りては、彼の議論未だ一定せざる所あるが如し、ゲーテ (Goethe) の説ハ唯不滅なるものは、通有的價值を有するもののみと爲すにあるが如し、彼は自然の理法に基き、此世に在て不斷活動する元子は永遠に於ても其活動を失ふことなかるべし、然れども未來に於て大なる圓極たらんと欲するものは、須く先づ現世に於て圓極たらざるべからずと。かゝる有限的不滅説は、ワイセー (Weisse) ローテ (Roth) セー、フ・ヒテール (Fichte) 等の齊しく主張せし所なり、然れども單に善人のみ永遠不滅たりとの説より、唯善且つ誠なるもの、若しくは通有的靈のみ永遠不滅なりとの説に轉するには、唯僅に一步を剩すのみ、斯の如きはスピノザの右の問題に關する前後の所説を比較して研究するも、正に其然るべきを知る、近世に及び論理的唯心論が、哲理的及論

理的に轉換するに至り、亦同様の變遷ありしを見る。シュライエルマールは普通の人が靈魂の不滅を望むは、必竟其利己心の證なれば、寧ろ宗教の精神に反けり、何となれば時間の外若しくは其裏面にある永遠不滅は、これ宗教の目的にあらず、即ち其本質に逆ふものなりと、然れども宗教の目的たる永遠不滅は、已に吾人が現世に於て時間の中に有す、吾人は已に實際其永遠不滅の中に立てり、有限の中にありて無限と一昧となり、時間の中にありて常に永遠なるは、これ即ち宗教の目的たる永遠不滅なりと、ヘーゲルも亦曰く、唯一の要點は靈の永遠にあり、而して其永遠は卒に未來に至りて起るにあらず、現世にありて靈魂が有ゆる通有的なるものを思考し、意志する所に於て之に附屬するものなりと、然れどもヘーゲルは各個の靈魂、結果して不滅なりや否やの議論に至りては、之に明白なる答解を與へざりし、故に此疑問は「ヘーゲル」學派の中に於ける争論の中點及分離の原因となり、ゲーセル (Gössel) 及コントラーデ (Conrad) の如きは、夫の「ヘーゲル」學派の右黨となり、リヒテル、フライエルバーヒ及スツラウスの如きは其左黨となれり、然れども論理的唯心論は、唯觀念即ち通有的のもの而已を以て、眞誠の存在あるものと主張するにより、之をして

正當に撞着なからしめんと欲せば、各個の永遠不滅を否定するに至らざるを得ず、故にビードルマン (Biedermann) の如きは、此問題に關し「ヘーゲル」學派の左黨の位地に立てり、然れどもヘルバルトの如く、一切の特殊物も亦實體ありと主張する復多的純正哲學に於て、各個靈魂の永遠不滅を主張するに至りしは、これ蓋し自然の結果と謂つへし、ヘルバルトの學說中にて最も奇なりと稱ふべきは、彼が靈魂の意識は唯其身體を組成する諸實體者と合體するにより、始て發生すると云ふにあり、然れども斯の如きは直ちに死後其自覺の繼續に關し、容易ならざる疑團を惹起するに至らん、夫の實體唯心的なる哲學は、ライプニッツに倣ひ各個の靈魂を以て、無限の發達力を有する獨立の元子なれば、死は漫に之を滅すこと能はず、唯之を新なる發達の場所に移すのみと主張せり、去れば之を以て上述の諸說に比すれば、大に優勝なる所あり、而して此學說はクラッセーに至り、一層確實なる基礎を得、今や思辨的有神論者の一般に保持する所となれり、余輩が屢に述べたるワイセー及フヒテールに於て、ワイルト (Wirth) ウルリシー (Ulrich) カリエー (Carriere) フヒキル (Fischer) ロッチエー及タイヒミルレル等の諸學者の名を以てせんとす。

是等の學者の説に依れば、吾人の自覺ある「エーゴ」の不滅なること、若しくは人性的永遠不滅に係り、確實なる證據を擧げて之を論ずることは、到底爲し能はざる所なり。若實驗上より吾人が意識の事實に全く反對するにより、吾人各個の「エーゴ」は、將來に於て死滅すべきとは、決して思考し得べきにあらずと證明するを得ば、吾人は個人的永久不滅に關し、確固たる證論を得ると雖ども、吾人の意識は更に斯の如き事實を與へず、吾人の「エーゴ」は常に時々無意識の状態（睡眠及絶息の間）に陥るのみならず、吾人は其「エーゴ」の現世の前に於て、已に存在したるや否やを知ることは能はざれば、過去の存在に就て確知し能はざるものを、手でか將來に於て存在すべしと、儘に證明し得る耶。故に人性的永遠不滅は、知識の目的にあらず、吾人は之に關し科學的の證論を提出すること能はざるべし、これ單に知識に基かざる希望の目的たるに過ぎず、凡哲學上の研究は間接に此希望を補助するに過ぎず、即ち之に對して提出せらるゝ反對の議論を論駁し、而して此希望の價値の高貴なるを證明し、又之をして有ゆる不潔なる分子を排除する等の事情により、僅に間接的の證明を下すに過ぎざるべし。

若し靈魂の不滅を學理上より證明することを至難とせば、之に對し學理上より反對の證明を立つるも亦愈々至難ならん。靈魂不滅は決して有得べからざる事を證せんと欲せば、須く靈魂は實體にあらず、唯作用のみとの唯一の假定に由らざるべからず、然れども作用なるものは、其附屬すべき主觀をかるべからず、されば余輩は直ちに問はんとす、吾人の靈魂果して作用なりとせば、何物の作用なるや、唯物論者は直ちに答へて、靈魂は身體の作用なりと云はん、然れども、唯心論者は之を以て神若しくは靈、若しくは世界の靈、若しくは觀念、若しくは無意識、若しくは圓極等の如き理想的原理の作用にして、身體の助と其制限とを受けて顯はるゝものなりといふ。是等の諸説は他の點に於ては、甚太だ相違する所ありと雖も、今余輩が提出したる問題に關しては、彼等皆同一の答解を與へり、蓋し彼等は之に關し同一の假定を有す、即ち各個の靈魂は非質體的なる事也、然れども是等の諸説を、吾人が實驗上より得たる所の事實に照し、保持すべからざるの説たるを證するは、蓋し難事にあらざるべし。

身體は多の部分より成立する總体なれば、若し靈魂は其諸作用中の一なりとすれ

五百六十六

ば吾人は到底吾人實驗の根本の事實たる意識の統一を了解すること能はざるべし。縱し靈魂は身軀中の一部份たる腦髓の作用なりとするも、更に其議論を補ふこと能はざるべし、何となれば腦髓も亦空間を隔て、分立する、多の部分より成立するものなれば也。若し唯物論者が唱ふるが如く、吾人の觀念は腦髓細胞の作用、若しくは其結果なりと思考するも、吾人は到底諸の觀念を結合する、思想の動作の綜合的統一は、其動作の中心なる主觀なくして之を解すること能はざるべし、又身體の諸部を組織する要素ハ、常に新陳代謝して止まず、數歳毎に全く之れを改新す、然るに靈魂にして若し其の作用なりとせば、如何にして意識は常に不動唯一なるを得る耶、吾人の記憶は更に身體を組織する要素の變遷によりて影響せらるゝとなく、其の變化の中に在て常に生活中一切の實驗の結果を保持し得、これ何物に依て然るを得る耶、唯物論者は靈魂は大に身體に憑託する所あるの事實を示し、即ち知覺及劣等なる感情に訴へて自説の證明と爲さんとす、余輩は之に應じて云はん何人も靈魂の生活は、多く身體に依て制限せらるゝことあるの事實を否定するものあらざるべけれども、斯の如きは未だ以て二者の同一なるを證するに足らず、余輩は二

者の同一ならざるを證明せん爲には、更に靈魂の身體に制限せらるゝことなき事實を以てせんとす、唯物論者は常に、此事實を看過せり、吾人の靈魂は其高尚なる生活に於ては、肉體の作用と全く異種にして、而かも之とは全く無關係なる自個獨特の存在を有するは確たる事實也、靈魂の思想、感情及其他理想的性質を有する動作の如きは、更に身體の作用と關係せざる自個獨特の働にして、身體とは原山の關係をも有せず、吾人の靈魂は其内心の生活に於て、身體を支配し、其衝動力を制御し其苦痛を忘れ、其弱に勝つの力を有す、若し靈魂にして單に身體の作用なりとせば如何にして其附屬する身體に、直接に反對するの運動を爲すことを得ん哉、然れども若し靈魂を以て身體とは全く別種物にして自ら獨立の存在を有するが故に、實軀にして獨立の作用を有するの主觀なり、然れども現今の状態にては、其の動作多くは身體の作用に依て制限せられざるを得ざるものとすれば、是等の事實を了解するは蓋し難事にあらざるべし。

唯心説に依れば靈魂は、通有なる理想的原理の作用にして、身軀の媒介に依り現時の状態を爲すと、然れども斯の如きは夫の唯物論の主張する説に比して更に優劣

あるを見ず、唯其議論の一層錯雜したるに過ぎず、唯心説の主張する所に依れば、理想的原理の通有なる作用よりして、各個の特有なる靈魂を組成するの動作は、全く身體の作用に由る、何となれば其通有的作用のみにしては、未だ以て各個の靈魂たるを得ざればなりと、されば此説に於ても各個の靈魂ハ、直接には各個身體の作用なり、唯間接に通有なる理想的原理の結果たるのみか、れば嚮に余輩が唯物論の學説に對して提したる駁論は、今や此唯心論の學説にも適用し得べし、唯心論に於ては、其主張する所を保持すること、唯特論よりも一層困難なり、若し靈魂にして直接に其身體の作用なる時は、如何にして靈魂は數々其直接なる主觀たる身體の動作に抵抗し得る耶、若し靈魂は間接に理想的原理の結果なる時は、如何にして之に反對するを得る耶、吾人の實驗上よりすれば、靈魂は常に彼此共に反對し得る也、スピノザに於ては、稍此説を變更し、身體と靈魂とは、元と唯一なる實跡の二個の並行現象たり、其唯一なる實跡は一方より之を見れば物質的なり、亦他方より之を見れば心靈的なりと、然れども、假令スピノザの説に依り、靈魂の作用と身體の作用との間に區分を劃し得ると雖も、彼等の間に於ける交叉の運動及其關係の如きに至り

ては、殆ど之を解すること能はざるべし、スピノザは云へり、凡て靈の現象は、同質の現象に依て發作せられ、又物質的現象も同質の現象に依て發作せられ、其間互に交叉する所なしと雖も、彼の現象は常に此の現象に伴はる、所あるのみと、然れども吾人の實驗する所に依れば、幾回か靈の現象は、身體の作用に依て發作せられ、而して其原因は心靈の動作の中にあらず、又身體の動作は數々靈の作用に依て發作せられ、而して其原因は身體の動作の中に見出すこと能はざるものあり、斯の如きは決してスピノザの靈と體との並行説に依て解説すること能はざるべし、されば靈魂は唯これ作用なりとの學説は、那邊よりするも到底満足に靈と體との關係を説明すること能はず、余輩は是等の學説に對し、吾人が意識の緊要なる事實、吾人は吾人の意志中に獨立の實跡及活潑なる原由の理の存することを直覺し、又吾人以外の實跡及活動に關する吾人の知識は、自己の「エーゴ」の直接なる事實よりして演繹したる結果なりとの事を以てせざるべからず、吾人は何等の權利ありてか、我意識の直接なる事實たる我「エーゴ」の實跡なるを否定し、却て其總念を間接に我「エーゴ」の事實より演繹したる他物に向ひて附するを得ん哉。

既に吾人の「エーゴ」は、身體と異なる特殊の主觀若しくは實跡なることを確守するを得ば、少なくとも此實跡なる「エーゴ」は、死後と雖も尙存在し得べしとの信仰を起すに至るべし。多種の學者は其の論歩を進めて、實跡の總念中には必然的に不滅不被造の理を抱合し、若し靈魂の本跡は不滅なりとの事は理跡的必然なりとせば、其の不被造なる事も自ら其中に抱有するなりと、然れどもかゝる所論は、管に神及創造の總念に關し種々なる難題を惹起するのみならず、亦目下の問題に關し更に有益なるを見ず、何となれば吾人の靈魂の本質は始より造られたるものにあらず、又は亡すべきものにあらずと主張するものにて、其の靈魂は過去に於て現時の如く、自覺ある「エーゴ」の状態を以て存在せざりし事を許さざるべからず、縱し其靈魂は過去にありては、現時に異なる「エーゴ」の姿にて存在し、(靈魂流轉説の主張するが如く)若しくは朦朧たる靈魂の種子の如き状態にて、其中に意識力となるべき能力の隠伏したりとするも、是等は更に目下の問題に益する所をかるべし、何となれば吾人の靈魂は、其状態如何なりしにもせよ、過去に於て存在したりしが如く、死後も亦同様の状態に入るならんとの事は、論理的に之を主張するを得べけれ

ばなり、即ち吾人の「エーゴ」は過去に在りては、現時の如く人性的たらざりしにより、死後も亦同様の状態に復歸し、或は異なる「エーゴ」となるか若しくは靈魂の原質に復せざるを得ず、果して然らばこれ即ち人性的各個の靈魂不滅の説を放棄するもの也。故に余の説を以てすれば、吾人は靈魂不滅を學理上より證明し若しくは哲理上より其の確實を得んと欲するは、到底爲し能はざる所也。吾人は唯靈魂不滅の可能たるに止まらざるべからず、又た一方より之を見れば斯の如き學理上若しくは哲理上の議論に依り、其確實を得んと欲するは、寧ろ無益の業なり、實際の爲には、唯哲理上より靈魂不滅の可能たるを許諾するを以て足れりとす。既に此可能たるを許諾するを得ば、靈魂不滅を信する實際的の理由は、吾人の心中に之が確信を起すの機會を得るに至らん。固より此確信は主觀的にして客觀的にあらざればとて、又必ずしも之が爲に其價值を減し、其効力を失すべきにあらず、實際上の理由に基く主觀的の信仰は、之に關する客觀的若しくは學理的の知識に比し、更に劣る所を見ざる也。

靈魂の不滅を希望する實際上の理由には、純潔なるものと、較々純潔ならざるもの

二種あるを識別せざるべからず、此希望よりして不潔の分子を愈々多く排除すれば、其價値と効力とは愈々大なるに至る。來世に於ける報酬の觀念を以て、道義的行爲の動機となすが如きは、これ寧ろ道義心發達の劣等なる程度に屬するといふは、甚だ至當の言なり。人若し來世の報酬を目的とし善を行ひ、若しくは其刑罰を恐れて惡を制するが如きことあらば、これ夫のエピキウロス(Epicurus)及エノイスト(Enos)の徒が現世に於ける利害得失を目的として、其行爲を調度するものと何ぞ擇ばん。然れども茲に吾人が不問に措く能はざる二個の要點あり、第一は右に述べたるが如き觀念の教育上の價値、即ち粗野なる人心を制御し、彼等を施て漸々高尚の程度に達せしむることなり。情々宗教心發達の歴史を顧るに、律法的宗教即ち奴隸的恐怖の心を以て神を崇拜することあるは、常に救済の宗教即ち神を父と崇め愛を以て之に仕ふる宗教に先つを見る。斯の如く特別なる場合に於ける道義的教育に於ては、現世及來世に於ける善惡の賞罰を以て、之を勸懲するが如きは、決して欠くべからざる具也。孰れの時代、孰れの場所に於ても、此勸懲の法の教育上に効益あるは更に疑ふべきにあらず、若しか、る方法の不用なる場所に於ては、彼等は自然

に其痕を収むるに至らん、縱し高尚なる宗教に於て、尙ほ來世に於ける報酬の總念存することあるも、吾人は卒然之を目して、彼等に不潔なる道徳上の動機存せりと稱するを得ず。然れどもこれ實に理論の一方に變じ、宗教心實際の働を了解するの力に乏しき批評學の往々陥り易き誤謬也。斯の如き批評學者は實際上の動機と、之に伴ふ觀念等を混合し、神と善とに對する愛を以て、單一なる動機と爲せる頗る高尚なる道徳の中に於ても、尙ほ天上に於ける幸福の觀念は、多少重きを其中に有することを認め得ざるものなり、固よりかゝる高尚なる宗教心に於ては、其觀念は劣等なる中に於けるか如く其効力を有せず、高尚なる程度に於ける來世の幸福の觀念は、必ずしも外形的の報酬を意味するにあらず、寧ろ宗教上及道義上人生の運命を理想的に成就すること、即ち誠なる内部の完全の理想也。固より此中には完全なる満足を含むず、これ實に世界の永遠の秩序に基くものにして、満足の感情と目的の完成とは常に相隨伴するもの也。満足の感情は其目的を達するの表識及之に伴ふ第二の結果なれども、之を以て直ちに其目的と爲すべきものにあらず、されば純潔なる道徳心に於ては、天國の福祉はこれ其目的にあらず、神と交り神に齊しき自

己を完全に發達せしめたる表識にして、又常に之と隨伴する結果也。かゝる區別を立つるに於て一方には自然的主樂主義を避け、他方には非自然的厭世主義に陥るの道を斷つ、而して此區別は緊要なるには相違なしと雖も、人心の働を覺悟するもの、熟知せるが如く、實際的生活に於ては、理論上の區別を明畫すること能はず、混雜したる人心の諸動機の中に於ては、純潔なると不純潔なるとは、互に相混淆して其間を明劃するや難し、故に之を區分して各個の道義的行爲を定め得るものは、獨り人心の潜底を洞察するものに限る。去れば是等の事情に關し、理論上より嚴密に其潔不潔を辨難するは、これ寧ろ無益の業なれば、靈魂の保護者若しくは教育者たるものが、其程度に従ひて、或は高尚なる動機を用ひ、或は較々劣等なる動機を用ゆるが如きは、これ其人の權内に屬するものにして、吾人は敢て之を非難すべきの道理なし、幼稚者に向ひては、其徳を奨め、其不善を責むるに神の賞罰を以てし、完全者の間に在ては、知恵を語り、(コリント前書第二章第六節)即ち總の道理よりも高く常に吾人の心中に於て實驗し、死も亦之を奪ふこと能はざる神の愛を以てするとは、其人の自由の撰擇に一任して可也。

今や余輩は靈魂不滅の希望に關する、高尚なる理由につき陳辨する所あらんとす、これ蓋し吾人の品性をして愈々高尚に發達せしむる觀念也、聖書に曰く、爾等天父の完全なるが如く、亦自らも完全なるべしと、此簡明劃切の語は、人類の運命を最も好く表明せり、抑完全とは其本性を圓滿に實成するの謂なり、去れば人類に命して自ら完全なれよとの事は、其天賦の固有なる神性をして、圓滿に發達せしむることなり、今や吾人が本性中に於て神に齊しき神性なる分子は、理性の能力なり、此理性は吾人が神人及萬有に對する智情、意の動作に依て顯はるゝが故に、人類の運命は左の如く結論し得べし、吾人は吾人が理性をして智情、意の動作に於て、神に於けるが如く實成ならしむ、又知識上の理性は真理なり、心の理性は愛なり、故に人類の運命は、神及世界に對し、愛と真理とを養ふにあり、此真理と愛との二者は、決して相離隔すべからざるものにして、吾人は眞誠と認むるものにあらざれば、眞に之を愛すること能はず、また眞に之を愛し之と交らんことを望むものにあらざれば、眞に之を知ること能はざる也、今や此知識と愛との目的は神なり、彼は即ち真理と善にして有ゆる世界に存する真理と善との本源也、去れば神のみにあらず、又世界のみにあ

らず、寧ろ神及び彼より出たる一切、即ち一切の善、一切の誠を其中に懷抱する神を知り、且つ之を愛し之と交通するに至るは、これ即ち人類の運命を全ふしたるものにして、之を稱して神に齊しき、又は神の中にある生活といふ、これ即ち己に等しきものを造り、之と交通せんことを望める神の智慧と其愛との目的を完成するもの也。

上來叙述せし人類の運命に關する理想は、實に高尚にして、吾人は一見して其理想と實際との間に隔離あるを認めざるを得ず、此世に於て最も智慧あるものと認められたるもの、知識は實に狹隘にして、又最も愛心深き者の愛も實に淺薄なり、濟々たる幾多の偉大の人物は其盛時に於て消失し、多くのものは其萌芽に於て凋落するが如きは、これ甚太だ普通の實驗なり、人類の多數は、常に此理想を距ること遠く、又此理想あるを知るの機會だに得ずして没落し去る也、去ればかゝる理想は一般人類に對して、犯すべからざる權威を持つると雖も、其實際右に述べたるが如き有様なるにより、中には喪心落膽して、到底かゝる理想は吾人の企及し得べき所にあらずとして、爲に怠慢無氣力に陥るものあり、或は之を以て余りに高尚に過ぎたるも

のを見做し、現實の生活の程度に應ぜしめんが爲に、其理想の程度を較劣等ならしめんとするものあり、孰れに歸するも此理想と實際の生活との隔離の大あるにより、之に達せんと欲するの精神を挫折せらるゝ也、去れば此喪心落膽若しくは怠慢無氣力の弊を矯正するに最も有力なるものは、現世を以て人類存在の斷片とし、將來に在て永久不滅の存在あるを知る事なり、現世に於ける各個人の心靈上の發達は甚だ不完全なりと雖も、來世に於て尙永遠に之を發達せしめ、其不足を補ふの機會あることを以てする也、斯の如くせば一方よ於ては喪心落膽者を慰め、彼等の苦心經營は決して無益にあらず、來世に至り終に其好果を結ぶの期あらん事を以てし、怠慢無氣力にして劣等なる現世の生活に満足するものには、彼等は現在の事情のみを以て満足すべからず、尙ほ進みて彼等の爲に設けられたる永遠の運命に向ふべきことを刺戟獎勵す、靈魂不滅の希望は、喪心佗僚なるものを慰め、怠慢碌々たるものを勵し、人生に於ける其效莫大なるにより、人類が假令理論上より之に疑團を容るゝの餘地ありと雖も、尙ほ之を放棄せずして固守するは至當なり、然るに余輩が茲に述べたる如く、理論上よりも亦かゝる疑團を容るべからず、實に此希望は

人類の至寶として永久保存すべきもの也、吾人の固より來世の狀態につきては更に知る所なしと雖も、是れ以て希望の價值を減ずるに足らず、斯の如きは嘗に來世の知識に於けるのみならず、余輩は現世に於ける人類の悠遠なる後世の狀態の知識に關しても、亦同様たらざるべからず。

來世の狀態に關して吾人が詳細に知了し得ざるは、嘗に無害なるのみならず、亦人類現時の狀態に於ては、寧ろ有益なりと信ず、來世の事情の不明なるは、人をして來世を希望するの餘、却て現世を輕じ、現時の義務を忽にするの弊に陥るを避けしむ、現世の價值を輕じ其義務を怠り、唯來世の方角のみ、其心思を鐘めんとするが如きは、これ靈魂不滅の説を主張するもの、常に陥り易き弊害也、茲を以て其反對論者より、靈魂不滅の信仰、來世の希望の如きは、現世に於ける實際の幸福を輕じ、又其義務を怠らしむる、有害なるものとの批難を來さしめたり、而して夫のクラッセーは巧に此批難を避くるの道を開きて曰く、吾人が生涯中の各時期は其期に特有なる價值と威嚴とを具備せり、而して各時期は後來の準備若しくは方便の爲にはあらず、斯の如く吾人が地上に於ける生涯は、之を來世の生涯に比して、決して無價值

なるにあらず、現世特有の威嚴を存す、固より此を以て彼に比すれば、僅に存在の断片たるに過ぎずと雖も、敢て其特有の價值を毀損すべからず、現世と來世との間に於て、外形の事情は大に異なることあるも、各個心の内心の發達の理法に於ては、現世も未來も更に異なる所なしと、これ使徒パウロの主張せし、永生は已に信仰に依て此世に始り、來世に於ては愈々發達し、愈々富饒に至るに過ぎずと云ひし、辭と符合せり。

來世の狀態の不明瞭なるが故に、尙ほ一個の有益なることあり、即ち其不明瞭なるが故に各人自己の實際的必要に應ずる所の狀態を自ら描出すること、是れ也、此點に就きては、バイブルに於ける、末日の事の如きは、其種類甚だ多きを以て却て便利となれり、かゝれば來世の狀態に關し、獨斷的教義を固守し、以て互に相争ふは無益中の最も無益なり、來世の狀態に關する二個の相異なる形状あり、これ二つながら人情の自然より發したるの結果なれば、彼此共に正當なりといふを得べし、其一は未來の狀態を以て完全なる安息となし、他は之を以て完全なる活動の場所と爲す、前者は惟へらく現世に在ては煩累、勞苦、窮難多端にして、誠なる安息を得ること難

しと雖も、來世に於ては是等の事情を脱離して、神の供へ給ひし完全なる安息に入り、平和と喜悅の中に在て神及其聖徒と交ることを得んとを望み、之を以て自ら慰めつゝある也。這は實に高尚なる思想にして、假令自己の思想と異なる所あるも漫に之を卑下すること能はざるべし、かゝる性質を有するものは、是等の希望に依て慰籍と安寧とを得るもの也。彼等は所謂近世の文明と稱する煩忙多端なる現世の狀態を以て、夫の黄金の牛の周邊に於ける、亂雜なる蹈舞の類と認め、敢て是等に満足を置く能はず、彼等は此世に在ては自ら旅人なりと思惟し、天國に於ける佳住を望みて止まざる也。而して、其二は常に活潑なる動作を喜ぶ所あるにより、其心は常に現世に於て運動の機會あるを樂む、即ち彼等の希望する天國の狀態は、間斷なき活潑なる働を爲し、更に疲勞することなくして神の業を爲すことなり、これ實に勇氣ある思想にして人の精神を鼓舞し、人をして活潑ならしめ、又活潑なる運動の中に於て、幸福と満足とを得せしむ、これ夫の「グリーター」等の代表せし思想也。右に述べたる來世の狀態に關する二種の希望は、必ずしも互に相反對し一は眞理にして、他は不眞理なるを以て、必ず二者其一を撰ばざるべからずといふが如きも

のにあらざり、我等の天父の家には居宅多し、去れば彼處に到るものは各其特性に従ひ、彼には完全なる安息を與へられ、此には完全なる働きを與へらるゝことあるは、亦疑を容るべからず、現世にありても宗教心の發現に二個の形狀あり、一は沈思又は安息なる崇拜に於てし、他は道義上及知識上の活潑なる動作に於てす、是等の動作は此世に在ても、日々夜々間斷なく繼續するものなれば、來世に於ても斯の如くならざるべからず、吾人は其形狀に於て更に知るなし、唯目未だ見ず、耳未だ聽かず、人の心未だ悟らざる所、即ち神が彼を愛するもの、爲に豫しめ備へ給ふ所を信するの外なし、余輩は今や奥義の前に立つものなり、何人も其帳幕を排して内部の狀態を探檢し得るものあらざるべし、去れば余輩は此世に於ける宗教心の發現につき、これより陳辨する所あるべし、即ち神に仕ふる二個の形狀にて、其救き意味より云へば禮拜の形狀、其廣き意味より云へば道義的、實際的及理論的の形狀に於て顯はれたる所なり、かゝる發現は不完全なるに相違なしと雖も亦全く無益なるものにはあらざる也。

第九章 禮拜及教會

五百八十二

宗教の本質は其來世に關する希望の性質に依て顯はるゝとの事、果して正解の言なりとせば、余輩が前章に於て陳述したる所は、正に余輩が嚮に主張したる宗教の性質に關する諸説を確む、即ち宗教の本質は世界を支配する神能と、自己の生活とを連環せしめ、之と親交を要するにあり、而して禮拜は此意識を直接に顯はし、此希望を満足せしむるもの也、禮拜を稱して表演的動作 (Representing action) といふは、不當の言にあらず、蓋し禮拜の目的とする所ハ外界にあらず、また之に依て始めて宗教心を發起するにもあらず、禮拜は已に普通の宗教心あることを假定し、一切崇拜者に通有なる詞と動作に依り、其内心の實驗を外形に顯さんと欲するものなり、各個の崇拜者は、禮拜を以て自己の感情を表號的に顯はすものと認め、又一切人の觀念、感情、及意志の動作は、皆一處に鐘り、以て互に相扶け相強むるもの也、而して禮拜は斯の如く表演的動作にして、多少美術的表現と關係する所あるは疑ふべからずと雖も、之を以て單に美術的のみとするは、未だ以て禮拜の意義を盡したるものといふべからず、禮拜は美術的分子の外、尙道義的及結局原因的の分子あり、是等は

決して輕々看過すべきものにあらざる也、禮拜には其遂げんと欲する目的あり、然れども其目的たるや、外界にあるにあらず、また實に神にあるにもあらず、夫の素樸なる宗教心は其禮拜を以て、或は神の心を動かし、又は其動作の形狀を變更せんとを望めども、これ未だ直接なる禮拜の目的にあらず、禮拜に依て得んと欲する結果は、之に與かる崇拜者の内心に存す、即ち彼等をして神の感化を受くるに適當なるものと爲し、若しくは其感情を作興し、其神と交り神と親む宗教的關係を、實際に成就せんとするもの也、去れば余輩は禮拜を以て、其崇拜者が神と活潑なる交通を爲さんと欲する希望を實際に成就せんが爲に、其内部の實驗を表演的に顯はすものとせざるを得ず。

禮拜には明白に區別すべき兩側面あり、此區別と其間に於ける密着なる關係とは、禮拜の眞意を解するに於て、甚だ重要なもの也、一方より之を見れば、禮拜は其崇拜者が神と活潑なる交通を爲さんと欲する、所謂自發の動作にして、其極は已を擧げて全く神に服従するにあり、他方より之を見れば、これ即ち神と活潑なる交通を爲すの實驗也、此實驗は神の賜物にして、崇拜者は唯之を受くるに止まる、舊約書に

於ては前者を神の顔を求むるといひ、後者を神の顔の前に喜ぶといふ、これ其だ深意ある言なり、基督教に於ても此兩側面は其禮拜の基礎にして、殊に聖晚餐は此二個の側面より成立せり、然るに近世に至りて此二個の側面は互に相容れざるに至り之を分別せんと試みるが如きは、これ實に無用の業と謂ふべし、第一禮拜は人類の宗教的動作、第二禮拜は神の賜物を受るの方便なり、即ち恩恵の方便にして人は唯之を受るの外なし、余は全く此兩者を分別して互に相容れざるもの、如く看做し、また之を以て議論の争點と爲すが如きは、最も無益の業と云はざるべからず、若し能く之を考察せば、此兩側面は必ず相離るべきものか、又は決して離すべきものにあらざるかを明白に覺悟すべし、禮拜にして若し唯人類の動作のみにして、更に之に應ずる神の動作なしとせば、これ實に目的なき空虚なる儀式のみ、更に宗教的價値を有せざる審美的の娛樂たるのみ、然れども禮拜にして更に人類の宗教的、道義的動作によらず、唯神の賜物を受くる純然たる方便のみと爲さば、これ即ち魔術なり、何となれば其中に崇拜者の宗教的生活に於ける靈の分子を含有せざればなり、余輩は不用意若しくは單に形骸上の用意のみを以て、神靈の働に與かるとい

ふ觀念に下すには、必ず魔術の名稱を以てせざるべからず、かゝる觀念は心靈的若しくは道義的宗教に屬するものにあらず、寧ろ自然宗教に屬すべきもの也、靈と誠とを以て神を崇拜する宗教に於ては神の救済を受くる實驗は、其人自身の心の動作に依らざれば、決して之を得ること能はず、苟も其救済の實驗を得んと欲するものは、其知恵、感情及意志をして悉く活動せしめ、自ら活潑に其事に與からざるべからず、全く受動的なるものは一の天啓を受くることなく、又一の恩恵をも蒙ることなし、唯其靈魂が發動して熾に之を求むる時に於て、始て其内心より現出し來る也、又神と交るの感情盛なる時に當り、始て神の光と命とハ其中に顯はれ、之を活潑ならしめ、自由ならしめ、光澤あらしむ、固より是等の事情は心靈の中に起る作用にして各個の「エーゴ」が專恣的若しくは反省的の動作に依て、自ら之を形造するものにあらず、唯神より來る力の働として實驗するのみ、人は此働に對し單に受動的の地に立つものなれども、斯の如き働を受くるには、其人の内心の働即ち余輩が曩に救済を來すの信仰なりと稱せしもの、若しくは其全心を舉げて、全く神の恩恵に服従する、自由なる動作に依て始て得らるべし、人は禮拜により其心を開發開明し、神の感

化を受けて之に服従し、以て自己の生活の一部となすに至り、始て生ける神の力を得、之に依り自己の生活をして高尚ならしめ、神に親しく、又は神と連環せしむるの實驗を得る也。かゝる實驗を稱して神と神秘的に交通するものといふは、甚だ適切の語なり。斯の如く神と人類は神秘的に交通するは、これ即ち禮拜の神髓又は目的にして、一方に於ては空虚なる表號的儀式の弊を避け、他方に於ては非心靈的なる魔術、即ち儀式許りの供物の誤謬に陥らず、其中間に立つ眞誠なる禮拜の解釋と云ふべし。

右述の如く禮拜には兩側面あるにより、其所作は決して單純なるものにあらず、却て複雑、即ち戯曲なり。今此語を技術上に假りて宗教上に適用するを見て、必ずしも不快の感を起すに及ばず、余輩が之に附するに戯曲の總念を以てするは、唯其形状をいふのみ、即ち禮拜は宗教心を外形的に表演する動作といふに過ぎず、固より其之を表演する事柄には種様ありて、下は大陽若しくは自然界の諸現象の變轉に基く異教の鬼神論より、上は基督教に於ける最も高尚なる禮拜の如き、人類の感情的生活を最も理想的に表演するが如きものなり。余輩は今此兩者の間に大なる相違

あるを輕視し、若しくは基督教の高尚無双なるを否定するものにはあらざれども、孰の宗教に在ても其禮拜の形狀に於ては、悉く皆戯曲的にして其宗教心の動作及宗教的關係を表號的に顯はしたる、複雑なる所作なりといふは、決して不倫の言にあらず。禮拜の所作は斯の如く複雑なるにより、之を正當に了解せんと欲せば、其中を個々別々に攻究せず、全軀を總括して考究せざるべからず、これ宗教上の現象を解するには、甚だ緊要なる事にして、普通に世人が考ふるより尙一層精覈なる攻究を要す。今宗教歴史に就き右の事實を考究するに當り、余輩は夥多の例證を得たり。太古に於ける禮拜は、自然界の諸現象に依て現はれたる神の生活を戯曲的に表演し、以て神人間の交通を爲さんと欲するに過ぎざりし。自然宗教に於ける春秋祭の儀式の如きは、那邊に於ても、命と光の神の遠近出沒することを表演したること明也。人類は其神が遭遇せる運命を是等の儀式に依て顯はし、彼等も自ら之を實驗せんと爲したり。埃及に於ける「イシス」(Isis)が「オシリス」の爲に愁嘆せし事、シリヤに於ける陽神「メルカルト」(Melcart)若しくは「アドニス」の結婚と死、エリユスに於ける「デメートル」(Demeter)が「下界に奪去されたる彼の娘「コーレ」の爲に悲嘆に暮れ、之を追

跡し終に尋究し得て母子再會せし事、アテシスに於ける「デオニッス」(Dionysus)の死と復活の如き、總て是等の事を演じたる禮拜の形狀は、純然たる戯曲にして普通の戯曲の本原たるに適當したる所ありき、去ればにや世人の知る如く、普通の戯曲は「デオニッス」の祭禮式より發達し來りしといふも寔に故ある也、人類は斯の如く諸神の遭遇せる運命を戯曲的に表演し、以て自ら之に關與するにより、諸神も亦之を補佐するならんとの信仰より、誕生、成期、婚姻及死の如きものに關して、宗教的慣例の起りしなり、是等の儀式は諸宗教に於て齊しく見る所にして、最も劣等なる太古の蠻人間に行はれたる宗教心に於ても亦齊しく見ゆ、果して然らば禮拜の目的たるや、最下等より最高等の宗教に至るまで、其目的更に異なる所なく、世界を支配するの力、若しくは神と交通して宗教的關係を實成ならしめんとするにあり、夫の物を供へ祈を捧ぐるが如きは、唯禮拜中の一部分にして、其禮拜の目的を達せんとする方便なれども、恐く是等は最古の禮拜式にはあらざりしならん、

供物の起原を推究するに、これ單に人類が其信する神と會食せんと欲するにあり、彼等神の爲めに飲食物を携へ來り、之を焼き或は地上に注ぎ、以て神に供へたり、蓋

し火と地とは自ら神性にして、是等の供物を通達するものなれば也、然るに後世に至り禮拜の儀式悉く祭司の手に落ち、供物の意義一層狹隘なるに至り、神と人と會食するとの原意は、漸次に湮滅に歸したれども、會食は必然供物の原意たるに違はず、其目的たるや神を招し偕に會食し、之に依て神人の交誼を厚くし、同盟の約をも堅牢ならしむるにあり、或は人類の爲に働く所の神を勵し、之を強からしめんとするの意義をも含有することもありき、これ印度に於ける「ソーマ」の供物の意義なり、然るに神の觀念自然に高尚となり、其威嚴益々赫たるに至り、始め神人間の同盟を堅くする方法、若しくは親和の標號たりし供物の意義一變し、下僕が主人に對し、屬國の王が其盟主に貢するが如き意味を含有するに至り、其供物は或は已に受けたる恵を謝するの意に出でたるもあり、或は將來に於て希望する所を得んか爲にするものありて、竟に感謝の供物又は祈願の供物となれり、贖罪的供物の起原も亦必然人類間に存したる、律法的觀念より來りしならん、其起原を究むれば、是等の供物は謝罪の標號として、其罪を贖ふ爲に其人各自若しくは其親戚朋友より供ぶるもの也、若し其罪は他人數の團體に歸し、衆人連帶して其責を受けざるべからざ